

関西大学ピア・コミュニティ 平成 27 年度報告書

関西大学

関西大学ピア・コミュニティ 平成 27 年度報告書

関西大学

「平成 27 年度報告書の発刊にあたって」

関西大学学生センター所長

黒田 勇

学生支援プログラム「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」は、「学生総ピア・サポート体制」をキーワードにして、学生が豊かな人間力（21世紀型学生気質）を備えるとともに、本学独自の知徳体を融合する学生文化（学生が主体性をもって構築するキャンパス環境）を育み、卒業後に 21 世紀の知識基盤社会を支える「社会人基礎力」を備えた人材養成を目指した取り組みです。この取り組みは平成 19 年度学生支援 G P に採択され、平成 22 年度まで文部科学省からの財政支援を受け、運営を行ってまいりました。そして、平成 23 年度からは、本学の「G P 取組継続に係る経費支援費」により運営を行い、その間も学生たちによる多様で活発な活動が行われてきました。

これまで本取り組みは、教職員や大学院生（学生支援室 R A ・ T A）の指導のもと、学生自らの手で組織を立ち上げ、プログラムを企画・立案、実行してまいりました。そして、「社会人基礎力の向上」「学生と大学（教職員）との連携の促進」、従来とは異なる新しい課外活動の機会を提供することによる『居場所』の提供、学生が学生支援を提供する側となることによる「人的資源の拡大」「学生のニーズに適応した学生支援の提供」といった成果をあげ、現在も 100 名を超える学生がピア・コミュニティに所属し、ピア・サポート活動の実践に励んでおります。

ただ、上記の経費支援は最長 5 年間という有期のものであり、平成 27 年度をもって終了となりますが、今後も継続的・発展的に活動していくために必要となる支援やシステムについて検討を重ねた結果、平成 28 年度以降について予算を経常費化し、取り組みを継続発展することができるようになりました。この 9 年間に根付いた「学生が求める学生支援を、学生自らが実践する」という文化が、関西大学全体にさらに広まることによって、より魅力的な関西大学の実現にも寄与するものと確信しております。これもひとえに学内外各方面からの多大なるご協力をいただいたおかげであり、ご指導ご鞭撻を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

今後もピア・コミュニティに対して、教職員・学生支援室 T A による重層的な支援を行い、さらに、「学生が求める学生支援を、学生自らが実践する」本学独自の学生支援体制の確立に向けて取り組んでまいりますので、本取り組みに対する皆様のご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

プログラム概要

プログラム概要

○取組紹介

本学生支援プログラムは、関西大学の学生が豊かな人間力（21世紀型関西大学学生気質）を備えることにより、本学独自の知徳体を融合する学生文化（学生が主体性をもって構築するキャンパス環境）を育み、卒業後に21世紀の知識基盤社会を支える人材として活躍するために必要な「社会人基礎力」を修得することを目的とする。平成20年度から実施された「全学共通教育改革」と連動して、ピア・サポート養成に関する正課及び正課外教育システムを構築し、その教育成果として意識改革を果たした学生たちが、自ら考え方行動（考動力）できる体制を確立させた「ピア・コミュニティ」の創設を目指す取り組みである。

○事業組織

事業推進責任者	:	黒田 勇 学生センター所長（社会学部・教授）
事業推進者	:	赤尾勝己 学生センター副所長（文学部・教授）
事業推進者	:	田中俊也 正課教育コーディネーター（文学部・教授）
事務担当者	:	中塚義史（学生サービス事務局長）
事務担当者	:	綱木 寛（学生サービス事務局次長）
事務担当者	:	堀 律子（ボランティア活動支援グループ長）

○各種会議

本補助事業の実施運営にあたり、「学生支援連絡協議会」、「学生支援運営会議」、「ピア担当者会議」といった3つの会議を開催している。

■学生支援連絡協議会

本プログラムを実施運営するにあたっての意思決定機関。

■学生支援運営会議

本プログラムの具体的活動内容等を協議、実行するための機関。

■ピア担当者会議

ピア・コミュニティの主旨や活動内容において、各学生支援部署との相互理解、情報共有を図り、ピア・コミュニティの創出を実現するための機関。

【平成27年度】

日 稲	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
学生支援連絡協議会	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
学生支援運営会議	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ピア担当者会議	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3

目 次

1 正課教育の報告	
1.1 「学生総ピア・サポート体制」はどこまで実現できたか？	1
1.2 平成27年度正課教育科目的授業内容について	4
2 ピア・コミュニティの活動報告	
2.1 ピア・コミュニティ活動のあゆみ	7
2.2 ピア・コミュニティの活動	11
2.2.1 ピア・コミュニティ運営本部	11
2.2.2 国際コミュニティ “KUブリッジ”	19
2.2.3 ピア・スポーツコミュニティ (PSC)	30
2.2.4 KUサポートプランナー (KUSP)	31
2.2.5 KUコアラ	42
2.2.6 KUサポートアーズ	48
2.2.7 びあかんず	57
2.2.8 関西大学ITピア・コミュニティ “i.com”	58
2.3 ピア・サポートからのメッセージ	59
2.4 支援部署職員からのメッセージ	64
3 ピア・サポートの育成	
3.1 ピア・サポートの育成	67
3.2 シニア・サポートの活動	69
3.3 関西大学ピア・サポート研修	72
3.4 スキルアップ講座	75
3.5 効果測定	83
4 学生支援室の活動報告	
4.1 学生支援室の役割と主な活動	91
4.2 新規TA研修	92
4.3 学生支援室TAからのメッセージ	94

1 正課教育の報告

1.1 「学生総ピア・サポータ体制」はどこまで実現できたか？

正課教育コーディネーター

田中俊也

平成 28 年に創立 130 周年記念を迎える我が関西大学は、18 歳から 22 歳ころまでの若者を中心に、毎年学生を受け入れ、育て、社会に輩出するという営みを連綿と続けてきた。そこでは永く、学生は教育サービスを受ける存在、教員・職員がそのサービスを提供する存在、と暗黙のうちに固定化された役割を担うことが前提とされてきた。

しかしながら近年、学生には本来、同じ仲間をお互いに助け援助する力が潜在的に備わっているということが見直され、それを、従来教育サービスを受けるだけの存在とみなされてきた学生自身の「教育力」¹⁾と捉え、積極的に「活用」しようという流れがしてきた。ここでいう「教育力」とは、「相手がよりよい存在になるよう働きかける力」のことであり、生活面や学習面いずれに対する働きかけも含む。

こうした中で、本学は平成 19 年度学生支援 GP に採択され、平成 22 年度まで文部科学省からの財政支援を受け、「広がれ！ 学生自立型ピア・コミュニティ」の実践をおこなってきた。この取り組みは「学生総ピア・サポータ体制」をキーワードにして、学生が豊かな人間力を備えるとともに、本学独自の知徳体を融合する学生文化（学生が主体性をもって構築するキャンパス環境）を育み、卒業後には 21 世紀の知識基盤社会を支える「社会人基礎力」を備えた人材となることを目指した取り組みであった。いわば、仲間の学生への精神/生活面のサポートを中心とした学生の教育力活用の取り組みで、加えて、当該の学生自身の人間的成长も図ったものであった。もう一方の、仲間の学生への学習面でのサポートは、その学生の履修している科目の担当教員の補佐を通してサポートするという取り組みであり、これは小職が平成 23 年、教育開発支援センター（CTL）長に就任して直ちに取り組み、TA/LA の全学的活用の取り組み²⁾という形で展開してきた。こうした、精神/生活面・学習面での学生の持つ潜在的教育力を大学の運営そのものの一端を担うものとして活用することは極めて重要なことであり、それを十分に理解されて対応していただいている法人・教学両トップに対し心から敬意を表するものである。

前者の、「学生総ピア・サポータ体制」構築の取り組みの大きな特徴の 1 つとして、この事業を推進していく上で新たに「関西大学におけるピア・サポートを考える」という科目名の正課授業が開設された。ここでは、「ピア・サポート」の本質を考えるとともに、ピアの

コミュニティを学生自ら立ち上げるという大きなミッションを担ってきた。その取り組みの本気度を示すものとして、当初、現在の理事長・法人本部長・大学本部長等、要職につかれている方々がそれぞれ前の部署におられた時、この授業の講師として教壇にも立っていただく、という斬新な試みも行うことができた。法人・教学ぐるみで総ピア・サポート体制構築に取り組んだ、といえるであろう。

その後、授業そのものは当初の「関西大学におけるピア・サポートを考える」という科目から、全学共通教育推進委員会の協力を得ての「関西大学ピア・コミュニティ入門」「関西大学ピア・コミュニティ演習（平成 23・24 年度）」に、さらに 25 年度からは「関西大学ピア・コミュニティ入門」という、演習を中心とする科目に一本化し、現在春学期に 3 クラスが開講されている。

小職は本事業立ち上げのときから正課授業のコーディネーターとして、その授業設計・運営の一端を担い、上述の法人要職の方々始め、大学院生、CTL の専任の先生方等多方面からのご協力を得て本事業を推進してきた。文科省の財政支援が終了した後も平成 23 年度からは、本学の「GP 取組継続に係る経費支援費」により運営が継続でき、関係各位のご努力のおかげでこれまでの 9 年間で 8 つのピア・コミュニティの立ち上げ・運営、各種プログラムの企画・立案・実行等の成果をあげてきた。

業務の PDCA サイクルの「C」の機能の観点からこれまでのピア活動における正課授業の役割を改めて見直すと、上述のような形でこうしたピア活動に対する正課授業の一定の役割は果たしてきた³⁾ことが確認できる。ただ、当初のキャッチコピー「学生総ピア・サポート体制」構築が叶ったかどうか、という点については、正直なところ疑問点が生じる。ピア・サポート「体制」という 1 点に絞っても、その事務的サポート体制は「ボランティア活動支援グループ」に含まれる形で明確になったが、関わる学生の総数からすれば、「総ピア・サポート」の理想には程遠いことを認めざるを得ない。しかしながら、そういう理念を実現できる種（シード）がしっかりと根付いたことは大きな成果だと認めていいであろう。

さて、次にどうするか（A）ということで言えば、まずは、この GP の取り組みに始まつた正課授業は一定の役割を終えたので、本年度をもって閉鎖することとなった。その報告をし、これ以上のこととは小職の職掌を超えるので控えめに以下に提案する。

- 1) 1 つは、総ピア・サポート体制の種が根付いたので、この「文化」を継承⁴⁾するしきけ（ニア・サポート制度等）を維持・発展させることである。それに関連して、内外の関係する講師を招いての研修を充実させることである。

2)2 つ目は、学内の関連する人的リソースを有効に活用することである。「シニア」としての大学院生やこのピア・サポート関連の学会等に関わっている職員等の起用を促進することである。

3)さらに、学内には障がいを持つた学生の支援の部署が学生センター、ボランティアセンター、教育開発支援センターとは別の部署として存在する。広義でのピア・サポートという意味では軌を一にするものであり、その連携は必至である。

以上、本年度で正課授業を閉じるにあたって、本報告書での最後の登壇、という意味で少し駄言を吐かせていただき、これまでの正課授業の締めくくりとしたい。

永年の関係各位のご理解・ご協力に深く感謝いたします。

(注)

1)田中俊也・岩崎千晶 (2012). 学びをサポートする学部生・院生の教育力の活用 関西大学高等教育研究,3,1-11.

2)田中俊也 (2013). 「学生の教育力活用」が全学展開に！ 関西大学教育開発センターニュースレター,11 号.

3)Tanaka, T., Yamada, Y., and Oshie, T. (2009). Developing Peer-Support Skills in Students. International Perspectives on the First-Year Experience in Higher Education. The First-Year Experience Monograph Series, 52,55-60.

4)田中俊也・山田嘉徳 (2015). 大学で学ぶということ：ゼミを通した学びのリエゾン ナカニシヤ出版

1.2 平成27年度正課教育科目的授業内容について

科目担当者 三浦真琴・山本敏幸・田上正範

本科目では学内外を問わず支援を必要としている人たちと、どのように関係を取り結び、相手が必要としているサポートをいかにして提供するか、それを真摯に考えた上で実際に行動に移す際に何に留意しなければならないか、そのようなことを総合的に判断し、実践する力を身につけることを目的としている。実践のステージは大学内に限らないし、サポートする自分ならびに相手を学生に限定することはしていない。かかるサポートの必要性について学生は頭では理解しているが、実際の行動に結びつけていくことに困難を感じている。そこで実践に必要な考え方・姿勢・スキルなどを可能な限りわかりやすい「かたち」で提供し、試行錯誤を体験しながら、少しずつ行動する力を身につけていくことをまずは目指すことにした。現行の教育メソッドを採用して3年を数えるが、それは受講生が多面的な視野を持ち、深い思考をすることを目指すものである。そのような力を携えた学生をまずは本学のピア・コミュニティで、ひいては卒業後により広いコミュニティで活躍できるように育てていくことを目標に授業内容と方法に工夫を凝らした。

今学年度、開講した3クラスには、それぞれ30余名の受講者があった。担当教員のほか、LAやTAも積極的に関わって受講者の参加を促す全員参加型の授業を実践した。信頼を築くためのコミュニケーションを構築することを主眼として、チームベーストランーニングモデルを活用し、テーマ・題材を受講生の身近に求めて、課題発見・解決型のグループワーク演習を開催した。以下に、昨年度までと重複する事柄はあるが、今年度、特に留意した点について報告する。

1. 繙続的なグループワークの実施

ピア・サポートには質の良いコミュニケーション力が必要である。コミュニケーション力をいくつかの要素に分類すると、大きくは発信力と受信力ならびに両者を統合する力の三つが考えられる。その力を身につけ、伸ばすためには、そのことを強く意識した日常生活を送る必要がある。かかる「意識した生活」は講義形式の授業において、断片化された知識を転移することによって実現されるものではない。その力を獲得していくプロセスを少しずつでも体験し、積み重ねていくことがハビトゥスへの階梯となる。そのように考えて、授業ではグループワークを主としたTBL型の授業を開催した。

2. きわめてシンプルで身近な問題から着手する

グループワークにおいて扱うテーマを受講生の身近なところに求めた。その際に特に留意したのは「さまざまな立場に我が身を置いて想像する」ことである。「人の立場になって

考る」、その意味深長なることは頭では分かっているつもりでも、それを実践に移すことはなかなかできるものではない。これを可能にするためにはコミュニケーションの基礎となる傾聴力・気配り力を涵養し、相手の視野・視座に配慮した判断力を育てることが必要である。そのことを受講生自身が気付くようなテーマを選定し、グループワークを開いた。

3. 学内外で主体的に活動している学生を知る

学生の中にはピア・サポートは「特別なこと」であり、ピア・サポートとして活動するのは限られた人だと誤解している向きもある。そこで学内外でピア・サポート活動をしている学生に登壇してもらい、何故そのような活動に参加しようと考えたのか、活動に参加してみてどのような発見があり、自分自身にはいかなる変化があったのかについて話してもらった。「活動に参加する前は消極的な人間だったが、ある日ある時、何かをきっかけに一步を踏み出してみたら…」というライフヒストリーは多くの受講生の胸に届く。活動の場所が国内であれ、海外であれ、サポートの内容が家を建てるという大がかりなものであれ、そうでなかれ、そこに通底するものを学生は感得したと思われる。

4. 「交渉学」を体験する

ハーバード流交渉学は契約成立のためのスキルの集合体ではない。相手との信頼関係を如何にして築き、それを継続させるか、そのためにどのような情報が必要であるのか、現時点の相手ならびに自分における情報の過不足を的確に判断し、不足情報を入手あるいは出力するためにはどうしたらよいのか、そういったことを総合的に判断し、コミュニケーションを深め、適切な意志決定をするためのシンキング・ツールやメソッド、ケースを豊富に携えた実践的学問である。本家ではビジネスシーンを想定したケースが多く扱われるが、本科目ではサポートし、サポートされるシーンにも十分に応用が利くケースを選定、あるいは創出した。

5. ピア・コミュニティを知る

セメスターの中盤に至るまで学生はピア・サポートに必要な考え方や姿勢を様々な事例を題材にシンキング・ツールを用いることによって体験してきた。これを実践力へと育むためには、身近に感じられるケースに如何なる問題が隠されているか、それを解決するためにはどうしたらよいのかを考える体験が必要である。そこで学内のピア・コミュニティからサポートに登壇してもらい、コミュニティの活動紹介と事例、解決を求められている課題に基づくワークを実施した。

6. 自分史を描く・知る

学士力であれ、社会人基礎力であれ、重要な基盤の構築に必要なものの一つに「自己の発見（self awareness）」がある。そのきっかけとなるように「自分史」を授業教材として採り入れ、自己を省察する機会体験と、他人も自分と同じようにそれぞれの人生において主人公として活動しているということを実感してもらった。

7. その他 いくつかの新たな工夫

可能な限りどの授業回にもゲーム的要素を盛り込み、学生が興味を抱けるように工夫を凝らした。今年度も昨年度に続いて特にゲーミフィケーションに留意した。いずれも学生には好評であり、そのような機会を得ると、学生たちがアクティブになる様子を確認できたことを記しておきたい。



授業風景：TBLによるPBL学習で信頼関係の構築体験を重視した演習形式の授業

2 ピア・コミュニティの活動報告

2.1 ピア・コミュニティ活動のあゆみ

平成 20 年度に発足した「国際コミュニティ “KU ブリッジ”」、「ピア・コミュニティ運営本部」、「ピア・スポーツコミュニティ」、平成 21 年度に発足した「KU サポートプランナー」、「KU コアラ」、「KU サポーターズ」、「ぴあかんず」、そして平成 22 年度に発足した「i.com」、あわせて 8 つのピア・コミュニティが、これまでピア・サポート活動を行ってきた。

以下の表は、平成 27 年度における各ピア・コミュニティのあゆみである。メンバー不在により活動できなかったコミュニティがあり、活動の再開に向けて取り組んでいきたい。

	ピア・コミュニティ 運営本部	国際コミュニティ “KU ブリッジ”	ピア・スポーツ コミュニティ (PSC)	KU サポート プランナー (KUSP)	KU コアラ	KU サポーターズ	ぴあかんず	i.com	代表者 会議
平成 27 年									
4月	・新入生誘導活動	・Welcome Festival Spring 2015 ・Welcome Festival 2 部～global talk～		・『STOP! アルコール・ハラスメント』 ・『STEP!』～勉強の仕方を聞こう～ ・料理企画	・コアラ☆ミュージアム 第 7 弾	・ほっこり相談室 ・関大生なんでも Q&A ・ほっこり通信 2015 年度版 ・Facebook を利用した広報活動			17 日
5月	・第 1 回合宿ワーク	・global talk ・新緑ハイキング in 箕面		・『写真で伝える世界、東北の今』 ・『写真で伝える世界、東北の今』図書館特集展示	・『写真で伝える世界、東北の今』図書館特集展示				8 日 22 日
6月	・Welcome to ピア・コミュニティ ・第 2 回合宿ワーク	・グローバルキッチン part. 1		・『STEP!』～試験前の不安を解消しよう～					5 日 19 日
7月									3 日
8月					・図書館広報誌 vol. 7 の誌面作成				21 日
9月		・秋学期交換留学生キャンバスツアー				・自主勉強会			11 日
10月		・KU バザー							8 日 22 日
11月	・peer 懇いの場「はねやすめ」	・国際交流×和菓子づくり		・「輝く自分に！」 ・関西盲導犬協会総合訓練センター見学ツアーア ・関大生起業家に聞く！私の大学生生活の過ごし方		・なんでも Q&A ・KU グチコレ			5 日 19 日

12月		・No Border Party				・「聴く」と「話す」で人心掌握！			3日 17日
平成 28 年									
1月	・ピア・コミニティ ユニティ ジャンパー 作成				・コアラ通信 ・図書館広報誌 vol.8 の誌面作成				14日
2月	・入試誘導			・ココロオーラクション×関大軽音団体 SPECIAL LIVE ・Happy Valentine Cooking					26日
3月		・交換留学生 キャンパス ツアーア			ピア合宿				24日

また、平成 27 年 9 月にピア・コミニティ合同のサマーワーク（1 日研修）を、平成 28 年 3 月に合宿を実施した。

サマーワークおよび合宿は、ピア・サポートとしてのスキルアップや、ピア・コミニティ間の交流を目的に行われた。以下にその詳細を記す。

◆企画名 サマーワーク 2015

日 程 平成 27 年 9 月 15 日 (火)

場 所 第 1 学舎 1 号館 実験実習・語学系教室 1

参加者数 20 名 (ピア・サポート 9 名、研修生 6 名、学生支援室 TA3 名、職員 2 名)

目 的

- ・ピア・サポート活動で役立つスキルを身につける。
- ・コミニティの枠を超えて交流することで、サポート同士の絆を深め、同じピア・サポートであることを感じてもらい今後のコミニティ間の連携を促進する。
- ・自らのスキルアップの楽しさやおもしろさを感じてもらい、今後の自主的なステップアップを促す。

内 容

運営本部では、春学期より「合宿ワーク」（合計 2 回）や「welcome to ピア・コミニティ」など、普段は個別に活動している各コミニティの枠を超えて交流し、同じ関西大学ピア・コミニティのサポートであることを感じてもらおうと企画を重ねてきた。その効果を確かめる機会として、合宿を行うべくアンケートを行ったが、宿泊を伴うことなどに抵抗を示す回答が多かつたため、合宿形式ではなく、1 日研修会を行い、さらにコミニティの枠を超えて交流する機会を設けた。

10:00～10:05 企画説明など

10:05～12:20 運営本部企画ワーク「写真を撮って、話し合いをしよう」

13:10～14:40 スキルアップ講座「ストレスマネジメント」

14:50～16:30 TA 企画ワーク「実りあるミーティングにするために」

16:30～16:40 アンケート記入など

感 想

- ・この企画をきっかけに、今まで知らなかったコミュニティの人とも親しくなれてよかったです。
- ・運営側の人数が少ない中、上手く役割分担し、最大限の企画を行うことができたと思う。
- ・このようなコミュニティの枠を超えて交流できる機会をこれからも設定し、合宿参加者や各企画時の参加者増加につなげられるようにする。

改 善 点

- ・3つのワークとも、同じグループ・座席配置で行ったため、グループの中のみでの交流になってしまった。より多くの人と交流する時間を設定すべきであった。
- ・参加者のコミュニティに偏りができてしまった。このようにコミュニティを超えて交流することの良さを知ってもらい、今後はより多くのコミュニティから多くの参加者を集められるようにする。

◆企画名 ピア・コミュニティ春合宿

日 程 平成 28年 3月 12日 (土) ~3月 13日 (日)

場 所 関西大学 飛鳥文化研究所・植田記念館

参加者数 19名 (ピア・サポート 8名、研修生 4名、学生支援室 TA4 名、職員 3名)

目 的

- ①コミュニティの枠を超えて交流することで、サポート同士の絆を深め、同じピア・サポートであることを感じてもらい今後のコミュニティ間の連携を促進する。
- ②それぞれのコミュニティの良さや問題点などを共有し、それぞれのコミュニティの更なる発展の機会とする。
- ③ピア・サポート活動で役立つスキルを身につける。

スケジュール

1日目 : 3月12日(土)				2日目 : 3月13日(日)		
10:30	関西大学総合図書館前 集合		8:00	朝食		
13:00	開会挨拶、館内諸注意・合宿上の注意		9:00 ~9:20	○ボディワーク 「お目覚め体操」	20分	
13:30 ~15:40	○オリエンテーション	130分	10分 一休憩一			
20分 一休憩一			9:30 ~11:30	○運営本部によるワーク 「企画の参加者募集を見てもらうには」	120分	
16:00 ~18:00	OTAによるワーク 「実りあるミーティングにするために」	120分	12:00	昼食		
18:00	夕食・入浴		13:00	アンケート記入等		
20:00	懇親会		14:00	出発		
			16:00	関西大学到着、解散		

感 想

合宿への参加、企画に関わるのが初めてという人が何人もいるという状況であったが、何とか形になって良かった。広報についてのワークは今後のピア活動に生かせる内容であり、行ってよかったですと思えるものであった。

アイスブレイクだけでなくワークに関しても、他の参加者と班になって活動するなかで団結感が強まり、和気あいあいと交流を深めることでピア・コミュニティとしての連帶意識が芽生えた時間であったと思う。

全体を通して雰囲気が良く、人数が増えていけばより充実した合宿になると思うので、日頃から他コミュニティとの関わりを持ち、多くの人に合宿に来てもらえるよう頑張る。

改善点

- ・参加人数が少なく、コミュニティの枠を超えた交流が難しかった。
→合宿に来てもらえるように、日頃から他コミュニティとの連携を深めておく。
- ・当初の予定より時間が押してしまう場面が何度かあった。
→リハーサルでワークの盛り上がり具合などを確認して時間設定をする。
- ・コミュニティ紹介で放映したPVは、完成したものを見せることができなかつた。
→PVだけに限らず、合宿で使用する予定のものは早め早めの作成を意識する。
- ・アイスブレイクにしては少し時間が長いように感じた（アンケートの回答によるもの）。
→リラックスして活動でき、時間が長いと感じさせないように工夫する。

2.2 ピア・コミュニティの活動

この章では、ピア・サポートからの声を中心にピア・コミュニティの趣旨と特徴、各活動の実際を紹介する。

2.2.1 ピア・コミュニティ運営本部

■ ピア・コミュニティの趣旨

ピア・コミュニティ運営本部（以下、「運営本部」という。）は、存在するすべてのピア・コミュニティを見渡し、ピア・コミュニティ間の連携や情報共有を促す役目を担っている。そのため、ピア・サポートの合宿や研修などの企画・運営を行い、ピア・コミュニティ間の交流を促進している。このほか、関西大学におけるピア・コミュニティの普及と各ピア・コミュニティの活動支援を行っている。

■ 所属人数

22名（男10名、女12名）

*1年次生6名、2年次生4名、3年次生8名、4年次生4名（平成28年3月末現在）

■ ミーティングの概要

週1～2回（曜日は不定期。随時、調整。）

■ ピア・コミュニティ内の連携

今年度も会議の改善と研修生がピア・サポート活動に積極的に関わっていける環境づくりに努めた。

会議を1週間に1回設け、メンバーの出席率が高い日程と時間に設定した。また、欠席者のために議事録をメーリングリストで送信する、議事録をマイクロソフトのアプリonedriveに掲載するなどの取り組みによって、会議において活発な議論が行えていた。

企画を進めていく際は研修生が主体となって企画を進めていき上位年次生がサポートするという形をとった。こうすることで、研修生が積極的に関わっていく姿勢を養えた。

■ ピア・コミュニティ間の連携

運営本部はその活動の趣旨から、必然的に他のピア・コミュニティを支援する連携体制を取っている。また、合宿などの合同企画を通じて、すべてのピア・コミュニティに所属するメンバー間の交流を促進させ、連携を深めることができるよう活動している。

■ 教職員との連携について

昨年度から、サポート自身が考えて行動できるようになる中で、支援母体であるボランティア活動支援グループの教職員から、要所で助言を頂きながら活動を進めてきた。今後も適宜教職員と意見交換をしながら、学生主体のより質の高いピア・サポートを目指していきたい。

■ 昨年度からの改善点

今年度は、役職の交代の時期が夏となり、春学期は上位年次生が中心となって進めてきた。夏以降は、2年次生を中心に活動してきたが、活動人数が減り、昨年度から活動しているメンバーが少ない中で、昨年度と同等の規模の企画を行ったため、1人1人の負担が大きくなってしまった。今後は、負担を考慮しつつ、来年度中心となる1年次生にも責任のある役割を担ってもらい、経験を積んでもらうようにしていきたい。

◆企画名 新入生を迎える！（新入生誘導活動）

日 程 平成 27 年 4 月 1 日（水）

場 所 関西大学千里山キャンパス

参加者数 9 名（ピア・サポート）

目 的

- ・新しく関西大学の仲間（peer）となった新入生に対し、誘導活動を行うことで、新入生へのピア・サポートの普及を行う。
- ・ピア・コミュニティを知ってもらうきっかけとし、今後の広報活動につなげる。
- ・ピア・サポート間の交流を促進し、今後の円滑な活動につなげる。

内 容

入学式開始の約 1 時間前から、正門を中心とした学内での新入生・保護者の方の式場への誘導、写真撮影の補助及び通路確保を行い、スムーズな人の流れを維持する。
また、入学式終了時刻に合わせて、式場（中央体育館）周辺で待機し、新入生・保護者に対する誘導を行う。

効 果

新たに関大生の仲間（peer）となった新入生に対して、歓迎の意を示し、新入生や保護者の方のサポートを行うことができたのでよかった。今年度は、昨年度の活動から得た反省点や改善点を参考に、自分たちでより充実した活動となるように話し合いを行った結果、昨年度よりも充実した活動ができたと思う。事前説明会を行ったため、予め当日の各自の役割や全体の流れを把握することで当日の活動がスムーズに行え、さらに、イレギュラーな事態にもサポート同士で連携し臨機応変に対応することができた。

当日の天候は雨で、さらに正門にはカメラクレーンが設置されるなどイレギュラーな事態も多く発生したが、各サポートのこまめな連絡や協力により、日々の状況に合わせて対応だったのでよかった。

改 善 点

- ・写真撮影の列を整理する目的でコーンとコーンバーを設置したが、活動開始時刻には既に写真撮影の列ができていたため、もう少し早めに活動を開始し列が出来る前にコーン・コーンバーの設置が完了するくらいの余裕があった方がよい。
- ・写真撮影の列であるというアナウンスや案内の看板を設置すると、写真撮影のための列であることが分かりやすかった。
- ・入学式後の案内の際、口頭での説明だけでは分かりにくかったかもしれない。キャンパスマップを配付できるように持っておくとよかったです。
- ・全体を通して、案内の開始時間には余裕を持ち、もう少し長い時間、案内をしてもよかったです。

感 想

- ・昨年度からの反省点を踏まえ、自分たちで考え、誘導を実施できたことはよかった。
- ・初めての取り組みもあり、人員や備品の配置などで迷ったが、各サポートの協力や情報共有により上手く人員や備品の配置を行えたと思う。
- ・人数が少ない中 1 人 1 人がピア・サポートとしての意識を持って行動できたことから有意義な活動になったと思う。
- ・今年度は、昨年度の反省を踏まえて、新たな取り組みを取り入れ、さらに改善点などが見えてきた。来年度も今年度の反省点や改善点を活かして、より充実した新入生の誘導を行い、新入生を迎えると思う。

◆企画名	<u>第1回 合宿ワーク～ピア活動での学びについて考えよう！～</u>
日 程	<u>平成27年5月28日(木)</u>
場 所	<u>第2学舎C301</u>
参加者数	<u>15名(ピア・サポート4名、研修生4名、学生支援室TA4名、職員3名)</u>
目 的	

普段、関西大学ピア・コミュニティの各コミュニティは個別に活動しており、共に活動し、同じピア・サポートであることを感じるための場が春夏の合宿以外めったにない。その合宿さえも近年参加希望者が少なくなってきた。そこで全コミュニティ合同でワークを行って、コミュニティの枠を超えてサポート同士の絆を深めて同じピア・サポートであることを感じる場にしてもらいたい。そして絆が深まることによって春夏の合宿の参加希望者の増加に繋げたい。

なお、合宿ワーク企画は複数回実施予定であり、第1回は、ワークを通してピア活動での学びについて考える機会を提供し、ピアの重要性を再認識してもらうことを目的とする。

内 容

第1回は、教育推進部特任助教である山田嘉徳先生にワークの内容を依頼し、ピア・コミュニティ運営本部と共同でピア・サポート及び研修生を対象として実施するものである。
(ワーク内容)

ピア活動を通して身につけていきたい力などを個人で考え、ポストイットに書き出す。グループに分かれて、ポストイットの内容を分類し、ポストイット同士が関係し合ったり、影響し合ったりしそうなところに見出しや矢印などをつける。そしてまとめたものをプレゼンテーションしてもらい、最後に振り返りを行う。

効 果

- 今回の企画は他のコミュニティとの交流の促進を目的とした企画であったが、参加者が運営本部のピア・サポートを除くと4名しかおらず、全員が研修生であった。しかし、このうち3名が9月に実施する「サマーワーク2015」に参加してくれていることを考えると、実施して良かったと思う。
- ピアに入ったばかりの研修生だけでなくシニア・サポートにとっても今後のピア活動についてとても参考になるワークであり、本企画の担当者自身もピアについて考え直すきっかけとなった。

改 善 点

- アイスブレイクは案としては面白いと思ったが、準備期間が少なく、リハーサルができないまま当日を迎ってしまった。そのため、説明が口頭のみになってしまい、参加者にあまり伝わっていない雰囲気だった。
- アイスブレイクの内容が、個人で考えるものになってしまい、参加者間の交流ができていなかった。次回アイスブレイクを考える際は、なるべく参加者間で交流できるものにし、その流れでワークに入れるように注意したい。
- 山田嘉徳先生にワーク内容を全てお任せしていたため、企画担当者が関わることが少なかったので、もう少し関わることができればよかったです。

感 想

- 山田嘉徳先生のワークはピア・サポートにとってピアの活動について改めて考える良い機会になりとても有意義であった。もう一度どこかの機会で行うことができればと思う。
- スキルアップのような企画は興味がある人が少ないと感じるが、運営本部としてはこのような現状を理解した上で、ピア・サポート活動において身に付けたいスキルなどの企画を継続的に実施し、スキルアップの企画に少しでも興味を持つてもらえればと考えている。

◆企画名	Welcome to ピア・コミュニティ
日 程	平成 27 年 6 月 15 日 (月)、6 月 18 日 (木)
場 所	関西大学総合図書館 1 階 ラーニング・コモンズ ワーキング・エリア 109-A
参加者数	15 日 : 17 名 (ピア・サポート 6 名、研修生 9 名、学生支援室 TA1 名、職員 1 名) 18 日 : 17 名 (ピア・サポート 6 名、研修生 6 名、学生支援室 TA3 名、職員 2 名)

目的

- ①今年度新しくピア・コミュニティに入った研修生に対して、各コミュニティの活動内容について知ってもらうことによって、ピア・コミュニティに馴染んでもらう。
- ②先輩ピア・サポートから体験談を話してもらうことによって、研修生に自分の将来の姿をイメージしてもらう。
- ③ピアエリアの使用方法について説明することで、企画参加者が今後ピアエリアを利用しやすいようにする。
- ④研修生同士の交流を促進することで、今後活動するにあたり、コミュニティ間の連携につなげる。

内 容

- 本企画は、2 日間の実施日を設け、それぞれに参加者を募り、両日ともに以下の内容を行った。
- ・ピア・コミュニティの概要、各コミュニティの理念と最近の実施企画の紹介
 - ・ピアエリアを利用するにあたっての注意点(備品管理など)についての説明
 - ・先輩ピア・サポートからのピア・サポート活動の体験談
 - ・お悩み解決ワーク…ひとつの悩みを提示し、その解決方法について、グループで意見をまとめることで仲間の意見を聞き視野を広げ、グループ全員で一つの結論を導く過程を体験してもらった。

効 果

- ・アンケートを通して、コミュニティ紹介で「他コミュニティについてわかりやすく知ることができた」、備品・ピアエリアについて「分からぬことを聞けて良かった、実際に使用して学んでいきたい」、お悩み解決ワークについて「良い経験になった、活かしていきたい」という意見をいただいた。
- ・体験談を担当するピア・サポートを含め、参加者もコミュニティの枠を超えて幅広く集まり交流することができた。

改 善 点

- ・企画担当者間の連携がうまくとれておらず、初動が遅かった。また企画担当者全員が 3 年次生であったため集まることが難しく、運営本部の会議で諂ひの機会が少なかった。改善策として、計画性をもって企画を進め、企画担当者に 2 年次生を含めることが考えられる。
- ・備品やピアエリアの使い方に関して、時間を区切って移動するなどして、実際にピアエリアで行うほうがわかりやすかった。参加人数に対して部屋のキャパシティーにほとんど余裕がなかったため、空間・時間に余裕がなかった。凜風館 4 階のミーティングルームを予約し、企画を実施すべきであると思われる。

感 想

- ・企画担当者も、人前で話すというプレゼンテーションの機会だけでなく、グループの進行役としてファシリテーターの経験が得られた。
- ・継続的なピア・サポートや研修生の交流、備品・ピアエリアに関する周知は今後も必要であるため、このような企画や機会を設けることは必要であると思われる。

◆企画名 第2回 合宿ワーク～好印象を持たせる紹介を考えよう～
日 程 平成27年6月19日(金)
場 所 総合学生会館凜風館4階 ミーティングルーム
参加者数 12名(ピア・サポート6名、研修生4名、学生支援室TA1名、職員1名)
目 的

普段、関西大学ピア・コミュニティの各コミュニティは個別に活動しており、共に活動し、同じピア・サポートであることを感じるための場が春夏の合宿以外めったにない。その合宿さえも近年参加希望者が少なくなってきた。そこで全コミュニティ合同でワークを行って、コミュニティの枠を超えてサポート同士の絆を深めて同じピア・サポートであることを感じる場にしてもらいたい。そして絆が深まることによって春夏の合宿の参加希望者の増加に繋げたい。

合宿ワーク企画の第2回となる今回は、サポート同士で自分の所属するコミュニティのガイダンスをすることで、他コミュニティのことを知り、どうすればより分かりやすく、より良い印象をもってもらえるか紹介の仕方を見直す。

内 容

第2回は2014年度ピア・コミュニティ夏合宿にて行い、参加者に好評であったワークを行う。ピア・サポートを対象とした企画であるが、研修生も参加可能とする。

(ワーク内容)

グループに分かれ、まずは1人ずつ、いつも通りのガイダンスを行ってもらう。その後グループで良かった点、改善点などを話し合う。次に、どのような話し方で話せばわかりやすいか話し合う。そして話し合ったことを踏まえて、ガイダンスの構成と工夫を考える。最後に再度ガイダンスを1人ずつ行った後、全体でフィードバックを行う。

効 果

- ・今回の企画は9月に実施する「サマーワーク」に繋げるためのものであったが、参加人が少なく上手く繋げられるか不安だった。しかし、9月に実施する「サマーワーク2015」にも参加してもらえることとなり、目的は達成されたと思う。
- ・第1回合宿ワークの反省を踏まえ、今回は役割分担が上手くできた。
- ・今回のアイスブレイクは、班員が協力するように気をつけた。地図を班員全員で作ることで班内での交流が生まれ、その流れでワークに繋げることができた。
- ・昨年の夏合宿で行ったワークであったため、準備にそれほど時間をかけず、良いワークを実施することができた。

改 善 点

- ・リハーサルは一度しっかり行ったが、もう少し運営本部のメンバーに参加してほしかった。
- ・参加していないコミュニティのガイダンスが聞けなくて残念だった。

感 想

- ・第1回の合宿ワークと同様に代表者会議、ピア全体ML、ピアエリアでのポスター掲示にて広報を行ったが、参加者数が第1回合宿ワークの時とあまり変わらなかった。ニーズがある企画であると思っていたが、金曜6限という時間に行ったこともあり、参加者が少なく、残念だった。
- ・今回のように他コミュニティを交えた企画は今後も続けていくべきだと思う。
- ・アンケートの回答に、以下のような「こんなワークをして欲しい」という要望があった。今後の参考としたい。
 - 自分だけでは学べない、コミュニケーションのとり方についてもっと学びたい
 - 他コミュニティとのコラボレーション企画の立案

◆企画名	<u>peer 懇いの場 “はねやすめ”</u>
日 程	<u>平成 27 年 11 月 1 日（日）～11 月 4 日（水）</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア、グローバルエリア、ライティングエリア</u>
参加者数	<u>11 名（ピア・サポート 8 名、研修生 3 名）</u>
目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・学園祭という関西大学に大勢の人々が集う機会を利用し、ピア・コミュニティについて気軽に知ってもらえる場を設ける。 ・また、来場者のために、ゆっくり座って休憩したり、買ったものをゆっくり食べたり、学園祭をより楽しむためにもちょっと一息つける場所を提供する。

内 容

以下の日程で、ピア・コミュニティの広報活動と休憩所の運営を行った。（第 38 回関西大学統一学園祭 一般企画として）
11 月 1 日（日）～4 日（水） 10:00～16:00（最終日のみ 15:00 まで）

- ・ホワイトボードにラミネート加工したコミュニティ紹介資料を貼り、自由に見てもらえるようにした。
- ・昨年度の広報・掲示活動で作成したポスター・資料・各コミュニティから提供された実際の企画写真などをホワイトボード、衝立などを利用して掲示をした。
- ・当企画そのものを知ってもらうため、ポスターを貼ったホワイトボードを凜風館の入口に置き、宣伝を行った。
- ・その他、質問対応・巡回をした。

効 果

- ・展示の説明を見学者にしたところ、KUSP に対し興味を持った人がいた。
- ・昨年度と比べ、利用者が大きく増えて（今年度 1083 名、昨年度 556 名）、多くの来場者にピア・コミュニティについて知ってもらい、且つ休憩所としての場所を提供できた。
- ・企画に参加してくれた他コミュニティの協力者との親交を深めることができた。

改 善 点

- ・屋外への広報が足りず、休憩所の存在を知らない人が凜風館横の階段に座って飲食していた。
→あらかじめ、準備・申請をして屋外に看板、ポスターなど目立つものを置いておくべきだった。
- ・当日、展示を見てくれた学生にどう対応すればよいか分からなかった。
→対応マニュアル、説明をあらかじめ用意しておくべきだった。

感 想

今回学園祭で企画を行ってみて、当日までの準備は昨年度のノウハウがあったので、予定どおりに進めることができた。また、参加してくれた他コミュニティの方と仲良くなったり、自分たちが行った活動の写真を来場者が見てくださっていたことで、様々な方々にピア・コミュニティについて知ってもらうことができ、本企画の目的を達成できたように思う。

しかし、新しい要素を考える時間まではなく、昨年度の企画をもとにしているため、昨年度と違った新しい何かがあまりなかったと感じた。来年度も行うのであれば、企画の準備を早めから始め、何か新しい要素を増やし、さらに充実したものとなるよう工夫していきたい。

◆企画名 ピア・コミュニティ ジャンパー作成
日 程 発注：平成 28 年 1 月 13 日（水）
完成・使用開始：平成 28 年 2 月 1 日（月）
参加者数 20 名（ピア・サポート 15 名、研修生 5 名）
目的

- ・「ピア・コミュニティ」の団体知名度の向上
- ・ピア・サポート、研修生の「ピア・コミュニティ」への帰属意識の向上

内 容

ピア・コミュニティの課題として、団体知名度が低いことが挙げられる。ジャンパーは企画開催時などに使用し、団体知名度をあげるために活用されている。しかし、現在のジャンパーはピア・コミュニティという文字が小さく一目見て団体名が分かるものとは言い難い。そのため、今後ピア・コミュニティの有効な広報のために、一目見て分かるような新たなデザインを用いてジャンパーを作成するものである。

<作成までの流れ>

- ①運営本部より、デザイン案 3 点を代表者会議を通して全コミュニティに提案
- ②各コミュニティにおいて意見を集約し、代表者より運営本部に提案
- ③集約され集まった意見を参考に、運営本部にて協議・デザイン決定
- ④再び代表者会議を通して全コミュニティにデザインを告知
- ⑤運営本部にて必要な手続きを行い、発注

効 果

- ・ピア・コミュニティという文字が大きく、目立つものとなり、団体知名度向上の効果が期待できる。
- ・スタッフ用ジャンパーとして、コミュニティのメンバーで統一して着用することで、ピア・コミュニティへの帰属意識の向上が期待できる。

改 善 点

特になし

感 想

- ・複数の企画振り返り時に、ジャンパーを新しいデザインのものにすべきという意見がある一方でなかなか実現できずにいたが、今回実施することができてよかったです。
- ・全てのコミュニティから意見を集めたことにより、それぞれのコミュニティから今後積極的に使用していくという方針を聞いており、今後このジャンパーがピア・コミュニティの団体知名度向上につながれば嬉しい。

完成したジャンパー(イメージ画像)



◆企画名 2016年度入試誘導
日 程 平成28年2月1日(月)～2月8日(月)
場 所 関西大学千里山キャンパス
参加者数 16名(ピア・サポート11名、研修生5名)
目 的

- ・4月から関西大学の仲間(peer)になるであろう受験生に対し、誘導活動を行うことで、新1年次生へのピア・コミュニティの普及とピア・サポートの精神の涵養を目的とする。
- ・他のコミュニティのピア・サポートとともに誘導活動を行うことで、ピア・サポート同士の交流を促進し、今後の活動に生かす。

内 容

以下の日程で受験生の誘導活動を行った。

2月1日(月) 8:30～11:30, 15:30～17:45
2月4日(木) 8:30～11:30, 15:30～17:45
2月7日(日) 8:30～11:30, 15:30～17:45
2月8日(月) 8:30～11:30, 15:30～17:45

・午前の受験生誘導について

受験生が正しい受験会場へ向かうことができるよう誘導するのが今回の主な活動であった。具体的には受験票を確認して受験会場へ向かってもらうよう案内をしたり、会場がわからず戸惑っている受験生に積極的に声をかけて誘導する、保護者の方を待機場所へ誘導するなどした。これまで活動してきた正門付近に加え、今年度から第2学舎へ向かうメインストリートと、法文坂にもピア・サポートを配置した。

・午後の受験生誘導について

男子は以文館前と法文坂～秀麗橋を担当し、受験生に対して正門からは退出不可であり、南門方面から退出していただく旨を伝え、女子は親和橋～第3学舎裏側通路において、関大前駅への方向を示すプラカードを持って受験生を経路通りに誘導した。また、事故防止のためにゆっくり進んでもらうよう繰り返し呼びかけを行った。

効 果

- ・ピア・コミュニティのジャンパーを着ることによって、新1年次生へピア・コミュニティの普及を行うことができた。
- ・誘導するメンバーを日によって変えたりすることで、同じコミュニティだけでなく別のコミュニティのピア・サポートとも交流できた。こういった交流を今後の活動に繋げていきたいと思う。

改 善 点

- ・受験生誘導には応援団の方々も関わっており、当日、意思疎通が思うように取れなかつたので、事前に話し合いが必要であると考えられる。
- ・正門をまっすぐ進んだところのメインストリートから第2学舎1号館への行き方がわからずに困っていた受験生が多かったために、第2学舎1号館を指し示すプラカードが必要であると考えられる。
- ・忘れ物への対応がわからなかつたので、そういう事態に対する対応についても、事前にどうすれば良いかを確認するべきである。

感 想

共通の目的を皆でやりとげたことによって、ピア・サポート同士の絆が深まつたので良かった。1人1人が分かりやすい誘導を心掛けていたため、大きな問題もなく、スムーズに活動できてとても良かった。今年度は昨年度に比べて配置場所も多く、良い経験になつた。来年度も、今年度の反省を活かして入試誘導を行っていきたい。

2.2.2 国際コミュニティ “KUブリッジ”

■ ピア・コミュニティの趣旨

国際コミュニティ “KUブリッジ”（以下、「KUブリッジ」という）は、留学生の学生生活の充実を図るため、留学生が抱える学業・生活面双方での悩みや不安の解消を図り、留学生と日本人学生との交流を促進することを目的としている。このほか、日本と諸外国との文化交流イベントの実施や、国際部と連携した活動も行っている。

■ 所属人数

24名（男7名、女17名）

*1年次生5名、2年次生5名、3年次生8名、4年次生5名、大学院生1名（平成28年3月末現在）

■ ミーティングの概要

定例ブリッジ全体ミーティング 週1回、定例国際部ミーティング 月1回

■ ピア・コミュニティ内の連携について

企画は5人程度のグループで考え、実行・振り返りまで一貫して行っているため、他のグループの状況がわかるように、週に1回の全体ミーティング（以下、「MT」という）でKUブリッジ全員が必ず顔を合わせるようにしている。MTの前半において各グループ3分で進行状況を報告したり、各グループが作成した資料など携帯やパソコンで誰でもいつでも確認できるようにすることで、情報共有を徹底している。またMT後半において各グループから提案のあった課題についてディスカッションをしたり、ワークを行うことで、KUブリッジ全員のモチベーション向上とスキルアップを図っている。

■ ピア・コミュニティ間の連携について

主な連携は代表者のみが参加する代表者会議である。春と夏に行われるピア全体合宿や他コミュニティが実施している企画など関わる機会は多くあるが、主体的に参加するメンバーはほんの一握りであるのが現状である。他コミュニティの学生と関わることの良さを先輩から後輩へ伝え、連携を促進していく必要があると考える。

■ 教職員との連携について

関西大学のグローバル化はまだ改善の余地があり、KUブリッジと支援母体である国際部の連携を強化することで、学内での国際交流は活発化させることができると考え、昨年度に引き続き、毎月1回国際部職員とKUブリッジ幹部との話し合いの場を設けるなどして、国際部の職員の方と関わる機会を多く設けた。国際交流の活性化やKUブリッジが国際部へ求めていること、反対に国際部がKUブリッジに求めることなど意見交換をし、その結果、KUブリッジと国際部の関係性がさらに密になっていった。今後も国際部との連携の大切さを認識し、共に関西大学のグローバル化を促進していきたい。

■ 昨年度からの改善点

KUブリッジをよりよくするには、全員が関西大学のグローバル化を促進するために今年1年KUブリッジとして何をしなくてはいけないかしっかりと目標を持ち、その上で企画の質とともに、一人ひとりの意識を向上させる必要があると感じ、ワークを通してこれらを達成するよう取り組んできた。例えばKUブリッジの強みや弱みを認識し、改善するためのワークを始め、一人ひとりのメンバーが自ら考え行動できるようにするためのワークを行った。その結果、KUブリッジメンバーとして活動する意義の実感や物事の考え方のテクニックなどを修得することができたが、これからは、KUブリッジメンバーのさまざまな違いを尊重して受け入れ、「違う」を積極的に生かすことにより、変化し続ける環境や多様化する留学生のニーズに最も効果的に対応しKUブリッジの優位性やオリジナリティを創り上げていくべきだと考える。

◆企画名	<u>Welcome Festival Spring 2015</u>
日 程	<u>平成 27 年 4 月 5 日 (日)</u>
場 所	<u>関西大学千里山キャンパス</u>
参加者数	<u>293 名 (ピア・サポート 13 名、留学生会 7 名、一般学生 72 名、留学生 201 名)</u>
目 的	

平成 27 年度の新入生と新留学生を主なターゲットとし、Welcome Festival を行う。これからキャンパスライフが充実したものとなるよう、いくつかのゲームを行い、友人を作る場を提供する。また、宝探しゲームを行い、大学内の散策やクイズを解くことでキャンパスの構造を楽しく理解してもらう。最後に、留学生に KU ブリッジ、留学生会を宣伝し、各種イベントに気軽に参加出来るようにする。

内 容

- 8:30 全体 MT・会場設営
- 10:30 受付開始
- 11:15 開会式・アイスブレイク
- 11:40 昼食
- 13:00 コアタイム@BIG ホール
- 14:00 宝探しゲーム
- 15:15 100 周年記念会館集合・閉会式
- 16:00 終了・撤収・フィードバック



効 果

関西大学に新たに入学した学生たちがお互いに交流を深めることにより、これから始まる、関西大学での大学生活への不安や緊張を和らげることができた。

改 善 点

- ・雨天開催時の対応（シナリオ）をさらに深く考案しておくべきであった。
- ・参加者が使用するテーブルの番号が分かりにくかった。テーブル上に番号を書いた立札を置いてはっきりとわかるようにするべきである。
- ・コアタイム会場の BIG ホールの席の場所を事前に確保しておくべきだった。
- ・宝探しゲームの順位の決め方が曖昧であった。順位決定方法を参加者に知らせるべきであった。
- ・Welcome Festival Spring 2015 のスタッフが BIG ホールで関西大学スプリングフェスティバルのスタッフと間違えられたため、腕章などによって Welcome Festival スタッフであるという表示をはっきりさせることや、今年度の様々な対応事案をまとめて対応マニュアルを作成するということ等が必要であると思われる。
- ・国際部職員とスタッフの考えていることが一致していなかったので、実施当日に向けて余裕をもって実施計画を練り、共有をさらに密に行うべきである。今年度の場合、認識の不一致が発生したのは当日受付方法に関してであった。実施日直前に参加者数が知られ、計画していた実施方法（特に受付方法）を急遽変更したため、受付方法の変更点に関する共有が実施当日になってしまった。

感 想

新年度が開始してすぐのイベントであったため、今学期から関西大学で学ぶ留学生はもちろん、日本人学生も多数参加しての大規模な企画であった。本企画に向けての準備は前年の秋頃から行っていたため、運営スタッフの努力は非常に大変なものだった。

大人数が参加するイベントということで、様々なトラブルが発生するなど、非常に運営側にとっては大変なことが多く起こった。しかし、大規模な国際交流イベントをやり遂げたという達成感はスタッフ一人一人の大きな財産になるだろう。

◆企画名	<u>Welcome Festival 2部～global talk～</u>
日 程	<u>平成 27 年 4 月 8 日 (水)</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 1 階 グローバルエリア</u>
参加者数	<u>37 名 (ピア・サポート 6 名、研修生 2 名、一般学生 23 名、留学生 6 名)</u>
目 的	

Welcome Festival Spring 2015 で知り合った留学生と日本人学生が再会し、さらに交流を深める機会を提供する。

内 容

10:00 会場設営
10:30 第 1 回受付開始、参加費徴収
10:45 イベント開始、趣旨説明
10:55 自己紹介
11:05 「子供のころの夢」についてトーク
11:30 「語学の勉強の仕方」についてトーク
12:00 まとめ、終了
12:50 第 2 回受付開始、参加費徴収
13:05 イベント開始、趣旨説明
13:15 自己紹介
13:25 「趣味」についてトーク
13:50 「行ってみたい場所」についてトーク
14:20 まとめ、終了
14:30 第 3 回受付開始、参加費徴収
14:45 イベント開始、趣旨説明
14:55 自己紹介
15:05 「自国、地元紹介」についてトーク
15:30 「日本に来る前の日本の印象と今の印象」についてトーク (留学生の意見を聞く)
16:00 まとめ、終了
～17:00 片づけ・完全撤収

効 果

Welcome Festival Spring 2015 で知り合った留学生と日本人学生が再会できる場を作ることができた。Welcome Festival Spring 2015 に参加していない学生も参加し、交流を深める事ができた。

改 善 点

- ・国際部との連携が上手くいかず、Welcome Festival の応募用紙を処分してしまい、参加人数の把握が難しかったり、メール連絡ができず広報の機会を逸した。
- ・留学生と日本人学生の数に偏りがみられた (留学生が少なかった)。
- ・2,3,4 限と行ったが、2 限の参加者が少なく、4 限の参加者が多いといった偏りがあった。

感 想

- ・各回数で人数にばらつきはあったが、どの回も参加者が楽しんでくれていた。
- ・参加者同士が積極的に話し合い、連絡先を交換する、などの様子が見られてよかったです。

◆企画名	Global Talk
日 程	平成 27 年 5 月 20 日 (水)、6 月 17 日 (水)、7 月 22 日 (水)
場 所	新関西大学会館南棟 3 階 国際部交流室
参加者数	26 名 (ピア・サポート 3 名、研修生 5 名、一般学生 13 名、留学生 5 名)
目 的	

国籍の違いによる意見や問題に対する考え方の違い、また価値観の違いを理解することによって交流をする。また、あまり話す機会のないテーマを考えることで国際関係に関する問題について意識を持ってもらう。

内 容

- 16:00 KU ブリッジメンバーが国際部交流室に集合し会場設営。
- 16:20 受付。企画趣旨の説明。
- 16:30 アイスブレイク
- 16:50 ①KU ブリッジメンバーが国際関係に関するテーマを伝える。
- 16:52 ②1 つのテーマごとにそれぞれ 15 分間ディスカッションをする。
- 17:07 ③各グループ 2 分で話した内容を発表する。
- 17:17 ①～③をテーマごとに繰り返す。
※KU ブリッジメンバーは適宜ディスカッションを促す。
- 17:50 終了。参加者は解散。
- 18:10 備品の現状復帰をして撤収。

効 果

話を深いところまでできるほど、ディスカッションを活発に行うことができ、議題だけでなく、留学の情報交換など、参加者にとって有益な情報交換の場ともなった。

改 善 点

- ・テストの日程を考慮する。
- ・ピア・サポート数、参加者数の考慮、タスクの共有方法などを改善し、企画により万全な体制で臨めるようにする。

感 想

普段はなかなか話す事のない日中関係についてなど、白熱してディスカッションをしていた。スタッフとして参加したが、留学生の本音を聴く事ができてとても有意義な時間になった。

イベント終了時には参加者同士 Facebook のアカウントを交換していて、交流も深まったのではないかと思う。

◆企画名	<u>新緑ハイキング in 箕面</u>
日 程	<u>平成 27 年 5 月 31 日 (日)</u>
場 所	<u>大阪府箕面市</u>
参加者数	<u>36 名 (ピア・サポート 8 名、研修生 6 名、一般学生 16 名、留学生 6 名)</u>
目 的	

ハイキングを通して留学生と日本人学生の交流を深め、新しい友人を作る場を提供する。また、この季節だからこそ味わえる新緑や豊かな自然を楽しんでもらう。

内 容

- 13:00 関西大学千里山キャンパス図書館前集合、関大前駅まで移動。
- 13:30 関大前駅出発。
- 14:26 阪急箕面駅到着。
- 14:30 箕面駅近くで 5 つのグループに分かれてもらい、各班で異なるスタンプラリーの台紙を一人一枚と、周辺の地図を配付し、スタンプラリーについて説明する。16 時には箕面大滝に集合するように伝える。
- 14:45 箕面駅を滝の方向へ向かい、グループごとに出発。
- 16:30 箕面大滝集合、集合写真を撮る。全員で箕面駅に向かって歩いて戻る。
- 17:30 箕面駅にて現地解散、フィードバック。

効 果

- ・留学生と日本人学生との交流の場を提供することができた。
- ・スタンプラリーをうまく活用し、参加者に自然の中でハイキングを楽しんでもらえた。

改 善 点

- 運営方法について
 - ・スタンプラリーをするときにチェックポイントに目印の紙を貼つておくか、又はスタッフが目印の看板を持っておくべきであった。
 - ・企画実施場所の把握が甘かったため、下見をするべきであった。
 - ・受付の机がなく受付が混乱していたため、領収書を五十音順で並べることで受付をスムーズにする。
 - ・鉄道での移動時に乗換の誘導が危うかつたため、現地集合にすることも必要である。
 - ・留学生参加者が少なかったため、留学生に対する告知の工夫をする。
- イベント内容について
 - ・ミッションの内容の豆知識を入れておくべきであった。
 - ・時間どおりに集合場所に戻ってこないグループがあつたため、活動範囲を設定するべきであった。
- スタッフの動きについて
 - ・交流の促進が甘かったため、より一層各自が能動的に動くべきである。
 - ・返金の理由を知らない参加者がいたため、返金対応時に返金の理由をより詳しく説明するべきであった。

感 想

新緑が美しい初夏の 5 月に、KU ブリッジとしては初のハイキング企画を行った。企画当日は快晴で、少々暑い気候ではあったが、箕面の豊富な森の木々に囲まれていたため、それほど暑さは感じなかった。留学生の参加者が少なかったものの、非常に多くの学生が参加したため、とても活気のある企画となった。企画実施日の段取り等を非常に綿密に練っていたため、KU ブリッジのスタッフの動きも非常に良かったのではないかと思う。

◆企画名 グローバル・キッチン part.1
日 程 平成 27 年 6 月 17 日 (水)
場 所 総合学生会館凜風館 2 階 生協食堂
参加者数 24 名 (ピア・サポート 5 名、研修生 4 名、日本人学生 14 名、留学生 1 名)
目 的

- ・留学生に日本の食文化を知ってもらう。
- ・日本食体験を通じて日本人学生と留学生との国際交流をはかる。

内 容

15:00～15:50	設営
16:00～16:20	受付
16:20～16:40	企画開始、あいさつ、自己紹介、調理説明
16:40～17:40	調理
17:40～18:15	実食
18:15～18:20	アンケート記入
18:20～18:30	片付け
18:30～18:40	栄養士さんに質問コーナー
18:40～18:45	写真撮影、あいさつ
18:45～18:55	最終撤収
18:55～19:00	フィードバック

効 果

- ・おにぎりとみそ汁という日本食の原点である料理を日本人学生と留学生が一緒に作ることによって気軽に国際交流を行うことができた。
- ・おにぎりとみそ汁という簡単で手軽な料理を伝えることによって留学生が一人でも気軽に日本食を作り、日本文化に触れることができるようになった。

改 善 点

- ・留学生が少なかったため、留学生への広報をより活発に行う。(授業訪問の予約を事前に余裕をもって行う等)
- ・企画準備や実施等に関して、生協に頼りすぎてしまった部分があったため、しっかりと運営者としての自覚を持ち、能動的に行動する。
- ・司会をより活発に盛り上るようとするべきだった。司会の進行をさらに元気よく行うことを徹底し、また当日スタッフに司会の適任者がいる場合はその人に司会を依頼する等を通して、企画実施時の盛り上がりを改善していく。

感 想

本企画は、日本人学生と留学生とが共に一つの料理を作り上げることを主な内容としている。留学生にとっては日本という異国の食文化を知る機会となり、日本人学生にとっては自國の文化を留学生に伝えることができるという大きなメリットがあるだけでなく、共同で一つの物事をすることで、互いにいつの間にか打ち解け合えるという大きな利点を含んでいく。

残念ながら本企画には留学生の参加申込者が少なかったため、当初想定していた企画の魅力を提供することが困難であったが、KU ブリッジの留学生スタッフをはじめとして運営スタッフがその穴を埋めるかのように参加者と交流し、結果的に非常に和気藹々とした雰囲気を作り出して盛り上がりの良い企画に仕上げることができた。

今後の大きな課題は、留学生の参加率・集客率を向上させることである。私たちの企画の魅力をどのように留学生に伝えていくかという事や、私たちと留学生の距離を縮める事が焦点になりそうである。

◆企画名 秋学期キャンパスツアー
日程 平成27年9月15日(火)
場所 関西大学千里山キャンパス
参加者数 62名(ピア・サポート4名、留学生58名)
目的

秋学期から関西大学で学ぶ交換留学生を対象に、キャンパスツアーを行うことで、少しでも早く大学に慣れ、学生生活を円満に送れるようにする。同時にKUブリッジの活動も紹介し、今後のイベントへの参加を呼びかける。

内 容

【当日の流れ】

- 12:30 国際部にKUブリッジメンバー集合、打ち合わせ
その後図書館前に移動し、随時留学生の受付
13:00 挨拶、記念撮影、説明言語(英語・中国語・日本語)ごとにグループ分け
13:10 全5グループ出発
コース(図書館→ITセンター→凜風館→あすかの庭→国際部)
13:50 全5グループ、第4学舎2号館5階オープンデザイン教室 到着
14:00 キャンパスツアー終了
KUブリッジメンバーはフィードバック後、解散



効 果

- 来日したばかりで日本語があまり理解できない学生に対して、英語と中国語での説明があったので、全員がキャンパスツアーの説明を理解できた。
- キャンパスツアーで実際に建物を見て回ることで、具体的な建物の役割や場所が理解できた。

改 善 点

- 留学生が欲しい情報をまとめたミニ冊子と一緒に配る。
- 言語のニーズに柔軟に対応できるように、英語担当者を多めに準備する。

感 想

この秋、新しく関西大学へやってきた留学生のほとんどの方が参加してくれて、とても賑やかなキャンパスツアーとなりました。留学生の皆さんには建物の前に来ると、興味深そうに説明を聞いてくれたので、案内しているスタッフも嬉しかったです。皆さんがスムーズに関西大学の生活に馴染めるように、微力ながらも力になっていたら幸いです。暑い中お越し下さった皆さん、ありがとうございました！

◆企画名	KU バザー
日 程	平成 27 年 10 月 28 日 (水) ~ 10 月 29 日 (木)
場 所	第 2 学舎 1 号館前ベンチ
参加者数	80 名 (ピア・サポート 8 名、研修生 7 名、留学生 65 名)
目 的	

昨年度本学学生及び職員から提供された、家に眠っている日用雑貨（使用・未使用は問わない）を中心とする物品を KU バザーの場で本学交換留学生・正規留学生に無償提供することで、留学生の生活における利便性向上を図る。

内 容

<当日の流れ>

10 月 28 日 (水)、10 月 29 日 (木) 両日とも同じスケジュールで行う。

10:40 会場設営 (受付) 有鄰館から物品を運搬、陳列する。

12:10 イベント開始

参加者は受付でチェックインしてから入場する（参加者名簿作成のため）。

方法：名簿に学籍番号と名前を記入の上、その場で KU ブリッジの Facebook をいいね！する。

また、その際にどの告知でこのイベントを知ったのか調査する。

スタッフは随時巡回をし、物品の説明などを参加者に行う。

写真係はバザーの様子を写真に撮る。

13:30 イベント終了、撤収作業開始

残った物品は有鄰館へ運搬する。

フィードバックを行い、1 日目はスタッフ用にオンラインで共有、翌日にその改善を反映する。KU ブリッジの Facebook にて Thank you ポストと、2 日目の告知を投稿する。

2 日目は 2 日分のまとめをオンラインで共有し、Facebook にて次回イベントの告知を投稿する。

14:30 解散



効 果

- ・無償提供された物品が留学生の手に渡る事によって、喜んでもらえた。
- ・受付時に全員に KU ブリッジの Facebook をいいね！してもらうことにより、今後の広報における Facebook を用いてのお知らせがより期待できるようになった。

改 善 点

- ・より直接的な広報を行う (KU ブリッジメンバーから直接、友達の留学生にメッセージを送り、イベントを宣伝するなど)。
- ・広報時に、「物品はなくなり次第終了」の旨を明記しておく。

感 想

この秋学期に関西大学にやってきた留学生を中心に、二日間に分けて沢山の参加者が集まり、善意で寄付していただいた方たちの温かい想いと共に、数多くの物品が留学生の手元に渡った。物品を受け取った留学生たちは皆喜んでおり、運営スタッフもこの KU バザーの意義を十分に感じた。今後も引き続き、KU バザーを行っていきたいと思う。

◆企画名 国際交流×和菓子づくり
日 程 平成 27 年 11 月 28 日 (土)
場 所 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム
参加者数 27 名 (ピア・サポータ 3 名、研修生 3 名、日本人学生 11 名、留学生 10 名)
目 的

京都の老舗和菓子店より講師をお招きし行う本格的な和菓子作りを通じ、参加者の留学生と日本人学生の交流を深めつつ、見た目も美しく味も美味しい和菓子を切り口として日本の食文化に対する興味関心をもつきっかけ作りとなることを目的とする。

内 容

<当日の流れ>

- 13:00 準備開始
14:00 参加者集合・受付
14:20 あいさつ、アイスブレイク
14:30 和菓子作り体験開始
15:30 体験終了
 集合写真を撮る。
15:40 和菓子試食
16:00 交流ゲーム開始 (坊主めくり等)
16:45 アンケート記入
16:50 あいさつ、企画終了
 次回のイベントを宣伝する。
 参加者解散
17:00 撤収作業開始
 フィードバックを行う。
17:30 終了



効 果

- 手頃な参加費で和菓子作りを体験でき、かつ留学生と日本人学生の交流を促進できた。
- 学内で和菓子作りの体験をできるので参加してもらいやすかった。
- 留学生は日本文化である和菓子に触れ、体感することができた。また、日本人学生は、普段自ら作る機会のない和菓子を作ることで改めて日本文化の良さを感じることができ、双方にとって有意義な時間となった。

改 善 点

- 事前に職人さんと打ち合わせをすることができなかつたので、企画を始めるときに、スムーズに進められなかつた。今後、同様の企画を行うのであればメールや電話などの方法で事前に打ち合わせをすることが望ましい。
- 和菓子試食の際に、お茶を出し遅れた。次回、当日の総合指示を担当する人は時間の管理を徹底する。

感 想

交流の時間も十分とることができ、国際交流の促進につながり運営スタッフ一同大変うれしく思った。また、参加者の満足度も非常に高く、今後も継続して行いたい企画の一つになった。

◆企画名 No Border Party ~国境を越えた友人を作ろう~
日 程 平成 27 年 12 月 16 日 (水)
場 所 総合学生会館凜風館 1 階 コラボレーション・コモンズ
参加者数 48 名 (ピア・サポート 3 名、研修生 3 名、一般学生 21 名、留学生 21 名)
目 的

クイズやフリートーク、ゲームを通じて、より参加者同士が密に交流を行うことを狙いとする。

内 容

<当日の流れ>

- 15:30 会場準備
16:20 集合・受付
16:40 挨拶・KU ブリッジ自己紹介・概要説明
16:50 ゲーム開始 (5 人×10 グループ)
17:20 お菓子配付
17:30 フリートーク 1 回目開始 (※お菓子を食べながら)
17:40 グループ入れ替え
17:50 クイズ
18:00 フリートーク 2 回目開始
18:10 写真撮影 (全員)
18:15 フリートーク 3 回目開始
18:30 アンケート記入 (参加者)・挨拶
18:40 企画終了
19:10 片づけ・撤収・フィードバック (スタッフ)



効 果

- ・50 人という大きな規模を生かして、参加者同士のより広い交流促進ができた。
- ・フリートークのテーマを設定したり、絵を描いてもらうなどの作業により、手持ち無沙汰になる時間を減らすことができた。

改 善 点

- ・備品や施設の管轄の把握が徹底できていなかったため、職員さんとの連携が上手く取れなかった。
- ・当日、台本を使ってリハーサルをすることを怠ったために、全体の進行であやふやになってしまっている部分があった。
- ・支援部署での手続きミスにより、書類のチェック期間がとても長かった。

感 想

2 週間程度の広報で留学生 21 名、一般学生 21 名に参加してもらえたことは良かったと思う。留学生と一般学生の数がほぼ同数であったため会話も多くとれており国際交流イベントとしての目的も達成できたと思う。来年はもっと長く広報期間を確保し 100 人規模のイベントを目指したいと思う。

◆企画名	<u>春学期キャンパスツアー</u>
日 程	<u>平成 28 年 3 月 30 日 (水)</u>
場 所	<u>関西大学千里山キャンパス</u>
参加者数	<u>42 名 (ピア・サポート 10 名、研修生 3 名、留学生 29 名)</u>
目的	

平成 28 年 4 月からの新入生でキャンパス内の施設について分からず困っている留学生にキャンパスを案内することを通して、よりスムーズに大学生活を始めてもらう。また、KU ブリッジのイベントを紹介し、今後の活動への参加を呼びかける。

内 容

【当日の流れ】

- 14:00 キャンパスツアー担当者集合 @国際部交流室
- 14:10 国際部との事前打ち合わせ
- 14:25 オリエンテーション会場に移動
- 14:30 キャンパスツアー開始
図書館→岩崎記念館→第 1 学舎→凜風館→教務センター→図書館→保健管理センター→国際部交流室
- 15:30 キャンパスツアー終了



効 果

- ・来日したばかりで日本語があまり理解できない留学生に対して、英語と中国語での説明を行ったので、全員にキャンパスツアーの説明を理解してもらうことができた。
- ・キャンパスツアーで実際に建物を見て回ることで、具体的な建物の役割や場所を理解してもらうことができた。

改 善 点

- ・中国語に対応するスタッフは事前に決めていたが、英語は決めておらず苦労したので次回からは英語に対応するスタッフも決める必要がある。英語班・日本語班・中国語班に分けると滞りなくツアーを進めることができると思われる。
- ・最初にツアーを始めた班と最後にツアーを始めた班とで、到着地に着くまでに時間差があったので、余った時間に何をするのかを事前に決めておくとよい。
- ・聞くだけではわからない人向けに説明資料を作るとさらによいと思われる。

感 想

- ・前回と比べるとスタッフが留学生に対してかなり多く、きめ細やかな対応ができた。
- ・スタッフが積極的に話しかけることにより、短い時間ではあったが充分に交流することができた。

2.2.3 ピア・スポーツコミュニティ（PSC）

■ ピア・コミュニティの趣旨

テーマは、関大生の「絆」。“スポーツ”をキーワードにして、関西大学のすべての仲間と、身体を動かしながら人と人との輪を広げ、学生交流を促進することを目的に活動している。そのため、現役の学生や校友の方への応援活動を行うことで、関西大学の学生としての帰属意識や母校愛を高め、地域の方との交流を促進することで、人との繋がりを感じ、より充実した学生生活を送れるようなサポート活動を行っている。

■ 所属人数

0名（平成28年3月末現在）

■ ピア・スポーツコミュニティの現状

現在は、部員数が0名のため、活動が出来ていない状況である。しかしながら、オリンピックやワールドカップを見ていても分かるように、スポーツは多くの人を感動させ、勇気づける力がある。学生からの要望を的確に捉え、スポーツを通じて関大生の「絆」を深めていけるような活動を再度企画できるようにしたい。

■ 課題

今後、活動を再開するためには、メンバーの募集が最優先である。体育系課外活動団体への参加率を見ても分かるように、スポーツに興味を持つ学生は多い。それらの学生に、スポーツ行事を行う運営側の楽しさについても感じてもらうことで、メンバーの増加につなげていきたい。まずは、他のコミュニティメンバーの方々の協力を得て、少しづつでも行事を実施していきたい。

2.2.4 KUサポートプランナー（KUSP）

■ ピア・コミュニティの趣旨

KUサポートプランナーは「素晴らしい活動をしているにも関わらず、発表する場所がない」、「多くの関西大学の学生と一緒に活動したい」と思っている関西大学の学生をイベントを通じてサポートするコミュニティ。関大生の団体及び個人のアイデア企画を募集し、共同で立案から実施までを行うこと、また学生の視点を生かした関大生のニーズに沿うようなイベントの企画・実施を行う。学年や学部を超えて、関大生の繋がりを広げ、対人関係能力や自己表現能力などの社会で生きる力を身に付けていくことを目的に、学生生活の活性化を促進することを担っている。

■ 所属人数

23名（男10名、女13名）

*1年次生7名、2年次生5名、3年次生5名、4年次生6名（平成28年3月末現在）

■ ミーティングの概要

定例会議 週1回（現在は火曜 18:10～20:00）

■ ピア・コミュニティ内の連携

連絡については、LINEを活用することで、会議の遅刻・欠席の連絡が問題なく行われていた。会議など以外でも、みんなで食事に行くなど、先輩が積極的に仲良くなる場を作った。改善すべき点は、人数が増えたことで、固定の会議に参加できないメンバーが出てきてしまったことだ。履修を決定する前から、早い段階で日程を決め、できる限り全員が会議に出られるように努力する必要がある。

■ ピア・コミュニティ間の連携について

他コミュニティの方に企画に参加してもらうことは多くあった。しかし、ピアエリア等で他コミュニティのメンバーと交流するメンバーがいる一方で、普段はピアエリアにいないメンバーについては他コミュニティのメンバーと交流の無いメンバーもいた。個々のメンバーの交流を増やすことで、コミュニティ間の連携促進につなげていきたい。なお、現在はメーリングリストを活用し、他コミュニティとの情報共有を行っている。

■ 教職員との連携について

学生生活支援グループが支援母体である。密なコミュニケーションが取れていた。企画の募集について多くの支援を得られたことで、一般学生の目に多く触れることが出来たため、企画に多くの方に参加してもらうことができた。また、企画の計画時やKUSPの運営についてもアドバイスをいただいたことで広い視野で考え、事前にリスクを減らす対策を行うことができた。

■ 昨年度の課題の改善点

「募集期間が短くなり、広報に失敗する」という昨年度の課題は解決できた。「一か月以上広報の期間を設ける」ことを徹底したことや、関西大学タイムスやブームスポーツ編集部といった外部団体との繋がりを作り、広報にご協力いただいたことが大きく影響している。「輝く自分に！」では、KUSP初の“満員御礼”を出すことができた。一方で、当日のドタキャン防止が今後の課題として浮上している。二回のリマインダーメールも送ったが、当日キャンセルが出てしまったので、「参加必須でよろしくお願ひ致します」「万一、欠席の場合は、理由と併せてご返信ください」など一言付け加える必要がある。

◆企画名 『STOP！アルコール・ハラスメント』
日 程 平成 27 年 4 月 7 日（火）～4 月 11 日（土）
場 所 総合学生会館凜風館 1 階 学生ラウンジ
参加者数 7 名（ピア・サポート）
目 的

未成年者飲酒防止強調月間、また本学の未成年飲酒防止啓発行事に合わせて啓発企画を行うことで、アルコールの危険性、未成年者が飲酒することによる悪影響を知り、一人ひとりの人権を尊重することの重要性を正しく認識してもらうため。

また、新入生歓迎イベントやお花見がサークルで開催されるこの時期に、今一度アルコールに対する正しい知識を確認することで、未成年飲酒や、イッキ飲みのない楽しいコミュニケーションを促すため。

内 容

「未成年飲酒防止」「イッキ飲み防止」の啓発を目的に、凜風館 1 階学生ラウンジ大型モニターでの DVD の上映、ポスターの掲示、啓発チラシ、リーフレットの配布をおこなった。

効 果

- ・会場を凜風館 1 階学生ラウンジとし、実施時間をお昼休みに設定したことで、昼食を取るために訪れていた学生に注目してもらうことができた。DVD の上映は 12：00～13：00 に小休止を挟みつつ繰り返し上映し、不特定多数の学生に視聴してもらうことができた。併せて行った、啓発チラシの設置、配布でも 5 日間計 500 名の学生に今回の啓発企画について周知することができ、アルコール・ハラスメントの危険性について考えてもらうことができた。
- ・設置していたチラシを手に取ってくれた学生からは、「自分もサークルで危険なアルコールの飲み方をしているところを目にすることがある。同じ学生が、アルコール・ハラスメントの啓発をおこなうのはよいことだと思った」という声をもらった。
- ・配布したチラシを受け取った多くの学生が目にした瞬間にアルコールについての話題を話したり、鞄に入れるなどして持ち帰ってくれた。
- ・イッキ飲み防止連絡協議会を取材している毎日新聞の記者の方に本企画を取材していただき、記事にして朝刊に掲載していただいた。

改 善 点

企画を行うメンバーが少なかったこと、また毎日一定の時間で実施することがやや困難な状態で企画をしてしまったことがよくなかった。情報共有をより正確に積極的に行う必要があった。

感 想

啓発をすることで KUSP メンバーもアルコール・ハラスメントについての知識を深めることができた。啓発の企画は効果が測定しにくいが、学生の手で啓発の企画を行うことは有意義であったと思う。また、学生の急性アルコール中毒の事故が増える春と秋の時期にアルコール・ハラスメントの危険性を周知するために啓発をおこなうのは効果的であると思う。今後も機会があれば啓発活動をしていきたい。

◆企画名 「STEP」～勉強の仕方を聞こう～
日 程 平成27年4月13日(月)～4月17日(金)
場 所 総合学生会館凜風館1階 ピアエリア
参加者数 25名(ピア・サポート8名、一般学生17名)
目 的

- ・大学での学びについて知る機会、聞く機会の少ない学生を主な企画対象として実施した。
- ・新入生に先輩としての経験、大学での勉強への取り組み方を伝えることで新入生の学びに対する意欲向上に繋げることを目的とした。また、この企画を通じて学生の学部・学年を超えた新たなつながりが生まれるきっかけとなる場を提供することも本企画の狙いであった。

内 容

- ・ピア・サポートがピアエリアで待機し、一般学生と昼食をとりつつ、勉強方法やテスト対策などの経験を話す。
- ※会話の内容は、ピア・サポートの個人的な意見で今後の参考にしてもらうものであり、仮にその意見によって不利益を被ったとしても関知しない旨を伝える。

効 果

- ・システム理工学部1名、政策創造学部1名、環境都市工学部3名、文学部4名、法学部6名、商学部1名、社会学部1名が参加した。
- ・効果を客観的な指標で測ることは出来ないが、参加者の不安解消という観点でみれば一定程度の効果があったのではないかと考えている。

改 善 点

- ・新入生が入学してまだあまり日が経っておらず、サークルの勧誘の時期と重なったこともあり、企画実施をもう少し後にした方がより需要が望めたかもしれない。
- ・企画実施場所がわかりにくい為、ピアエリア内にも実施している事をわかりやすくするためのポスターなどを貼っておくべきであった。

感 想

参加してもらった新入生にとっても、勉強方法を教えた企画側としてもとても有意義な企画であった。

◆企画名	<u>「関大生協×KUSP 料理企画第7弾～パエリアって何ですの～」</u>
日 程	<u>平成27年4月23日(木)</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館2階 生協食堂</u>
参加者数	<u>29名(ピア・サポート7名、一般学生22名)</u>
目 的	

本企画は主に下宿生を対象とした企画であり、比較的入手しやすい食材を使用して料理を作り、その調理方法を体得してもらうことで参加者の料理のスキルアップ、及び今後の下宿生活に活かしてもらうことを目的に実施した。また他学部や他学年の学生と共同で料理を作ることを通して交流の機会を提供し、関西大学に馴染むこと、関西大学の学生としての帰属意識を高めることを狙いとした。

内 容

関大生協の方からパエリアの作り方を教わり、実際に学生が調理を行った。調理後はパエリアを食べながら参加者同士交流を深め、また関大生協の方に参加者が栄養や料理に関する質問をする時間を設けた。

効 果

- ・他学部や他学年の学生と共同で料理を作ることを通して交流が行われた。
- ・目的であった参加者の料理のスキルアップ、及び今後の下宿生活に活かしてもらうことが達成できた。

改 善 点

- ・例年の反省を活かし、撤収までの時間を大幅に縮めることができた。しかしスケジュール通り進行できなかつたため、撤収時間の20時を過ぎてしまった。
- ・カセットガスボンベの点検を怠っていた(空のものも持つて行ってしまった)。
- ・当日連絡なしの欠席者が出了場合の対応を決めていなかつた。
- ・エプロンの数の確認を怠っていた。
- ・3人の班も4人分の材料の準備があり、欠席が出た場合も含めて、不公平にならないようにするための対応策を考えていなかつた。
- ・当初の予定より広報期間が短くなってしまった。
- ・関大生協の方との連絡調整や伝達が不十分だった。
- ・準備が行き当たりばったりだった。
- ・新入生への広報に苦戦した(STEP企画での告知はできたが、申込みまでつなげることができなかつた)。

感 想

当までの準備をメンバーで協力し、全体で把握して進めることができなかつた。春休みから準備を開始したにも関わらず、直前の準備がギリギリになり、広報期間を長く取ることができなかつたことが一番の反省点である。しかし当日は関大生協の方のご協力のおかげもあり、和気あいあいとスムーズに実施することができた。

参加者アンケートでは、料理や参加者同士の交流を楽しめたなどの感想があり、本企画が目的としていた結果が得られた。一般参加者(特に新入生)の割合が例年に比べ小さかったのは、調理メニューではなく開催時期や広報期間、対象の設定によるものであると考えられる。しかし、学生間の交流の機会を提供するという目的は達成でき、参加者の満足度も高い企画であったため、今後も継続して企画を実施していきたい。

◆企画名	<u>『写真で伝える世界、東北の今』</u>
日 程	<u>平成 27 年 5 月 8 日 (金)</u>
場 所	<u>第 1 学舎 A403</u>
参加者数	<u>86 名 (ピア・サポート 5 名、研修生 1 名、一般学生 80 名)</u>
目 的	

アフリカやアジアを中心とする途上国で、フォトジャーナリストとして活躍されている安田菜津紀氏から、現場の生の声を聞くことで命、平和、国際協力の大切さを学んでもらうこととした。

内 容

講師として、カンボジアを中心に、東南アジア、アフリカ、中東で貧困や難民の問題を取り材するフォトジャーナリスト、安田菜津紀氏が登壇。安田氏に、フォトジャーナリストの仕事について、また自分自身の生き立ちや、フォトジャーナリストを志すようになった経緯を始め、現在取材を行っているカンボジアでのトラフィック・チルドレン（人身売買）について、陸前高田市を訪れた際に感じたこと、シリアにおける難民問題について写真を示しつつお話をいただいた。

効 果

アンケートでの「今回の講演会の内容はどうでしたか」という質問に対し、9割の方が「非常に良かった」と回答している。残った1割の方も、「良かった」と回答している。また、アンケート回答者全員が「役に立った」「今後何らかのボランティアに参加したい」と回答している。

以上から、参加者にとって今回の講演が今後のことを考える良い機会になったのではないかと考える。

改 善 点

- ・職員さんとの連携を密にとる必要性について、自覚を欠くことがあった。
- ・来場者数の読みが甘く、配布資料が足りなくなり、一部の方に資料を渡すことができなかった。
- ・前日準備に来ることができる人数が2人しかいなかつたため、大変だった。担当者を2人にするなど工夫する必要があると感じた。
- ・事前の打ち合わせがなかったため、講師の方と認識が異なる部分があった。今後はできる限り事前打ち合わせは行うべきだと感じた。
- ・今回は当初千里ホールを会場として予定していたが、参加者が思ったより集まらず、急遽A403に会場を変更した。このような場合もあるので、2つ会場を抑え、人数が集まれば大きいほうの会場を使うというように柔軟に対応できるようにしたいと思う。

感 想

参加者の心に何か届いた講演会になったと思う。質疑応答も活発に行われ、涙ぐみながら安田氏のお話しに耳を傾ける参加者も見受けられた。

また、今回の企画では他団体や教員、関西大学生活協同組合など様々な方に協力していただいた企画となった。特に、KUコアラに協力していただき、総合図書館に特設コーナーを置いたことは、ピア・コミュニティ間の繋がりができるきっかけとなった。国際協力系サークルやボランティアサークル、写真部などもサークル内での広報等で協力して下さった団体が多かった。

今後も他団体や教員等学内のリソースを活かしつつ企画を行っていきたい。

◆企画名	<u>「STEP！」～試験前の不安を解消しよう～</u>
日 程	<u>平成 27 年 6 月 29 日（月）～7 月 3 日（金）</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア</u>
参加者数	<u>27 名（ピア・サポータ 9 名、研修生 4 名、一般学生 14 名）</u>
目 的	

- ・新入生に先輩としての経験、大学での試験勉強やレポートへの取り組み方を伝えることにより、新入生の学びに対する意欲向上に繋げること。
- ・学生の学部・学年を超えた新たなつながりが生まれるきっかけを提供する場となること。

内 容

参加した 1 年次生に対して 2 年次生以上のピア・サポータ、研修生が質問に答え、試験勉強の方法を話すなど 1 年次生が抱いている不安を解消することに努めた。

●当日スケジュール

12:10～12:20 準備＆待機

12:20～12:50 活動実施

効 果

14 名の学生が参加し、参加した学生からは「勉強方法が分かった。」、「答案の書き方が聞けてよかったです。」などの声を頂いた。また、同じ学部同士の新入生間で会話するきっかけとなった様であった。

改 善 点

- ・一般学生の参加者が法学部のみであった。
- ・参加者から他学部の先輩に話は聞きにくいとの声があった。
→待機するピア・サポータの所属学部を増やすべきであった。
- ・Q&A 集等を準備することで、どの学部の新入生の質問にも対応できる環境を準備しておくべきだった。
→企画の準備段階で各学部の情報を収集・整理し、それをまとめるようにする。

感 想

法学部のみとなったが一般学生の参加者が 14 名であったことは良かった。次年度に繋げられる改善点もいくつかあったため、次年度以降ではより多くの新入生に参加してもらい、更に多くの学生の学びに対する意欲を向上できる企画としていきたい。

◆企画名 輝く自分に！～ファッショングから自分磨き始めませんか？～

日 程 平成 27 年 11 月 20 日（金）

場 所 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム

参加者数 36 名（ピア・サポート 5 名、研修生 4 名、一般学生 27 名）

目 的

- ・コーディネートのポイントを学び、ファッションに関する知識を身に付ける。
- ・ファッションの知識を磨くことで学生が自信を持って学生生活を過ごせるようにする。

内 容

関西大学在学中で読者モデルとして活躍中の学生とカラーコーディネーターの学生にファッションのポイントを教えていただいた。また、パーソナルカラー診断やファッションチェックを行っていただいた。

効 果

参加者のアンケート結果などから、本企画の満足度は大変高いものであった。講演で行ったパーソナルカラー診断の感想でこれからの服選びの参考になったという意見もあり、本企画の目的であるファッションに関する知識を身に付けることができたと思う。

改 善 点

満員御礼が出たにも関わらず、当日欠席の方が複数いたため募集人数をもう少し多く設定しておくべきであった。また、KUSP のメンバーがパソコンやプロジェクターの操作の方法をきちんと理解していなかったため、事前にリハーサルをしておくなど、準備を徹底しておくべきだった。

感 想

講演内容はファッションの勉強になることばかりでお二人の話が聞けて本当によかったです。会場も笑いがおきたり良い雰囲気だった。講演していただいたお二人も笑顔で帰られたのでこの企画が実施できてよかったです。



◆企画名 関西盲導犬協会総合訓練センター見学ツアー
日 程 平成 27 年 11 月 21 日（土）
場 所 関西盲導犬協会総合訓練センター
参加者数 16 名（ピア・サポート 4 名、研修生 1 名、一般学生 11 名）
目 的

- ・盲導犬についてのお話を聞くことで、盲導犬や視覚障がい者についての知識を深める。
- ・盲導犬をより身近に感じて、盲導犬や目の見えない人、目の見えにくい人の理解を深める。

内 容

12:15 関西大学総合図書館前集合・受付
13:00 関西大学出発
14:30 現地到着
14:30～16:30 施設見学
16:30 現地出発
18:00 関西大学到着

効 果

施設の方から視覚障がいの人が普段どのように生活しているかということや、盲導犬のほか、介助犬である聴導犬の話を聞くことができた。普段は知ることができない障がいのある人の生活や、そのような人の生活を支える介助犬の役割について知る機会となり、障がいのある人に対する支援などをどのようにしていくべきかなどを考える機会となった。

参加者の感想やアンケートよりほとんどの参加者から「とても満足した」「満足した」という回答を得ることができ、満足度が高い企画であった。

改 善 点

- ・実施日が土曜日ということもあり、KUSP のメンバーがあまり参加できなかった。
- ・バスが時間通りに来なかつたが、バス会社に連絡をする方法がなかつたため、バス会社の電話番号を控えておく必要があった。
- ・応募の時に電話番号を書いていない参加者がおり、集合時間になつても連絡が取れなかつたため、応募の際に電話番号を必ず書いてもらい、書いていなかつたらこちらからメールを送るなどして電話番号を聞く必要があった。
- ・交流が目的ではなかつたが、参加者間の交流を含めたコンテンツを考えてもよかつた。

感 想

本企画では、個人ではなかなか行く機会がない場所に行き、普段授業ではあまり得ることができない知識を深めることができた。今後も団体でなければ行くことが難しい場所で様々なフィールドワークを企画していきたい。

◆企画名 関大生起業家に聞く！私の大学生活の過ごし方
日 程 平成 27 年 11 月 24 日（火）
場 所 第 1 学舎 1 号館 A201
参加者数 53 名（ピア・サポート 7 名、一般学生 46 名）
目 的

- ①学外で様々な活動をしている関大生について知る機会を一般の学生に提供することで、目にした学生が刺激や気づきを得ることにつなげる。
②学外で取り組んでいる活動について、学内で紹介する機会を提供することで関西大学への帰属意識を高めることにつなげる。

内 容

主に、自分の学生生活について悩みを持っている学生を対象に、多様な過ごし方のうち一つを自身の経験をもとに同じ関大生に紹介してもらう機会として企画した。スピーカーは「Lovegraph」フォトサイト・写真撮影サービスの運営を行っている、社会学部 4 年次生駒下純兵さんにお願いした。トークテーマは①課外活動と学業の両立法②新たな一步を踏み出す方法③自分の好きなことの見つけ方④“カップル写真を撮る”とは？などで、自身の経験に基づきプレゼンテーション形式でお話をしてもらった。

効 果

1~4 年次生までの男女学生に幅広く参加してもらうことができた。参加者アンケートでは、大半が「大変満足」「満足」との回答だった。また、「駒下さんの話が面白かった」「WEB サイトだけでは分からず人柄等を知ることができた」「前々から興味のあった Lovegraph の話を楽しく聞けた」等、ポジティブな感想が多く寄せられた。

改 善 点

- ・1 週間に本企画を含め 3 つの企画を実施したため、直前準備に余裕がなかった。
- ・途中退室、途中参加の参加者が少し気になった。
- ・教室の広さ的にマイクがなくても十分声は届いたが、記録用動画を撮影していたため、マイクを使った方がよかったです。
- ・質疑応答以外にも、もう少し参加者参加型の企画になるような工夫があつてもよかったです。

感 想

序盤に自身の経験・取り組んできた活動についての紹介をしてもらったが、それだけではなく、「挑戦すること」についてどう捉えているかなどを同じ学生の目線で語ってもらうことができてよかったです。 「探そうと思わないと、見つからないこともある。チャンスも探さないと見つからない。意思をもって行動することが大事。小さな決断を繰り返すことで、人生は変わっていく」という駒下さんならではのメッセージは、同じ現役関大生だからこそ、参加した学生の心に届く・背中を押すものだったのでないかと思う。

企画当初の、「関大生と関大生を結ぶ企画」「色々な大学生活を送っている関大生の存在を知ることで自分の大学生活の参考に、より豊かにしてもらいたい」という KUSP 側の狙いと、スピーカーの学生の「自分だからこそ伝えられることを話したい」「母校に爪跡を残したい」という想いが合致して実現することができた。

本企画は「関大生の団体及び個人で特技を“教える”ことのできる学生を募集し、“教わりたい”学生の前でレクチャーしてもらう」という KUSP の新たなパッケージ企画 “あなたの得意、シェアしませんか？”の一環として実施した。“教える”側と“教わりたい”側の学生の相互の成長を目指すことを目的とするこの形での企画は、11 月 20 日（金）に行われた「輝く自分に！ファッショニから自分磨きはじめませんか？」の企画に続き 2 件目であった。関大生同士の交流・また関大生が関大生をサポートするという新たな試みの企画をこれからも検討していきたい。

◆企画名 Happy Valentine Cooking @関大
日 程 平成 28 年 2 月 9 日 (火)
場 所 総合学生会館凜風館 2 階 生協食堂
参加者数 13 名 (ピア・サポート 7 名、一般学生 6 名)
目的

バレンタインの時期にお菓子作りをすることで、バレンタインを楽しむことが減ったという関大生のニーズに応え、雰囲気を味わい楽しんでもらうことを目的とした。1班を4、5人とし、協力してお菓子作りをすることで、コミュニケーション力の向上や、新たな交流が生まれることも併せて目的とした。また、自宅でも実践しやすいレシピを紹介することで、料理に親しみをもってもらうことを目指した。

内 容

関大生協さんにバレンタインにちなんだお菓子（ワッフル）の作り方を教えていただいた。混ぜ合わせ、焼き、盛り付けの工程を行い、実食をした。調理後に生協の方へ料理に関する質問コーナーを設け、学生が普段の料理方法や栄養面などについての質問を行った。

効 果

- 名札を付けていたので参加者同士や生協の方に名前を呼んでもらうなど親しみやすい雰囲気の中、活発に交流することができた。
- 「ペアで相手に食べてもらうためのワッフルを作る」工程を含めることで、相手のことを考えながら作る、バレンタインデー要素をさらに盛り込むことができた。
- 栄養士さんへの質疑応答が積極的に行われ、栄養や調理のコツについて学ぶことができた。
- 参加者アンケートでは、初めてのワッフル作りがいい思い出となった、みんなでお喋りをしながら作るのが楽しかったなど、満足度の高さが伺える感想が多く、好評であった。

改 善 点

- 時間が押してしまった（飾りつけの工程に想定以上の時間がかかった）。
- 連絡なく欠席した人がいた。
- 最後に KUSP の紹介、今後の企画を告知する時間がなかった（締りのない終わり方だった）。
- 応募期間がテスト期間と重なっていたため応募人数が少なかった。
- 企画当日までに参加者から参加費が徴収できていなかった。
- ワッフルを生協さんにある機械で焼いたため、目的の 1 つである自宅でも実践しやすいレシピではなかった。

感 想

アンケートでは高い満足度の回答を得た。就職活動期間のため 3 年次生の参加者はいなかつたが、他の学年の男女に広く参加してもらうことができた。また、ペアワーク・グループテーブルにすることで、調理中に自然と会話が生まれ、全体を通しての満足度の高さにもつながったと感じる。普段、あまり料理をしない学生も多かつたが、生協の方の丁寧な指導により、全員が楽しんで調理をすることができていた。

「恋人・友達にあげるためのチョコレート」という一般的なバレンタインデーの概念に拘ることなく、あえて「バレンタインデー自体を楽しむ」ことを意識し「関大生で楽しむバレンタインデー」という企画を目指した。ワッフルは普段なかなか作る機会もなく、新鮮さもあったと思う。また、本学でこのような企画が行われることに関して、参加者以外の学生から多くの反響を得た。前例がなく、また春休みという学生が大学にあまり来ない時期での実施であったが、この企画のために集まった学生間で交流が生まれる良い機会になったと思う。

◆企画名 「ココロオークション×関大軽音団体 SPECIAL LIVE」

日 程 平成 28 年 2 月 19 日 (金)

場 所 KU シンフォニーホール

参加者数 168 名 (ピア・サポート 8 名、一般参加者 160 名)

目 的

関西大学文化会軽音楽部出身の人気ロックバンド、ココロオークションと現役の軽音系サークルが同じステージに立つ場を提供することで、学内の軽音団体の活性化を狙って行った。また、出演者、来場者同士の新たな交流の機会を提供すること目的として行った。

内 容

学内の軽音団体、軽音楽部（一部）、ポピュラーミュージック創作研究会、千里山シェルター、PersonaPerdida、groove の 5 団体の協力の下、プロのアーティストと同じステージに立って演奏していただいた。機材・照明は軽音楽部（一部）、音響は音楽スタジオ BASS ON TOP に依頼した。ゲストには、ココロオークションとクロナガスをお招きした。

効 果

アンケート結果より、参加者の男女比は 5 : 5 であった。学年別に見てみると、1 年次生、2 年次生が多かった。満足度の項目においては、アンケート回答者の 80% 以上が「大変満足」「満足」との回答だった。またアンケートのコメントから、本企画が関西大学で軽音楽をしている人に刺激を与えたものであったことがわかり、当初の目的が達成できて良かったと感じる。

改 善 点

- ・観客がより楽しめる有意義な空間作りのため、適宜、観客への声かけを行う。
- ・広報をより効果的に行う。
- ・司会では、敬称をきちんとつける（ココロオークション様、など）。
- ・協力いただいた団体への配慮、気遣いが欠けていた。軽音団体同士がコミュニケーションをとれるような配慮が必要だと感じる。
- ・協力者との連携が希薄であった。SNS だけで終わらせらず、役割分担も顔を合わせてしっかりとしたりしたほうがよかったです。
- ・想定していたスケジュール通りの進行とならなかった。
- ・KUSP 内でのリハーサルを別日にしておくべきであった。

感 想

- ・本学学生がプロのアーティストと同じステージに立つという貴重な場を創出できた。
- ・楽屋の飾り付けやおもてなしを喜んでもらえた。事前に参加者からメッセージをいただくことはこれからも継続していく方がいいと思う。
- ・リマインドメールの送信、アンケートの作成などかなり後輩に作業をお願いした。もちろん失敗もあったが、作業を覚えてもらういい機会になった。
- ・本学 OB の活躍を目の当たりにすることができた（ココロオークション、クロナガスとも初めて見る人が多かったが、観客が引き込まれていた）。
- ・他団体を巻き込んで大きな企画を行えたことが、今後に向けての自信となった。

2.2.5 KUコアラ

■ ピア・コミュニティの趣旨

KUコアラは、関西大学の学生の図書館利用の向上を図るため、図書館での展示、図書を通じた交流といった学生視点による独自の工夫を行っている。これまでに、留学生や新入生対象の図書館案内、特集本コーナーの設置、講演会の企画・運営、読書会を行った。

■ 所属人数

23名（男7名、女16名）

*1年次生5名、2年次生3名、3年次生7名、4年次生8名（平成28年3月末現在）

■ ミーティングの概要

定例会議 週1回

■ ピア・コミュニティ内の連携

メンバー間での情報共有が上手く行えず、企画の進行に大幅な遅れが生じたことがあったので、定例会議にて、企画の進行状況などの情報共有を徹底して行うようにしている。また、メーリングリスト（ML）により、諸連絡や定例会議の議事録は迅速に行きわたっている。さらに、MLのアプリやonedriveを使用して情報共有を行ったり、情報共有の強化策として、MLの「読了確認」の機能を使用している。しかし、インターネットに不慣れなメンバーがいるので、使用方法を明記したマニュアルを配付したり、積極的に使用して慣れてもらう必要がある。

■ ピア・コミュニティ間の連携について

過去に留学生対象図書館案内といった他のピア・コミュニティと連携する企画や他のピア・コミュニティとの共催企画を実施した。また、ピア合宿にも参加しているが、全体的にまだ改善の余地があると思われる所以、積極的に連携していきたい。

■ 教職員との連携について

図書館事務室が支援母体であり、活動予定を担当者がメールで連絡している。また図書館事務室に伺う時は事前にメールでアポイントを取ることにしているため、親しいやりとりができる、連携が強まった。

■ 昨年度の課題の改善点

昨年度の課題であったアンケートの回答率の低さは、アンケートをポスターの形式にすることで、改善が見られた。また今年度も新メンバーの確保ができたので、次年度も春学期に企画を開催し、新メンバーを確保したい。

◆企画名 コアラ☆ミュージアム第7弾「和～吟剣に励み～」
日 程 平成27年4月1日（水）～5月29日（金）
場 所 関西大学総合図書館内4カ所
参加者数 15名（ピア・サポート4名、吟詩部11名）

目的

- ・連携先となる課外活動団体に、活動紹介・アピールの場を提供する。
- ・総合図書館に来た学生の興味・関心領域の拡張を促す。
- ・総合図書館に自習スペース以外の空間作りをする。
- ・KUコアラの知名度を上げ、他団体との繋がりを持つ。

内 容

- ・本企画は、学内の課外活動団体と本コミュニティとの連携企画である。総合図書館内に関西大学文化会吟詩部の活動風景等の写真及びその説明文を展示し、学生に吟詩部の活動の様子や楽しさを伝える。
- ・展示場所：①1階エントランスカウンター付近、②階段、③2階人文系フロアトイレ前、④2階開架カウンター周辺
- ・広報：インフォメーションシステム、ポスター掲示、授業内宣伝を行った。授業内宣伝では図書館広報誌 KULione を配布し、本企画の広報と合わせて KUコアラの活動近況報告も行った。
- ・評価方法：回収 BOX に投函してもらう紙のアンケートと併用するものとして、展示場所にポスターとシールを設置し、観覧した学生自身にその場でシールを貼って評価してもらった。ポスターでは、本企画自体に対する感想を問うものと各展示写真に対する場所毎の感想を問うものとの2項目を制作した。

効 果

- ・ポスターとシールによる評価について、「吟詩のことを知ることができた」という欄にシールが多く見られたことから、コアラ☆ミュージアムがおおむね高評価であることが分かった。
- ・吟詩部の活動を広く学生に知っていただき、知名度の向上に一役買うことができた。
- ・予定調整が上手くいかない中で企画班と密に連絡を取るように徹したこと、打ち合せの回数は少なくとも情報共有が正しく円滑に行える状況を作ることができた。

改 善 点

- ・ポスターでの評価には多数のシールが貼られていたが、紙のアンケートの回収率は低く、今後実施するにあたり、紙のアンケートに代わるニーズ収集方法を考える必要がある。
- ・本企画はKUコアラと課外活動団体との共催企画であるが、KUコアラが共催しているというアピールが今回は足りなかつたのではと考えられた。次回は、コアラ☆ミュージアムを見に来た方々に、両団体のことを知ってもらえるような展示内容にする望まれる。
- ・今後も企画を円滑に進めるために、KUコアラのメンバーと共催団体、図書館事務室の方としっかりと連携する必要がある。

感 想

- ・前回の反省を考慮し、企画班を4名に増やしたうえで仕事を分散させるようにした。企画班4名のみですらなかなか集まらず予定調整には苦労したが、その分メールなどのやり取りを密にし、余裕を持ったスケジューリングを心がけた。
- ・吟詩部の方の協力と図書館事務室の方の支援により無事展示を終えることができた。
- ・KUコアラの企画において、他団体とコラボレーションする企画、人目を引く長寿企画が「コアラ☆ミュージアム」である。責任者は共催団体とも図書館事務室とも連携しなければならず大変に感じられるかもしれないが、伝統を作るという意味でも、本企画が今後も行われていくことを強く期待する。

◆企画名 KUSP×KU コアラ『写真で伝える世界、東北の今』図書館特集展示
日 程 平成 27 年 5 月 1 日（金）～5 月 15 日（金）
場 所 関西大学総合図書館 2 階 階段横スペース
参加者数 12 名 [KU コアラ 9 名（ピア・サポート 8 名、研修生 1 名）、KUSP3 名（ピア・サポート 2 名、研修生 1 名）]

目的

KUSP 主催講演会企画『写真で伝える世界、東北の今』の講演者の安田菜津紀さんの著書を図書館で紹介することでより多くの学生に講演会に参加して頂けるようにする。

内 容

- ・本事業は KUSP 主催講演会企画『写真で伝える世界、東北の今』でお招きする安田菜津紀さんの紹介及び著書の紹介を関西大学総合図書館で行うものである。
- ・関西大学総合図書館 2 階階段横スペースに本棚を一台設置し、そこに安田菜津紀さんの紹介文や著書『ファインダー越しの 3.11』の内容紹介文などを描いたポップを設置した。また、著書が高槻ミューズキャンパス大学図書館に所蔵されている為、別のキャンパスの所蔵図書を取り寄せる方法も併せて案内した。

効 果

- ・講演会当日の参加者が 80 名を超えたので、企画の目的に適うことができた。
- ・講演会の宣伝チラシを 8 枚設置したが撤去時には 0 枚になっていたため、興味を持った人が手に取ってくれたことがわかった。

改 善 点

- ・企画実施予定日までの期間が短く、また KUSP との連絡が上手くいかなかった為、事業計画書と参加者名簿の提出が企画終了後になってしまった。企画を実施する際、特に他コミュニティと連携して企画を行う場合、準備期間をしっかりと確保しなければならない。

感 想

- ・他コミュニティと協力して 1 つの企画を実施できたのが良かった。

◆企画名 図書館広報誌 KULione vol.7 の誌面作成
日 程 平成 27 年 8 月 1 日 (土) ~9 月 30 日 (水)
場 所 関西大学千里山キャンパス構内、関西大学総合図書館
参加者数 16 名 (ピア・サポート 10 名、研修生 6 名)
目 的

KU コアラおよびその活動内容を多くの学生に知ってもらい、興味を持ってもらう。

内 容

図書館広報誌 KULione vol.7 4 ページ目の下 1/3 に KU コアラの活動報告を掲載。活動報告では、2015 年春学期に実施した「関大生に読んでもほしい本 100 選」と「コアラ☆ミュージアム第 7 弾」での活動を紹介した。

効 果

KULione を読んでもらうことによって総合図書館内での掲示は KU コアラが企画したものであるとの認識に深く貢献すると見込まれる。

改 善 点

企画に必要な情報を各企画の実施担当に催促したがなかなかもらえず原稿が遅れたため、必要な情報は早め早めに準備をし、原稿を作成する。

計画書の記入漏れや間違いが多々あったため指摘を受ける前に何度も見直しをして書き直す手間を省くようにする。

感 想

企画を担当することが初めてということもあり、何をすればいいのか、次にどうすればいいのかと手順がまったくわからなかつたが、支援部署とメールにて相談し、無事にやり遂げることができよかったです。

企画をやり遂げるためには、KU コアラ内の情報の共有や支援部署の協力が必要なことを改めて実感し、企画をするにあたって何をすれば効率よくできるのかを理解することができた。

◆企画名 コアラ通信
日 程 平成 28 年 1 月 7 日 (木) ~ 3 月 31 日 (木)
場 所 関西大学総合図書館及び各キャンパス図書館
参加者数 9 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 2 名)
目 的

- ・主に図書館が所蔵する図書の中から、テーマに沿ったものを紹介する。
- ・手元に残る媒体を作成することで、企画終了後も図書館内外で利用者が図書を選ぶ際の参考になることを期待する。

内 容

- ・おすすめの図書を紹介するリーフレットを作成・配布する。形態は A4 用紙で巻三折り。本文には過去の企画で紹介した図書の中から 15 冊のおすすめの図書を掲載する。
- ・リーフレットの配布と併せて、掲載図書のうち 3 冊を総合図書館内に展示する。

効 果

- ・企画終了後も図書館内外で利用者が図書を選ぶ際の参考になったと考える。
- ・配布期間中、展示図書は全て貸し出されており、利用者の関心の領域を広げることができたと考える。

改 善 点

- ・3 月末の時点で総合図書館、各キャンパス図書館共にかなりの残部がある。主に配布時期が学期の終盤からになり、試験期間、春季休業と重なってしまったことが原因と考えられる。円滑な企画進行及び利用者の動きに沿った実施を心掛けたい。
- ・内容に関しては出版年度等十分な書誌情報を記載し、紹介文をより充実させるべきである。また、印刷面のかすれが目立つものが多くいため、より見やすい編集、印刷に留意したい。

感 想

- ・リーフレット設置の依頼のみではあったが、今回初めて各キャンパス図書館と連携して企画を行った。今後も各キャンパス図書館も意識した企画を行いたいと思う。
- ・継続を想定した企画であるため、今回の経験を活かし次に繋げたい。

◆企画名 図書館広報誌 KULione vol.8 の誌面作成
日 程 平成 28 年 1 月 15 日 (金) ~ 3 月 31 日 (木)
場 所 関西大学千里山キャンパス構内、関西大学総合図書館
参加者数 9 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 2 名)

目的

KU コアラ並びにその活動内容を多くの学生に知ってもらい、興味を持ってもらう。

内 容

図書館広報誌 KULione vol.8 4 ページ目に KU コアラの活動状況を掲載。

- ・2016 年度実施予定の「特集本展示」企画を主に掲載する。
- ・活動報告では、2015 年度に実施した「コアラ通信」の活動を紹介する。

効 果

KULione を読んでもらうことによって総合図書館内で行っている KU コアラの活動を認知してもらうのに貢献すると見込まれる。

また、「特集本展示」企画への興味・関心を持つてもらうことができると考えられる。

改 善 点

- ・計画書の記入漏れや間違いが多々あったため、支援部署から指摘を受ける前に見直しや KU コアラ内での確認を行う。
- ・情報共有がうまくできず支援部署のお手を煩わせてしまったので、情報共有に積極的に取り組む。

感 想

この企画が初めての担当ということもあり、何をすれば良いのか勝手が全くわからなかったが、支援部署とメールにて相談するなどして最後までやり遂げることができ、よかったです。

企画をやり遂げるためには、KU コアラ内の情報の共有や支援部署の協力が必要なことを改めて実感することができた。

2.2.6 KU サポーターズ

■ ピア・コミュニティの趣旨

KU サポーターズとは、“仲間同士の助け合い”をキーワードに、学生による学生のための学生相談を実施している。大学生活における些細な悩みや問題について誰かに話を聞いてもらいたい時や、悩みがあるけれど誰に相談してよいかわからないという時など、KU サポーターズが開設している「ほっこり相談室」で、少しだけ手を差し伸べ、サポートすることを目的に活動している。また、ほっこり相談室での活動以外にも、年に数回講演会やワークショップなども開催している。

■ 所属人数

16名（男8名、女8名）

*1年次生3名、2年次生4名、3年次生6名、4年次生3名（平成28年3月末現在）

■ ミーティングの概要

2週間に1回（その他、企画の進捗状況によって適宜実施）

■ ピア・コミュニティ内の連携

KU サポーターズ用に作成されたメーリングリスト（ML）や本学のSNS、Google ドライブにおいて、連絡や情報の共有を行っている。平成22年1月からピア・コミュニティを立ち上げたため、当初は毎週定例でミーティングを行い、1週間の活動共有や、作業の進捗状況などの確認を行っていた。その後も、メンバー間で互いに密に連絡を取り合ながら、互いの役職を超えてうまく連携を図っていた。

■ ピア・コミュニティ間の連携について

KU サポーターズの代表者を中心に、他のピア・コミュニティとの活動共有や共同企画などの進捗状況を共有した。こうすることで代表間での連携傾向を高めることには繋がったが、KU サポーターズに所属する、代表者以外のメンバーは他のピア・コミュニティとの連携はまだ十分とは言えないため、代表者以外のメンバー間での連携も見据えて活動していくことが今後の課題として挙げられる。

■ 教職員との連携について

学生生活支援グループが支援母体であり、活動場所との物理的距離が近いため、相談を行いやすい環境にある。そのため、学生生活支援グループの教職員が適宜ミーティングに参加し、活動状況やアドバイス、意見交換などをを行うことで、うまく連携をとりながら活動が実施できている。このほか、大学学生相談室やハラスメント相談室の相談員の先生とも、共催企画を行うなど学生生活支援グループ同様に連携を図っており、双方によい関係性が築けている。

■ 昨年度の課題の改善点

来年度に向けて、以下の改善点が挙げられる。まずKU サポーターズの認知度の向上。具体的にはKU サポーターズの広報活動を積極的に行い、通年企画である「ほっこり相談室」の認知度向上、講演会やワークショップといった企画への参加者の増加を目指す。また、KU サポーターズのメンバー一人ひとりがより良いサポートを行うため、自主的なトレーニングや情報共有が重要となる。発足して7年目を迎えたが、未だ体系化が不十分である点も一部あり、全員が問題意識を共有し課題に取り組む必要がある。

◆企画名 ほっこり相談室の開室
日 程 平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月 ※期間中、月曜・水曜・金曜に開室
場 所 総合学生会館凜風館 1 階 サポーターズルーム
参加者数 15 名 (ピア・サポータ 12 名、研修生 3 名)
目 的

大学生活というのは、流動的な場や密な対人関係を過ごす場所であり、その環境に上手になじむことができず、大学を自分の居場所とすることに困難を感じている学生も多い。こうした学生たちが抱える「大学内に安心できる居場所がない」「学内の相談機関に行くほどではないが、誰かに話を聴いてほしい」という様々なニーズに応えるため、より身近な立場で話を聞くことを目的とする。

内 容

本事業では、本学全ての学生を対象に同じ関西大学の学生である KU サポーターズのメンバーが相談員を務める「ほっこり相談室」を開室し、トレーニングを受けたメンバーが相談員として対応する。また、開室には 2 人以上の相談員の確保を必須とした。

効 果

本年度のほっこり相談室はのべ 17 件の利用があった。そのうち繰り返し来室される利用者もあり、利用者の心の拠りどころとして、一定の効果があったことが考えられる。また、本年度は相談員のトレーニングを 3 つから 4 つに増やし、研修生とピア・サポータの 2 体制で開室を可能とするなどして開室時間を増やし、利用者にとってより身近な存在となったと思われる。

改 善 点

メンバー不足などから開室時間が少なかった。より多くの利用希望者に利用してもらうためには、メンバーを確保するなどして開室時間を増やす必要がある。また、従来から問題視されている KU サポーターズ及びほっこり相談室の認知度の低さについては、ほっこり通信や企画等を通して周知に力を入れたものの改善出来なかつたため、来年度の課題である。

感 想

KU サポーターズは数年に渡り、ほっこり相談室を軸に活動してきたが、開室時間の減少やそれに伴った利用者数の減少はやはり改善すべきだと思う。ほっこり相談室は利用者が多ければ良いというものでもないが、多くの学生に存在を知つてもらい、必要としている学生に利用してもらいたい。

本年度は繰り返し来室される方が多く、また、「話を聴いてもらいスッキリした」「来て良かった」などの声をいただくことも多かった。利用者にとって居心地の良い空間を、来年度も引き続き提供したい。

◆企画名	<u>ほっこり通信 2015 年度版</u>
日 程	<u>平成 27 年 4 月 1 日（水）～平成 28 年 3 月 31 日（木）</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館などの「ほっこり相談室」ポスター掲示場所</u>
参加者数	<u>15 名（ピア・サポート 12 名、研修生 3 名）</u>
目 的	

ほっこり通信の記事内容にストレスマネジメントといった内容を掲載することで、KU サポーターズの活動のキーワードである「ほっこり」を紙面から提供することを主な目的とする。また、外部からは活動内容が見えにくい側面があるほっこり相談室、延いては KU サポーターズの存在や活動内容を知ってもらうことも目的とする。

内 容

ほっこり通信 Vol.7 では、Vol.6 に引き続き、一人で簡単にできるストレスマネジメントの方法を紹介した。内容には、「アクティブレスト」と「1 人カラオケ」の 2 つの方法を掲載。また、Vol.6 同様、サポーターズメンバーが感銘を受けた格言も掲載。

ほっこり通信 Vol.8 では、ダイレクトにほっこり相談室を知ってもらえるように、ほっこり相談室の場所や、利用方法を掲載。

効 果

一人で簡単にできるストレスマネジメントの具体的な方法を掲載することにより、簡単にストレス軽減を期待できる方法を知ることができる。それにより、ストレスと上手く付き合えるようになることが期待できる。また、以前からあるほっこり相談室の周知不足の問題を、ほっこり通信 Vol.8 で解消につなげることもできた。

改 善 点

ほっこり通信 Vol.7 で格言コーナーを設けていたが、Vol.8 ではスペースの都合上廃案になってしまったため、今後コーナーとしてやるものは今まで以上に持続性を考えて取り入れるようにする必要があると感じた。

感 想

ほっこり通信 2014 年度版では、事業計画書で報告した発行予定数を発行しきれなかつたという反省点があった。しかし、今回はその反省を踏まえ、年 2 回の発行予定数をしっかりと発行することができたことが、よかったですの一つだと思う。

◆企画名	<u>Facebook を利用した広報活動</u>
日 程	<u>平成 27 年 4 月 1 日 (水) ~ 平成 28 年 3 月 31 日 (木)</u>
場 所	<u>Facebook 上</u>
参加者数	<u>15 名 (ピア・サポート 12 名、研修生 3 名)</u>
目 的	

これまで KU サポーターズはインフォメーションシステムやポスターを利用し、ほっこり相談室の開室日時や企画の周知を行ってきた。しかし、情報社会の拡大に伴い、大学生の多くは SNS から情報を取り入れていることが 2013 年度企画「ソーシャルデトックス」で明らかになった。そこで、多くの関大生が日常から利用している Facebook を利用して広報活動を実施し、より多くの関大生にとって身近な存在に KU サポーターズがなれることを目標としている。

内 容

Facebook を利用し、ほっこり相談室の開室スケジュールを掲載して一般学生の方にはほっこり相談室の開室日を告知した。また、学園祭期間に行った「なんでも Q&A」等の企画を行う際には、企画の紹介とそれに合わせて企画のポスターも同時に掲載し、告知した。

効 果

ほっこり相談室の開室スケジュールなど、KU サポーターズの活動を手軽に見ることが可能な SNS である Facebook 上にアップすることで、一般学生にはほっこり相談室の存在を知ってもらえたと同時にほっこり相談室の利用につながった。また、企画についても同様の効果が得られたと考える。

改 善 点

SNS の利点は、発信者が発信した内容を、一般学生が手軽に見ることができる点に加え、発信者側も手軽に発信したい内容をアップロードすることができる点にあると思う。しかし、KU サポーターズとして内容を発信する場合、内容が適切かどうかを職員の方々にチェックしていただく必要があるため、SNS の利用意義が半減してしまっていると感じる。KU サポーターズに合った別のツールを探すか、用途をもう一度確認し、利用を続けるかどうか検討する必要があると思う。

感 想

昨年度 Facebook の更新が停滞してしまった反省点があったが、今年度は企画が多かつたことなどもあり、昨年度より大幅に更新することができた。

◆企画名 関大生なんでも Q&A
日 程 平成 27 年 4 月 2 日 (木) ~4 月 4 日 (土)
場 所 総合学生会館凜風館 1 階 屋外ブース
参加者数 9 名 (ピア・サポータ)
目 的

関西大学に入学したばかりの新入生は、誰かに相談したくともその「誰か」を見つけることが困難であると思われる。また、学内にはさまざまな部署があり、それぞれに学生の支援を行っているが、新入生はどこに行けばよいのかもわかつてはいない。

本事業の目的は、右も左も分からず新入生に対して、授業やサークル活動などの大学生活や、日常生活（勉強とバイトの両立など）に対する不安を解消し、また時には適切な部署を紹介することであった。また、本事業を行うことで、間接的にではあるが KU サポーターズの存在を新入生に認知してもらうことも狙いとしていた。

内 容

当日の最初のシフト担当のメンバーが、ピアエリア内の備品（椅子、机及びノートパソコン）を凜風館前に移動させ、ブースの開設を行った。またその際、ピア・コミュニティのジャンパーと腕章を着用した。

以後はブースでの待機、加えてプレートを持ちながらキャンパス内の巡回を行い、相談があった場合は適宜対応した。具体的には、第 1 学舎など建物の場所の質問（キャンパスの地図を見せる、実際に案内するなどして対応）や、サークルのブース場所の質問（サークルガイドで調べる、オリエンテーション実行委員会のテントまで誘導するなどして対応）が多かった。最後のシフト担当者がブースの撤収作業を行い、ピアエリア内に備品を戻し、鍵の返却等も行った。メンバーの都合により、開始・終了時刻が各日異なったものの、3 日間に渡ってこの活動を続けた。

効 果

本事業は 67 件の相談を受け、大学生活に不安を抱く新入生に対して適切な部署への紹介やピア・サポータの経験を通じた大学生活についてのアドバイスなどをを行い、3 日間を通して新入生のサポートができたと思われる。もう一つの狙いであった KU サポーターズの周知についても目的を達成できたように思われる。また、多くのメンバーが参加したことで KU サポーターズ内の仲も深まったように感じた。

改 善 点

- ・キャンパス内の巡回を正式に活動の一環として位置づけ、予め巡回時に携帯するプレートを作成しておく。
- ・事前に昨年度の相談内容や実施状況に目を通し、様々なケースへの応対方法を考えておく。
- ・設置や撤収にかかる時間も考慮し、早めの行動を心掛ける。

感 想

利用者も多く、今回「関大生なんでも Q&A」に対する需要は十分にあったと思われ、事業を行って良かったと思えた。今後もこの活動を継続していきたいと考える。

一方で、この事業を開始してから数年が経っているにもかかわらず、未だに反省点や改善点が数多くあることも問題であると感じる。先述の内容と重複するが、過去の記録に目を通し周到な準備をすることが、今後の KU サポーターズにおいて最も重要なことであると思われる。

今回の活動において良かった点は継続し、反省点は次に生かして、より関大生をサポートできるよう、今後の活動に繋げていきたい。

◆企画名	<u>KU サポーターズ夏季自主勉強会</u>
日 程	<u>平成 27 年 9 月 22 日 (火) ~ 9 月 23 日 (水)</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム</u>
参加者数	<u>12 名 (ピア・サポータ 9 名、研修生 1 名、職員 2 名)</u>
目 的	

相談対応のロールプレイング、ケース検討、ストレスマネジメント、書類の書き方、企画、今後の役職をどうするかなど活動の方針、KU サポーターズの秋学期の活動についてメンバーでの話し合いの場を設ける。また、ほっこり相談室運営をはじめとした KU サポーターズの活動の質を上げるべく、ワークを通して各メンバーの技術の向上を図る。

内 容

- ・3 回のミーティングを通して、秋学期の企画の内容と時期、2 人体制で相談室を開室するに必要な新たな内部研修、役職交代と交代の時期について話し合い、意見をまとめる。
- ・活動の質を高めるワークとして、これから KU サポーターズでの活動において重要な、各書類の書き方、新たな内部研修の練習、新メンバーに対する研修の確認などをを行う。
- ・メリハリをつけるため、ミーティングや活動の質を高めるワークの間にメンバー間の協調性を高めるためのワークを 3 つ導入する。このワークを通して、肩の力を抜き、メンバー間の意見交換やコミュニケーションを円滑にする。

効 果

ミーティングでは、意見を出しやすい雰囲気で、誰もが積極的に意見を出していた。司会も受け身にならず、積極的に意見を求めて全体の流れをまとめていた。活動の質を高めるワークでは、活動していくうえで重要な心構えや必要な作業を振り返ることで、なぜそのような心構えや作業が必要なのか、全体が改めて認識する場となった。協調性を高めるワークでは、メンバー同士が互いの印象について話し合い、ゲームを通して協力することでメンバー間の距離が少し縮まり、今後の活動に活かしていくための協調性が向上した。また、当日の状況に臨機応変に対応するメンバーもいた。

改 善 点

ミーティングでは、秋の企画について様々な発案がされたが、KU サポーターズの理念と企画の内容がかみ合わず、少し行き詰った感があった。また、役職や新たな内部研修についての話し合いでは、将来的なことなのでどんな事態が予測されるかをもう少し話す必要があった。活動の質を高めるワークでは、準備不足と感じるメンバーが目立った。当日のシミュレーションをするべきだと思われる。協調性を高めるワークでも、事前の打ち合わせや準備が不足していたと感じたメンバーが多くいた。LINE で打ち合わせするだけでなく、集まって打ち合わせをするなどの対策が必要である。

感 想

勉強会の雰囲気は真面目な雰囲気と楽しい雰囲気にメリハリがあり、一貫してよい雰囲気だった。メンバー全員が積極的に勉強会に参加していた。一方で、参加人数が少ないとということや、これからどう活動していくのかについては新メンバーにとって不安な要素である。勉強会以外でも話し合いの場を設け、どう人を集めのか、企画の進行状況がどうなっているのか確認することが必要なのではないかと感じた。

◆企画名	<u>なんでも Q&A</u>
日 程	<u>平成 27 年 11 月 1 日 (日) ~ 11 月 4 日 (水)</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 1 階 屋外ブース</u>
参加者数	<u>11 名 (ピア・サポータ 9 名、研修生 2 名)</u>
目 的	

学園祭期間中の学内は普段とは異なるため、目的の展示や模擬店に辿りつくまでに道に迷うことや、普段は利用しない学内施設を利用する必要に迫られることもある。一方、学園祭期間中に困っている学生のサポートを行う施設は少ない。こういった学生に対して、同じ学生の立場からのサポートまたは適切な場所への橋渡しをする必要があると考えた。本事業では、学園祭の実施期間中に何か困ったことが起った学生をサポートすることと、屋外に出て学生を支援する活動を通じ、KU サポーターズの周知を目的とした。

内 容

本事業では、凜風館 1 階屋外にブースを設置し、ピアジャンパーと腕章を着用した KU サポーターズのメンバーが、常時 2 名以上でブースに待機し対応した。学内で困っている一般学生に対して、道案内やイベントの時間などの質問を受け、回答した。その際こちらから声掛けはせず、一般学生の方から声をかけていただいた場合のみ対応した。構内の学舎の位置や企画や模擬店、トイレの場所を尋ねる例が多くあった。その場合はパンフレットを用いて口頭案内を行ったり、口頭だけでは分かりにくい場所へは、直接道案内を行った。利用者は関大生よりも一般の方が多かった。

効 果

ブース内の雰囲気がよく、困っている方には気軽に声をかけてもらえた。口頭での説明や直接案内することで利用者の困難を取り除けたと思われる。事前の知識不足などがあったものの、インターネットを活用し多くの質問に答えることができたため、疑問を残すことなく学園祭を楽しんでもらえたと感じた。

改 善 点

- ・看板が新歓用のものだったため、学園祭用のものを新しく作っておく。
- ・様々な質問に答えられるよう、過去のデータを参考に事前に確認し知識を共有しておく。
- ・わかりやすく説明するために対応方法についてマニュアルを作るなど、メンバー間で共有しておく。

感 想

今回の「なんでも Q&A」の利用は、188 件 340 名と前回 2013 年度開催の 464 件を大きく下回った。その中で 144 件 257 名が学生ではなく一般の方であった (75% 以上)。関西大学ピア・コミュニティ、KU サポーターズは関大生に向けたサポートを目的としているため、今回の企画はあまり有意義なものでなかったように思われる。来年度以降も実施するのであれば、このことをしっかりと議論した上で実施したい。

しかし、利用者数は減少したものの参加したメンバーは多く、外部との関わりだけでなく内部の関係もより良好になったのではないだろうか。その意味でも次回からの企画も多くのメンバーが参加できるようにしたい。

◆企画名	KU グチコレクション
日 程	平成 27 年 11 月 10 日 (火) 、 11 月 12 日 (木) 、 11 月 17 日 (火) 、 11 月 19 日 (木)
場 所	総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア、凜風館周辺、悠久の庭
参加者数	19 名 (ピア・サポート 4 名、研修生 1 名、一般学生 14 名)
目 的	

学生が慌ただしい日常を過ごしている中で、知らずに溜まった不満や愚痴は数知れない。誰かに言いたくても言えない、またはどう吐き出したら良いのかわからないといった学生のために、我々が愚痴を聞くまたは聞きに行くことによって学生が気軽に心の掃除や整理をする手伝いをしたい。さらに、慢性的な悩みを抱える学生のために、グチコレを通してほっこり相談室の周知を行う。

内 容

ピアエリアにブースを設置し、ブースで愚痴を聞く担当と、外に出て愚痴を聞きに行く担当に分かれて行った。最大利用時間は 30 分に設定し、利用内容を記録用紙に適宜記録し、メンバー内で共有した。

当企画の基本理念として、愚痴を聞くことを目的としているため、こちらからはアドバイスをせず、アドバイスを求められた場合は、ほっこり相談室の利用をリファーした。当企画の実施と並行して、ほっこり相談室の周知を積極的に行つた。

また、グチコレの発案者である龍谷大学のグチコレ代表者からマニュアルを提供していただいた。龍谷大学グチコレの理念や実施方法などを参考にし、昨年度行った KU グチコレをアップグレードした。

効 果

学業に関する愚痴、アルバイトに関する愚痴、課外活動に関する愚痴など 14 件の愚痴をきいた。ブースにはほとんど人が来なかつたため、凜風館を出て自分たちから聞きにまわつたが、無理に愚痴を探すケースや、「特にない」と回答されるケースがあつた。突然愚痴を聞かれてもすぐに思いつかない学生が多く、気軽に心の掃除や整理をする手伝いをしたいという目的は達成できなかつた。しかし、愚痴をためている学生にはほっこり相談室の案内ができた。

改 善 点

- ・準備物の置いている場所やブースの配置方法がわからないメンバーがいた。事前に情報の共有と、リハーサルの徹底をする必要がある。
- ・他の企画と新メンバーの研修が重なつて、本企画に参加できないメンバーがいた。他の企画や KU サポートアーズの全体的な動きも含めた計画が必要である。

感 想

改善点が多く、初日は戸惑うこと多かつたが、メンバーがすぐに意見を出してくれたので素早く対応できた。今までの企画の実施方法に問題点が多く見られたので、次の企画の時に活かせるようにメンバーで話し合おうと思う。

また、グチコレクションという企画に対してメンバーが全体的にあまり積極的ではなかつた。なぜかは実行して分かつたが、目的がきちんと果たせておらず、また実施する側もあまり意義を見いだせていないかった様子だったので、この企画自体を見直し、より有意義な企画を考える必要があると感じた。

◆企画名	<u>「聴く」と「話す」で人心掌握！</u>
日 程	<u>平成 27 年 12 月 11 日（金）</u>
場 所	<u>総合学生会館凜風館 4 階 和室</u>
参加者数	<u>16 名（ピア・サポート 5 名、研修生 2 名、一般学生 8 名、職員 1 名）</u>
目 的	

昨今、学生に対してコミュニケーション能力が強く求められるようになった。一概にコミュニケーション能力と言っても様々なものがあるが、その一つに会話を通して他者の心を掴むことが挙げられる。そこで本企画は、現職の産業カウンセラーである鵜飼柔美先生に「聴く」・「話す」についての講義とワークを実施していただき、関西大学の学生が心を掴む会話への理解を深めることを目的とする。

内 容

- ①コミュニケーション・「聴く」・「話す」の基本などについての小講義
- ②コミュニケーション・「聴く」・「話す」の基本などについてのワーク
- ③上手な頼み方、断り方、自己主張の仕方についての小講義
- ④上手な頼み方、断り方、自己主張の仕方についてのワーク
- ⑤振り返り・アンケート記入

効 果

■企画の内容について

- ・講義とワークの両方を取り入れることで、学びながら実践することが出来た。
- ・最初に「他人と会話することが苦手だ」と話していた参加者が、ワーク内で笑顔で話すようになったり、途中から積極的に発言する参加者が出てきたりと、企画を通じて成長する参加者が見られた。
- ・参加者が少人数であったため、賑やかな雰囲気を苦手とする参加者にとっては、居心地が良かったのではないかと考えられる。

■その他

- ・メンバーも、参加者とともに楽しみながら参加することができた。
- ・アンケート結果が概ね良好であった。

改 善 点

- ・1時間半という時間に対して、内容がやや多かった。ワークが終わる際に、喋り足りないという顔をする学生が多く、またワークの時間が長ければ参加者同士の仲もより深まつたと思われる。
- ・広報を始めるのが遅く、想定よりも参加者数が少なかった。
- ・応募があったものの来なかつた学生が1名居たが、何も対応ができなかつた。応募の際に電話番号を訊いておくべきだった。

感 想

メンバーも参加者と同様に楽しみながら企画に参加することで、参加者間のコミュニケーションを自然に促すことができた。最初に「話すのが苦手」と言っていた参加者が、だんだん笑顔で喋るようになっていたりする姿を見て、本企画を実施して良かったと思えた。今回のみならず、鵜飼柔美先生によるコミュニケーションに関する講座は毎回好評であるため、またこのような企画を行いたい。

2.2.7 ぴあかんず

■ ピア・コミュニティの趣旨

ぴあかんずは、ピア・コミュニティの活動を広報するニュースレター「ぴあかんず」の制作を行うピア・コミュニティであり、各ピア・コミュニティの活動取材のほか、各号において紙面企画を実施することで、関西大学におけるピア・コミュニティの普及とピア・サポートへのきっかけづくりを目指している。

また、紙面企画については、普段の学生生活に数多く存在している学生同士が支えあい、助け合い、成長しているシーンに着目し、関西大学に関係する人物や出来事を取り上げている。

■ 所属人数

0名（平成28年3月末現在）

■ ぴあかんずの現状

昨年度から在籍するサポートが不在となり、活動休止状態に陥っている。支援体制は維持しているため、活動を希望する学生がいれば、できる限りの支援をし、「ぴあかんず」の発行を行いたい。

■ 課題

活動を再開するためには、何よりもまず活動希望者の獲得が不可欠である。ぴあかんずのサポートとして活動することの魅力を発信するなど、メンバー募集に力を入れるとともに、活動が再開した場合も軌道に乗るまでは、活動におもしろさややり甲斐を感じられるよう、教職員・TAが積極的に支援を行う必要があると思われる。

2.2.8 関西大学ITピア・コミュニティ “i.com”

■ ピア・コミュニティの趣旨

関西大学ITピア・コミュニティ “i.com”（以下、i.comとする）は、“Do IT!（ITしようぜ！）”をキャッチコピーに、ITスキル（主にパソコンを利用し、映像・Web・ポスターなどを作成する技術）を行使し、関西大学の学生に技術支援する活動を行う。具体的には、「Microsoft Office」や画像編集ソフト「GIMP」の使い方を教える講習会の開催や、ワンポイントアドバイスをまとめた小冊子を作成し、学内で配布する活動などを実施してきた。

■ 所属人数

0名（平成28年3月末現在）

■ i.comの現状

平成27年度からサポートが不在となり、活動休止状態に陥った。

支援体制は維持しているため、活動を希望する学生がいれば、企画を行うためにできる限りの支援を行いたい。

■ 課題

活動を再開するためには、何よりもまず活動希望者の獲得が不可欠である。i.comのサポートとして活動することの魅力を発信するなど、メンバー募集に力を入れるとともに、活動が再開した場合も軌道に乗るまでは、活動におもしろさややり甲斐を感じられるよう、教職員・TAが積極的に支援を行う必要がある。

2.3 ピア・サポートからのメッセージ

学生のうちに経験しておくべき活動

ピア・コミュニティ運営本部 奥田悠斗

私は他のサポートとは異なり、大学入学以前からピア・コミュニティの存在を知っており、「学生が主体的に行動し、企画を行う」という大学生だからこそできることをしようと考えていたため、入学した際には絶対に入ろうと考えていた。だが、ガイダンスを受けてみると高校生の時に感じていたこととは少し異なっていた。ガイダンス前は学生のみで企画を行うものであると思っていたが、学生だけでなくTA・大学職員と共に何ヵ月もかけて企画を作り上げていくことを知り、学生だけでなく年齢が上の方に説明することなど将来に生きると考えて改めて入ることを決意した。

私はピア・コミュニティの最大の長所は、先ほど述べたように学生のみの場合よりも大人の人の意見も聞くことができるこであると考えている。また、企画書、報告書などの書類関係、相手を説得する力、会議の進行といった「社会人基礎力」を大学で体験できることなど他のサークルや学生団体ではできない経験を積めることも将来を考えると大変貴重な場である。自分自身も2年間で様々な経験をして成長できたと感じている。以前は、大勢や面識のあまりない人の前で話すときには緊張して、頭が真っ白になり言葉に詰まることがあったが、企画等で人前で話す機会が増えたことで徐々に慣れてきて、余裕を持てるようになった。話の構成など改善点はあるが、ピアに入っていなければ人前で話すことに抵抗を覚えたままであっただろう。

運営本部は今年度の夏から2回生を中心となって活動をしているが、活動人数が少なく、その中で「1日研修企画」、「学園祭企画」といった大きな企画が控えていた。多忙な日々が続いたが、1回生にも役割を担ってもらうなど全員で協力して進めていき、双方とも無事に終えることができた。大変な面もあったが、その分達成感も得られる結果となった。ただ、活動を通して、運営本部としての課題も見つかった。それは、本団体の広報活動の不足である。知名度の問題もあるが、それより深刻なことは興味があるのに、どうすれば入れるのか分からぬという人が見られたことである。このような学生は大学内に少なからずいると考えている。まずは知名度の向上よりもこの人達をいかに迎え入れができるかを考えることが必要である。この問題を解決することができれば、より団体を活発にできるのではないかと考えている。より良い団体にして未来に繋げていくことが自分の責務だと思うので、企画や普段の活動を通して、本団体を盛り上げていきたいと思う。

私は運営本部の本部長となり、考える範囲や内容が増えたことで、視野も広がり、様々なものの考え方ができるようになった。大変だと分かっていたがそこに飛び込むことで新たな経験が出来たので、是非ピア・サポートだけでなく研修生の皆さんも積極的に活動し、新たな経験や発見をしてもらいたいと思う。

私たちが礎に

KU ブリッジ 岡田彩那

大学に入学した当初、私は次に定めるべき目標も未だ決まっておらず、これから約 4 年間をより有意義な時間にする為にどんな部活・サークルに入ろうかと迷っていました。自分の性格を考えると真面目な雰囲気の団体が合っているかなと思い、大学とともに活動するピア・コミュニティが目にとまりました。高校時代は「大学生になったら 1 年の交換留学に行こう」とと思っていたものの単位認定の関係で 4 年間での卒業が難しいと分かり断念したという経験があり、また留学生の友人が出来たことがきっかけで彼らの力になりたい、もっと知りたいと思うようになり、いくつかあるピア・コミュニティの中から KU ブリッジに応募しようと決めました。

KU ブリッジで活動し始めて得たものはどれも今の自分にとって大きな役割を果たしていますが、その中でも初めてミーティングに参加した時の感動ははっきりと覚えています。KU ブリッジでは週 1 回のペースで約 1 時間半の全体ミーティングを行っていますが、1 週間のうちにこれほどまでに密度の高い時間はないと言えます。毎週あっという間に終わってしまうほど、皆時間を忘れて議論したり発表したりします。その内容は様々で、企画の進捗状況の報告や問題点の吟味、メンバーそれぞれが日々の経験の中で有効に使えそうな知識の共有など多岐に渡ります。和気藹々とした雰囲気の中進められますが、1 回生も 4 回生も院生も関係なくそれぞれの意見がこれからの KU ブリッジを動かすのですから皆真剣です。

また、ピア・サポートとして行うたくさんの活動も、やりがいの 1 つです。1 つの企画の為に要する準備期間は、発案から実施まで長いものなら半年以上かける場合もあります。その間必要な企画書や予算書などの作成、関係部署との連絡会議や広報などを全て学生が行います。未知の経験に初めは戸惑いますが、先輩サポートや職員の方の協力を得て、企画を成功へと導きます。各メンバーにも得意・不得意がありますが、互いに補うことでうまくタスクを分散するスキルもここで身に付きます。社会人として働く為に必要な人的スキルを学べるというのもピア・サポート活動の魅力です。

関西大学にピア・コミュニティが発足して 8 年が経とうとしています。活発な活動はでできていますが、まだまだ発展途上のプログラムです。今現在、あるいは今後数年間活躍するピア・サポートは、まさに関西大学のピア・コミュニティの礎を作る人材と言えると思います。この経験を悔いのないものにする為、これからも仲間と一緒に頑張っていきたいと思います。

「ピア（仲間）」の大切さ

KU サポートプランナー 久岡桂子

私は中学から高校までの六年間クラス替えがありませんでした。一クラス 20 人程度のコミュニティの中で生きてきた私は、この大きな大学で「置いて行かれないように」と必死でした。ありとあらゆる新歓やお花見に行き、この大きな大学で自分の居場所を見つけようとしていました。そんな中で、インフォメーションシステムで KUSP が主催する料理企画を知り、そこで今の副代表である長谷川に出会いました。「この子とずっと仲良くしたい！」という気持ちだけで、半ば強引に KUSP に誘い、現在に至ります。

代表になって一年間、自分の中で大きな変化がありました。それは「人を頼るようになった」ということです。活動といつても、会議の席でただ笑ってその場にいるだけで、大して何をするでもなく、三回生になりました。そのため、代表になった当初は本当に大変でした。担当職員にも「出来ると思っていない」「正直不安」と言われ、マイナスからのスタートでした。「なにくそ」と思い、必死で活動しました。「私たちが止まってしまえば、KUSP が止まってしまう」と思い、どんどん追い込まれていきました。そんな時、母親が病気になり、時間的にも精神的にも活動するのが困難に感じる時期がありました。そんな時、私の事をサポートし、気にかけ、頼ることが苦手なわたしに何も言わないで、仕事を進めてしてくれる仲間の存在と、かけてくれる提言に「自分ひとりでやっている」というのは間違いで、全員でやるものだということに気づきました。

未来の KUSP を作るのは私たちではなく、後輩たちです。「やり方も分かっているし、私がやったほうが早い」とその場の効率性だけを考えるのは間違いで、自分たちがいなくなつた後の KUSP で、後輩たちをいかに頑張らなくちゃと思わせるか、自信を持って活動できる環境を作るかが何より大事だと学びました。長い目で物事を見ようとする考え方方が身についたように思います。

私は、仕事が遅く、諦めも早く、リーダーシップもなく、しっかりしていなくて、人前で話すのも苦手で、上に立つ人間ではないと毎日思っていました。それは今も変わりません。周りの支えがなければ、今の KUSP はありませんでした。

大学生活をどう送るかは、人によってさまざまですが、わたしは KUSP を選んで、本当に良かったと思っています。そして、大事な仲間に出会わせてくれた KUSP に感謝しています。この先 KUSP を担っていく後輩たちには、自分たちの持つ若いパワーで「大学をもっといいものに変えてやる！」というハングリー精神を持って、活動していってほしいなと思います。常に最高を更新していってください。これから何十年先も、KUSP が続いていきますように。

KU コアラで得たもの

KU コアラ 濱中詩織

1回生の春、大学では何か新しいことを始めたいと思った私はボランティアのサークルを探していました。ですが、活動時間が講義と重なっていたり、バイトとの両立が困難だったりして、これはという団体を見つけられずにいました。そんなとき目に留まったのが、図書館で展示を行っていた「コアラ☆ミュージアム」です。そこでピア・コミュニティとKUコアラのことを知りました。学生同士の助け合いということでボランティアの要素もあり、また主な活動の場が図書館であることも私にとってとても魅力的でした。サークルとは異なるので何か難しい部分があるのではないかと少し悩んだのですが、新しいことをという気持ちで見学に行き、入会することに決めました。

これまでのKUコアラでの経験は大変面白いものでした。大学の図書館で自分たちの考えた企画を行うことができる。他の団体では経験できるものではありません。まず研修を経て正規のピア・サポートになります。その過程も部活やサークルには無いもので、ぼんやりと今後企画を担当する際の責任を感じました。企画班として企画に関わったのは27年度春に実施した「コアラ☆ミュージアム第7弾」と「関大生に読んでほしい本100選」からです。特に吟詩部さんと提携して行った「コアラ☆ミュージアム」では共催先の募集・決定から打ち合わせ、掲示物の作成にも参加しました。立場や目的の違う方々と一緒に一つの事を進めていくことは大変新鮮でした。相手の意見を反映させながら準備を行うことの難しさや自分たちの中では出なかったアイディアを多く得られたことが印象的です。企画の内容上、手続きも多かったので、先輩の動きを見ているだけでも一つの企画を実施する上で様々な課題があるのだと感じました。

私にとって一番の転機はKUコアラの代表になったことです。私は人前に立つのが苦手で、リーダーという役割はこれまで縁の無いものでした。それが、他になる人がいなかつたために、代表をすることになってしまったのです。会議一つ行うにしても慣れないことばかり。他のメンバーも新しく入ってきた人たちで頼るに頼れないと思い、一層不安になりました。でもやってみると何とかなるもので、少しずつ慣れてきました。至らないところばかりで他のメンバーには申し訳ないのですが、今では開き直ってそれぞれ役割をお願いしています。自分の問題だけでなく、次の代への引き継ぎなど運営の面でも課題は山積みです。しかし、こんな機会でもなければ避けていたであろうことですので、何事も経験と思って一つずつ向き合っていきたいです。

KU サポーターズと私

KU サポーターズ 海老名ゆりえ

「相談して心が軽くなりました」

この言葉を、KU サポーターズの活動を通して利用者さんから何度もいただいた。悩みを持った方の力に少しでもなれているんだ、利用者さんの未来が明るい方向へと向かうお手伝いができたんだ、そういう風に感じができる活動は KU サポーターズならではだと思う。そんな活動をしている KU サポーターズに何故私が入ったのか、またこの活動のやりがいや、この活動を通じて得たことを簡単にお話したい。

私は商学部なので、心理系の授業をまったく受けておらず、カウンセリングについての知識なんてこれっぽっちもなかった。知識もないのにカウンセラーのようなことをしたいと思ったのは、誰かの心の支えになれるような活動をしてみたいという思いがあったからだ。また、もともと人の話を聞くことは好きだったので、相談業務ができるという KU サポーターズの活動は私に合っているのではないかと思い、1回生の秋学期に所属していたダンスサークルを辞めてまで KU サポーターズのドアをたたいた。

KU サポーターズに入ると、私が入りたてだった当時は心理系を専攻している先輩が多く、先輩方はみんな本物のカウンセラーのようだった。(先輩方の中では卒業後にカウンセラーになった方も実際多くいる) 何の知識もない私だったが、KU サポーターズ内で行われる研修や、合宿・勉強会などを通じてカウンセリングの知識、特に傾聴力については深く学ぶことができた。ちなみに、KU サポーターズで得た知識や技術は就職活動でもとても役に立った。しかし傾聴力やカウンセリングの知識を用いて相談業務にあたるということは、実際には難しいものであった。マニュアル通りの相談者さんはまず来ないし、その場その場で対応を工夫する必要がある。はじめは先輩方の対応を見ていただけであったが、経験年数が上がるにつれ、対応後に利用者さんから「相談してよかったです。また来ます。」というお言葉をいただけたときは本当にやりがいを感じる。

また、KU サポーターズでは私たちの代より上の繋がりが強くとても仲が良い。年に 2 回ほどは KU サポーターズ創設期のメンバーまでも呼んで食事をしたり、少人数で旅行に行くこともあり、先輩方には卒業されてからも仲よくしていただいている。おそらく一生ものの仲間とこの KU サポーターズで出会えたと言っても過言ではないだろう。もちろん下の代とも仲良くさせてもらっている。

このように、誰かの支えとなれる活動ができ、自分自身も傾聴力やカウンセリングスキルを身に付けることができ、素敵な仲間と共に活動ができるというのは KU サポーターズだからではなかろうか。私は、KU サポーターズの一員として大学生活を送ることができ、本当に幸せな 4 年間だったと胸を張って言うことができる。

2.4 支援部署職員からのメッセージ

すべての人の成長につながる活動

ボランティア活動支援グループ 春名未希

「ピア・サポート＝学生同士の助け合い」、文字にするととても簡単そうですが、ピア・サポート活動の支援にあたり約一年経った今、本当にその本質を理解して支援にあたることが出来ているのかと振り返ります。

ボランティア活動支援グループに配属され、そこで初めてピア・サポートという言葉を知りました。ピア・サポートのことはもちろん分からず、まともにボランティアもしたことのない私が、学生に何を教える・伝えることが出来るのか。活動を支援するというのは、どれくらいの距離感で学生と接するものなのか。今でも模索しています。ただ、コミュニティのミーティングに参加するなど活動を近くで見守り、先輩職員・学生支援室 TA のみなさんからさまざまな気づきを得、さらにはピア・サポート研修、スキルアップ講座など、実施する側の身としながら、学生に交じって多くのことを学ばせていただき、それらを通して私自身が「成長」させてもらっていることは確かだと思うのです。また、春学期に、正課授業「関西大学ピア・コミュニティ入門」へピア・サポート活動の支援担当者として参加させていただいたことは、何の知識も経験もない私にとって、広く思いもよらない視点からピア・サポート活動について考える貴重な機会となりました。

学生との関わりでは、主にピア・コミュニティ運営本部の活動を見守る中で目を見張ることとして、先輩学生の後輩に対する接し方がありました。気になることがあっても、解決策のような直接的な言葉ではなく、後輩自身に気づいてもらえるような絶妙なアドバイスを投げかけてあげています。きっとその先輩は、さらに先輩からそのように接してもらっていたのではないでしょうか。ピア・サポート活動は支援される学生にとってよりよい事業であることは大前提で、事業を実施するためのノウハウを次の世代へ継承していくことが大事ですが、ピア・サポートたちがそこに向かうまでの話し合いや作業の過程で、さまざまな人と関わり、経験をする中で「成長」し、ノウハウだけではない人間性をも引き継いでいるのだと感じることができました。

ピア・サポート活動は、それに関わるすべての人にとって刺激となり、養分となり、「成長」するきっかけを与えてくれるのだと思います。まだまだ未熟で学生たちから教えられることが多い私ですが、たくさんの可能性を秘めている彼らが、この活動で感じたものを自分のものにしてさらにおおきく成長することを期待しながら、支援部署職員として精一杯支援していきたいです。

KU ブリッジとの活動を通して

国際教育グループ 金井一陽

「留学生と日本人学生の架け橋になりたい」

そんな想いで 7 年前に設立された KU ブリッジ。留学生の日常生活をサポートするというミッションのもと、留学生と日本人学生の相互交流促進を目指して活動しています。関西大学の全学生数のうち約 2% を占める留学生にとって心強い存在です。

平成 27 年度も例年通り活発な活動を展開してきましたが、その一方で設立 8 年目の KU ブリッジの存在意義をあらためて見つめ直したり、チームビルディングの必要性について向き合ったりする機会が特に多い一年でした。ただその中で代表学生が当事者意識をもち、メンバーを巻き込みながら問題解決に取り組むことで「今まで先輩たちが目指してきた」ではなく、「今年自分たちが目指したい」KU ブリッジ像がだんだんと見えてきたように感じます。そうして次第にメンバーの表情がみるみるうちに変わっていく様子をそばで見守ることができたのも、ピア・コミュニティ活動に関わる担当職員としての一つの醍醐味でした。とはいえ、その背景にはピア・サポート事業で長年経験のある TA の方の熱心なサポートがあったことも忘れてはなりません。職員とはまた一味違う TA と学生との距離感でコミュニティ全体をケアする有意義な役割を果たしていただきました。

人ととの間に生まれる国際交流は、まさに KU ブリッジのもつピア・サポートの意義が十二分に活きてくる分野だと思います。そんな分野で、いつしか日本人学生だけではなく留学生もメンバーとして運営に関わるようになったことは、KU ブリッジがピア・コミュニティとして関西大学の「国際交流シーン (Scene)」に持続的な働きかけを行ってきた一つの成果でしょう。そして何よりサポート・研修生一人ひとりと接して感じるのは、冒頭にも述べたように、KU ブリッジの一員としてのまっすぐな想いです。ぜひこの想いを、そして「ピア」ならではの視点やアイデアを大切にしながら、これからも活動に取り組んでいってほしいと思います。

10 年計画を掲げる KU ブリッジ。次年度はこのキャンパスにどんな”ブリッジ”を築いてくれるのでしょうか？今後の活躍に期待しています。

できることを誠実に積み重ねて

学生生活支援グループ 的場友賀

今年度で勤めて丸6年になります。この6年間のうち、KUコアラを3年、KUサポートーズを1年、支援部署として担当させていただき、ピア・サポートと関わる機会には恵まれてきました。

最初の頃は、学生をうまくサポートすることができずに、部署内の調整をすることで手一杯でした。こう書くと、なんだか理解のない同僚や上司ばかりだったように思われてはいけませんので、弁明しておきますと、単に事務職員として未熟ゆえのことでした。

未熟さゆえに、学生の思うように事を進めてあげられなかつたときは、自分が担当したことで、本来ならしなくともいい苦労を学生たちにかけているのではないかなどと悩むこともありました。

そんな私も多少なりとも成長し、部署内外の調整の要領がわかり出すと、今度は学生に近道を教えてしまうことが増えました。先回りして失敗の芽を摘ませたり、書類の書き方ではヒントを通り越して、文章を私が考えてしまうようなこともあります。これをしてると、学生も私もラクなのですが、最初の頃とは真逆に、学生たちが本来経験できたはずの苦労を取り上げてしまったような気持ちになり、後悔しました。

そんな日々を経て、担当職員の役割がおぼろげながら自覚できてきた頃、それが今年度なのですが、今年は今年で、ハッとするようなことが幾度となくありました。その多くは、共にピアに携わる諸先輩方からの指摘で気付くのですが、助言いただくときは大抵、学生の出してきた企画を深く考えることなく前に進めようとしていました。

お互いを助け合おうというピア・サポートの精神を欠いてしまうと、多くの企画はただのイベントになってしまいます。私自身、そこを本当の意味で意識できておらず、安易に進めてしまいそうになるときがあり、なぜそれをやりたいのかを学生に問いかけることの大切さを学んだ一年でした。

ここまで、私個人の未熟さや反省をつらつらと書き連ねてしまったのですが、学生たちはそんな私の苦悩をもお見通しで、その上でいつもいつしょに考えてくれます。

担当職員として、それらしい指導をしなくてはと背伸びをしていた時期もありましたが、そんなことをしなくても、こちらができるなどを誠実に積み重ねればいいのだと思うようになりました。

ピアを通じて、さまざまな出会いがあり、特に今年は担当TAの方々と折りに触れて相談をし、連携しながら学生をサポートできたことが何より良かったことでした。

ひとりの人間として、誰かの役に立ちたいという思いをもって活動している学生に常に尊敬の念を抱いています。これからも微力ながらサポートに携わっていけば幸いです。

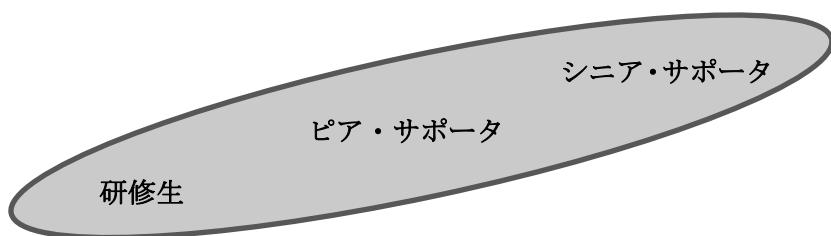
3 ピア・サポートの育成

3.1 ピア・サポートの育成

これまで、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」を中心とし、「関西大学ピア・サポート研修」や日常の活動支援等を通して、ピア・サポートの育成を行ってきた。例年100名前後の学生がピア・コミュニティに所属し、ピア・サポート活動の実践を行ってきたが、本学においてピア・サポート活動により継続的・発展的に取り組んでいくためには、これまでの学生センターやピア・コミュニティを支援する教職員（支援部署を含む。）、TAを中心とした取り組みに加え、学生自身による活動の継承が重要であるということから、学生自身によるピア・サポート活動の継承を促進するための仕組みのひとつとして、昨年度、シニア・サポートを新設した。

ピア・コミュニティにおける学生の位置づけ、およびピア・サポート、シニア・サポートの認定条件は次のとおりである。

【ピア・コミュニティにおける学生の位置づけ】



	研修生	ピア・サポート	シニア・サポート
基礎資格	学部生／大学院生	学部生／大学院生	学部生／大学院生
保有するスキル・知識等	ピア・サポートの認定条件を満たしておらず、単独でピア・サポート活動を行うことはできない者。	ピア・サポートの認定条件を満たし、ピア・サポート活動を行うために必要なスキル・知識等を持つ者。	シニア・サポートの認定条件を満たし、ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキル・知識等を持つ者。
活動の範囲	所属するコミュニティでのピア・サポート活動。	所属するコミュニティでのピア・サポート活動。	所属するコミュニティでのピア・サポート活動、および学生によるピア・コミュニティの継承に関するここと。

【ピア・サポートおよびシニア・サポート認定条件】

ピア・サポート認定条件

- ・ピア・サポートの認定条件は、「関西大学ピア・サポート研修」受講修了とする。

シニア・サポート認定条件

- ・シニア・サポートの認定条件は、ピア・サポートとしての活動歴（1年以上）と、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」の単位修得、およびスキルアップ講座のうちコア講座1つ以上を含む計3つ以上の受講修了とする。

昨年度シニア・サポートとなった3名が、「シニア・サポートミーティング」をスタートさせ、そこで話し合ったことを各コミュニティの代表者が参加する「代表者会議」で伝える等、学生たちのシニア・サポートに対する理解を深めるための働きかけを行った。

ボランティア活動支援グループとしても、シニア・サポートおよびスキルアップ講座について「マネジメントBOOK」（ピア・サポート活動に係る諸手続をまとめた冊子）に掲載したり、スキルアップ講座を年間1つは受講することを奨励したが、学生の関心・意欲を十分に喚起するには至らず、今年度、新たなシニア・サポートは誕生しなかった。

シニア・サポートの役割や具体的活動がイメージしにくかったこと、所属するコミュニティでの活動に多忙であったこと、関心を持ってはいるが認定条件を満たすことができなかつたことが、主たる要因であると推察する。

ピア・コミュニティに所属する学生の育成について、システムとしては整えることができ、後述するピア・サポート研修、スキルアップ講座についても、内容・数ともに充実していると自負するが、システム全体としてうまく機能していないのが現状であり、いかに機能させていくかが今後の課題である。

本学においてピア・サポート活動に継続的・発展的に取り組んでいくためには、シニア・サポートは欠かすことのできない重要な存在であり、3名のシニア・サポートがシニア・サポートとしての自覚を持ち、積極的に活動し、次世代に繋いでいこうとしてくれていることが希望の種である。今年度踏み出してくれた一歩を大切にしつつ、シニア・サポートの数やその活動内容を拡充すべく取り組んでいきたい。

3.2 シニア・サポートの活動

昨年度新設した「シニア・サポート」について、今年度、3名のシニア・サポートによる活動がスタートした。手探りながらの活動であり、また3名全員が3年次生ということで、就職活動の準備等により集まって何かを行うことが難しい状況ではあったが、メンバーの尽力により、シニア・サポートとしてどうあるべきか、どのような活動を行っていくか等について話し合い、2月には「シニア・サポート presents『座談会』」を開催することができた。

以下に、今年度のシニア・サポートの活動を記す。

【第1回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成27年9月8日（火） 10:00～11:05

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：シニア・サポートとして初めての活動ということで、シニア・サポートに対するイメージ、シニア・サポートになって変わったこと、シニア・サポートとして行ってみたいこと等について自由に意見を出し合い、今後シニア・サポートとしてどう活動していくかを考え、共有した。

【第2回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成27年10月26日（月） 13:00～14:30

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：ピア・コミュニティの継承に関して、継承すべきことの内容やその方法等について、まさに世代交代中である最近のコミュニティの活動をシニア・サポートとして見て思うこと等、自由に意見交換を行った。また話を進める中で、シニア・サポートの存在も次世代につなげる必要性を感じ、そのためにはどうすればよいかを考えた。

【第3回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成27年12月15日（火） 16:20～17:50

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ボランティアセンター

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：前回ミーティングで「シニア・サポートとして行っていくこと」について整理することとなり、それぞれで具体的な役割・活動案を考えてきてもらい、意見交換を行った。様々な知識や活動経験のあるシニア・サポートだからこそできることは何かという視点で話し合ったところ、「ピアって何？」「ピア・サポートとはどうあるべきか」等について考える場がなく、シニア・サポートがそのような場を作るというのはどうかとの案が

出、座談会を開催することとなった。

【第4回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成28年1月29日（金） 14:20～15:35

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：2月26日（金）に実施するシニア・サポート presents「座談会」の流れや、具体的な内容等について話し合った。

【第5回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成28年2月17日（水） 10:15～12:15

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員1名

概要：シニア・サポート presents「座談会」のトークテーマ、グループの編成、シニア・サポートの役割分担等について話し合い、最後にリハーサルを行った。

【シニア・サポート presents「座談会」】

開催日時：平成28年2月26日（金） 14:00～15:30

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ピア・サポート2名、研修生1名、

学生支援室TA4名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：アイスブレイクとして「自己紹介リレー」を行った後、以下のテーマについて、1テーマ20分を目安に参加者間で話を行った。

〔ウォーミングアップとして〕

- ・ピア・コミュニティに加入したきっかけ
- ・（ピア・コミュニティに加入してから）今までで楽しかったこと、苦労したこと

〔参加者が選ぶテーマ〕

- ・他コミュニティとの交流について

〔シニア・サポートが提示するテーマ〕

- ・（ピア・コミュニティ継続のために）伝えていくべきこと、そのためには何をすべきか

【第6回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成28年3月8日（火） 10:30～12:00

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：シニア・サポート presents「座談会」について振り返りを行った。振り返

りの視点として、①座談会の運営について、②個々のプログラムについて、と分け意見交換を行った。

【第7回 シニア・サポートミーティング】

開催日時：平成28年3月16日（水） 10:30～11:30

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート3名、ボランティア活動支援グループ職員2名

概要：シニア・サポート presents「座談会」の振り返りで得られた気づきをどのように活かすのか、ピア・コミュニティ全体に発信する場合はどのような形で発信するのかについて話し合った。また、次年度の活動についても話し合った。

【代表者会議への報告】

日 時：平成28年3月24日（木） 10:40～11:00

開催場所：総合学生会館凜風館1階 ピアエリア

参加者：シニア・サポート2名、各コミュニティ代表6名、

学生支援室TA1名、ボランティア活動支援グループ職員1名

概要：代表者会議にゲストとして参加し、シニア・サポート presents「座談会」について、第6回・第7回シニア・サポートミーティングで話し合った内容をもとに報告、座談会を通して得られた気づき等を共有した。あわせてシニア・サポートについての告知も行い、スキルアップ講座の受講を呼びかけた。

今年度のシニア・サポートの活動を振り返ると、少ない人数ではあったが、だからこそ密に意見交換を行い、シニア・サポートとはどういった存在であるか、また今後シニア・サポートが目指す方向について共有し、一体感をもって活動を行うことができたように思われる。

一方、シニア・サポートミーティングを行う中で、「ピア・サポートたちのシニア・サポートに対する興味・関心や認知度が低い」「シニア・サポートの数が少なく、活発な活動を行うことが難しい」「シニア・サポートがいるコミュニティといないコミュニティがある」等の課題も見つかった。

次年度この課題に取り組んでいきたいと考えるが、今年度シニア・サポートとして活動した3名は、就職活動等により少なくとも平成28年度春学期中の活発な活動は難しいことが予想される。今後新たにシニア・サポートとなるサポートには、これまでのミーティング記録などを参考に経緯を確認し、シニア・サポートについて理解を深めてもらう等、できることを行いつつ、現シニア・サポートと新シニア・サポートの連携にも配慮し、活動を推し進めていきたい。

3.3 関西大学ピア・サポート研修

1 実施目的 ピア・サポートとしての自覚を促すとともに、ピア・サポート活動をするために必要な知識・スキル等を身につけてもらうことを目的とする。

2 対象 ピア・コミュニティ研修生

3 実施日時・実施場所・受講者数

	内容	実施日時	実施場所	受講者数
①	ピア・サポート概論	6月22日（月）15：10～16：10	凜風館4階 ミーティングルーム2	4名
		6月26日（金）16：20～17：20	第2学舎 C204教室	10名
		8月27日（木）9：30～10：30	第2学舎 C401教室	8名
		11月17日（火）16：20～17：20	凜風館4階 ミーティングルーム2	8名
		3月17日（木）9：30～10：30	第2学舎 C601教室	5名
②	自己理解	6月24日（水）16：20～17：50	凜風館4階 小ホール	12名
		8月27日（木）10：40～12：10	第2学舎 C401教室	9名
		11月19日（木）16：20～17：50	第2学舎 C601教室	7名
		3月17日（木）13：00～14：30	第2学舎 C601教室	7名
③	コミュニケーション	6月22日（月）16：20～17：50	凜風館4階 ミーティングルーム2	4名
		8月27日（木）13：00～14：30	第2学舎 C401教室	13名
		11月16日（月）16：20～17：50	第2学舎 C207教室	9名
		3月17日（木）10：40～12：10	第2学舎 C601教室	8名
④	プランニング	6月24日（水）18：00～19：30	凜風館4階 小ホール	9名
		8月27日（木）14：40～16：10	第2学舎 C401教室	9名
		11月16日（月）18：00～19：30	第2学舎 C207教室	10名
		3月17日（木）14：40～16：10	第2学舎 C601教室	7名

※①～④それぞれについて、いずれかの日程で受講。

※①～④すべてを受講することにより、「関西大学ピア・サポート研修」受講修了となる。

4 概 要 本研修は、学生支援室 TA6 名（氏原・小黒・木岡・佐藤・西森・松本）とともに考案・実施したものである。

具体的には、①③④については昨年度実施したものをベースに、内容をさらにブラッシュアップさせる形で実施した。②については、昨年度実施した内容を参考にしながらも、新たなタイプ分析方法を採用して実施した。

	内容	所要時間	実施担当
①	ピア・サポート概論	60 分	全日程：吉田
②	自己理解	90 分	6月 24 日：佐藤・西森 8月 27 日：西森 11月 19 日：佐藤 3月 17 日：佐藤
③	コミュニケーション	90 分	6月 22 日：木岡 8月 27 日：氏原 11月 16 日：氏原 3月 17 日：木岡
④	プランニング	90 分	6月 24 日：小黒 8月 27 日：松本 11月 16 日：小黒 3月 17 日：佐藤

①では、まず各自の「サポート」に関わる経験を振り返り、サポートをしたりされたりすることのあたたかさや、サポートすることで自分も何らかの影響や刺激を受けていること等を認識してもらった。続いて、ピア・サポートとしての自覚をもって活動してもらえるよう、ピア・サポートの歴史や、ピア・サポートとは何かということ、関西大学にピア・サポートを導入した背景や、関西大学における取り組み、またピア・サポート活動での注意点などを説明した。

②では、他者を支援する活動の基盤となる自己理解そして他者理解について、ユング心理学に基づく「8つの性格別タイプ分析」を取りあげ、習慣化された自己の言動について認識してもらうとともに、多様な性格パターンの存在を知り、人間の多様性を理解する機会とした。

③では、各々の日頃のコミュニケーションを振り返るとともに、ピア・サポート活動を行う際に必要となる、話し手の気持ちを汲み取る「傾聴」と、聞き手が理解しやすいように「自分の意見を明確に伝える力」を身につけられるよう、ワーク中心で学んだ。

④では、プランニングの概要を説明するとともに、どういった目的で誰を対象に何をするのかといった立案や、具体的に何をいつまでに実行するのかといったスケジューリングについて、チェックリスト等でおさえるべきポイントを確認しつつ、グループワークで体験した。

5 所 感 学生支援室 TA が担当する②③④について、それぞれ 2 名体制で準備・実施を行った。実施後に毎回振り返りをきちんと行い、そこで出た改善点等を反映してきたことから、特に秋学期は非常に高い質で実施することができたように思われる。

内容をきちんと伝え、理解・実践できるようにするだけでなく、受講者の興味・関心を喚起し、積極的な参加を促すことができた。そうすることで、参加者間の活発な交流にも繋がった。

受講者アンケートには「体験しながら、楽しく理解できた」「学生が学生を支援するうえで不可欠なことを得ることができた」「あまり自分では考えないような視点で取り組むワークなどがたくさんあって、とても勉強になった」「どのようなことをするか不安もあったが、ペアワーク、グループワークが多く、他のコミュニティの方と仲良くなれてよかったです」などの記述があり、本研修の目的を達成することができたと思料する。

TA 自身も、より良いプログラムを実施することができたことで、満足感、達成感、やり甲斐等を感じたようで、学生支援室として良い流れを作ることができた。現 TA のうち 3 名が平成 27 年度をもって終了となるため、引き継ぎを意識して実施してきたとはいえ、次年度に対し若干の不安があることは否めないが、学生支援室全員で協力し、質の高い研修を行うことはもちろん、TA にとっても良い経験となるよう取り組んでいきたい。

3.4 スキルアップ講座

1 実施目的 ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキル・知識等を身につけ、より多角的で質の高いピア・サポート活動を行えるようにするとともに、ピア・サポートとしての意識を高め、ピア・コミュニティの継承を行う人材を育成することを目的とする。

2 対象 シニア・サポート、ピア・サポート、研修生（平成27年度から、研修生も受講可とした）

3 テーマ・講師・実施日時・受講者数

		テーマ	講師	実施日時	受講者数
コア講座	①	思いやりを形にする	教育推進部教授 正課教育科目担当者 三浦 真琴	2月17日（水） 10:40～12:10	5名
	②	振り返りで自分を豊かに育てる	教育推進部教授 正課教育科目担当者 山本 敏幸	12月16日（水） 18:00～19:30	6名
	③	コミュニケーションを深化させる	正課教育科目担当者 田上 正範	2月9日（火） 14:40～16:10	7名
選択講座	④	ピア・サポート詳論	教育推進部特任助教 元学生支援室 TA・RA 山田 嘉徳	12月3日（木） 18:00～19:30	6名
	⑤	関西大学を知る	学校法人関西大学 法人本部長 五藤 勝三	7月8日（水） 18:00～19:00	12名
	⑥	傾聴トレーニング	学生相談室相談員 鵜飼 柔美	11月18日（金） 16:20～17:50	8名
	⑦	ボディワーク 「身体を通して“思いやり”について考えよう！」	鳴門教育大学予防教育科学センター 研究員 元学生支援室 TA 村上 祐介	6月6日（土） 10:40～12:10	12名
	⑧	ストレスマネジメント	臨床心理士 元学生支援室 TA 河崎 俊博	9月15日（火） 13:10～14:40	19名
	⑨	「怒り」の感情と上手につきあう ために～アンガーマネジメントのすすめ	(社)日本アンガーマネジメント協会 アンガーマネジメントファシリテーター 元関西大学保健管理センター職員 辻川 恵美	11月12日（木） 16:20～17:50	14名

※受講者数には、ピア・サポートの他、学生支援室 TA、支援部署教職員を含む。

4 概要・受講者の声・講師からのメッセージ

①「思いやりを形にする」概要

本講座は、グループワークを中心に進められた。初めに、アーモンドチョコレート 4 粒を〔利き手を使って〕箸で挟み、〔続いて利き手とは反対の手で〕器から器に移動させるワークを行い、うまくできないことの「もどかしさ」を体感した。

ピア・サポートを求める学生は、助けが必要であっても何をどう求めたらよいのかわからない「もどかしい」状態かもしれない、そのようなことを踏まえつつ、活動を行う必要があるとの話があった。

その後、白黒テレビとカラーテレビそれぞれの Advantage と Disadvantage について考えるワークや、「野球のポジション当てゲーム」を行い、楽しみながらも、立場によって良い・悪いが変わることがあること、情報の判断をする際に自分の知っている情報が全てではなく些細なことも軽視してはいけないことなど、多くの学びや気づきを得た。

上述のようなワークに加え、ピア・サポート活動を行う際に参考となるグルーピングの方法や、グループワークの紹介も行われた。

受講者の声

- ・他者を思いやるということを楽しく学べた。
- ・楽しいゲームであったけれども学ぶものもあって、とてもよかったです。
- ・多角的な視点を考える、イメージするきっかけになった。

講師からのメッセージ

身近な人が困っているとき 私達は自然な距離感を保ちながら相談に応じ あるいは相談を引き出し 相手に負担感を与えない形で支援しています ピア・サポートには 諸理論の理解や そこに謳われる理念や文言の記憶よりも そのような他者配慮が自然にできることを再確認することこそ必要だと思います この度のスキルアップでは そこにスポットを当てたいと考えました 参加された方々のホスピタリティの高さに感服するとともに それをとても頼もしく思いました これからも「自然な形」でピア・サポートを実践し 足跡を深く刻んでいって下さい

②「振り返りで自分を豊かに育てる」概要

初めに、ピア・サポートの振り返りとは自分の人間的な成長を評価することであり、そのために自分を客観的に評価するとはどういうことだろうかとの投げかけがあり、それを考えるヒントとして、「羽生さん（将棋棋士）から学ぶピア・サポートの真髄」と題し、ピア・サポートのポイントとして「三手先の読み」「ジリ貧に陥らない意思決定・判断」「『相手の立場にたって』から『俯瞰的に考える』」の紹介があった後、TEDxTOKYO での羽生氏によるプレゼンテーションの映像を視聴した。

そこで学んだ視点を生かして臨場感をもって実践的に体験するワークとして、

「身体障がい者へのサポートを考える」を行った。まず個人で視覚障がい者、聴覚障がい者、肢体不自由者が家から大学に来て帰るまでに困る場所や状況、およびそれに対して自分ができるサポートについて付箋に書き出し、それを用いてグループで共有した。その後、それぞれの障がいについて体感するワークを行った後、再度、困る場所や状況、自分ができるサポートについて付箋に書き出し、共有した。

受講者の声

- ・体験することで、意識や考えが変化することがよく分かった。
- ・実際に体験することで、より共感できたと思う。
- ・相手の価値観への理解の重要性と、難しさを知る機会になった。

講師からのメッセージ

このワークショップの狙いは、ピア・サポートの根本が対等の立場で互いに補完し合えることを体感してもらうことにある。得てして「思いやり」ということを、自分の視点からのみの親切や価値観の押しつけと理解してしまいがちであるが、本来のピア・サポートのリーダーとなるべき人たちは決していつでもこれからピア・サポートについて学んでいこうとする学生たちのリーダーとして君臨していく存在ではなく、その場の状況に応じてコミュニケーションを通して合意形成による意思決定で取るべき行動に移していくものである。そのためには、自分が他の人たちに向けて取るべき行動の意思決定を俯瞰的に考えることが必要となるのです。

大学時代にピア・サポートの考え方を正しく理解し、行動に移せるように出来れば、卒業してからの社会人としての生活がきっと豊かになり、周りの人たちの社会人のロールモデルとして社会のために活躍してくれるでしょう。

これからも、引き続き「ピア・サポートのある本学」の校風作りに貢献できればと思います。

③「コミュニケーションを深化させる」概要

3~4名のグループに分かれ、まず、コミュニケーションとは何かを考えるヒントとして、コミュニケーションに必要なことは何かを思いつく限り書き出すワークを行い、それぞれのグループで出たことを披露しあった。

続いて、講師からいくつかの事例紹介があり、コミュニケーションにおいて言葉は一面しか表しておらず、相手の背景を知ることで言葉の持つ意味がまったく変わってくる、相手の背景を推察しようとすることが大切であるとの話があった。

その後、0歳から現在までの「自分史」を作成するワークを個人で行い、グループ内でそれぞれが作成した「自分史」について紹介しあった。「自分史」すなわち相手の背景を知ることによる、相手に対する印象の変化について確認するとともに、紹介を聞いて気づいたことを発表者に対しフィードバックし、いかに端的に自分を説明するかについて考えたり、伝えたいこと・伝わってほしいことを伝えるにはどうしたらいいかについて相互にアドバイスしあった。

受講者の声

- ・少しでも上手く表現するためには、背景をはじめとした様々なアプローチがあるということを知れたのは大きな収穫であったと思う。
- ・相手が自分に親近感を持ってくれるにはどういうきっかけがあるのか、何が大切なのか、それを見つける良い機会になった。
- ・自己や、自分のコミュニケーションをふり返る機会になってよかったです。

講師からのメッセージ

「コミュニケーションは、言葉のキャッチボールだ」「相手のことを知るために、自分のことを知る必要がある」といったことを口にする学生は少なくない。しかし、実際の場面で、どのように言動すればよいか分からず、立ち止まり、悩みこんでしまう学生も少なくない。自分の気持ちを伝え、相手の気持ちが分かったと感じる力を持つが、実際にどのレベルまで伝え、共感できたのだろうか。得てして、全体の一部でありながら、そのままにしていいのだろうか。言葉や表情など、目に見える情報は、全体の1割程度であり、残りは見えないものである。それらを組み取らなければ、信頼関係を深めることはできない。本講座では、自らの足らないところを再認識し、よりよい関係を築くための考動力につなげることを狙いとした。

④ 「ピア・サポート詳論」概要

初めに、大学でピア・サポートが広まりつつある状況や、どのような領域のサポートが行われているのかということ、ピア・サポートが注目される理由等について説明があった。また、ピア・サポート活動の効果や、ピア・サポートが抱える課題や問題点についても話があり、その後、ワークを行った。

ワークでは、まず1人1人がピア活動のプレゼンテーターであると想定して、「ピア・コミュニティだからこそ学べうこと」についてブレインストーミングを行い、その後、グループでKJ法を用いて整理を行った。

受講者の声

- ・ピア・コミュニティの学びとはどういうものなのかを考えることができて面白かった。
- ・自分たちの活動を振り返るようなきっかけにもなった。
- ・自分が何の活動をしているのか、しっかりと指針があることで、より積極的に自信を持って企画等を実施していくけそうである。

講師からのメッセージ

当講座ではピア・サポートに関する理論や実態を踏まえてピア・コミュニティ活動を通した学びの可能性について考えました。ワークではピア・コミュニティ活動をめぐる課題やピア・サポートの専門性といった、ピア活動の方針に関わる興味深いテーマも浮上しました。今後もピア・コミュニティだからこそその学びについて探求を続けてもらうことを期待します。

⑤「関西大学を知る」概要

大学生数の変化、キャンパスライフの変化、学生気質の変化など、大学を取り巻く環境の変化をはじめ、関西大学がピア・サポートプログラムに取り組むことになった背景、ピア・サポートとして身につけておきたい知識やスキル、ピア・コミュニティに期待すること、充実したキャンパスライフを過ごすために心にとめておきたいことなど、ピア・サポート活動を実践するために必要な知識や意識について、幅広い話があった。

受講者の声

- ・関西大学についてだけではなく、大学生としての姿勢なども学べてよかったです。
- ・ピアという一面だけではなく、関西大学のピアという視点を学ぶことができたと思う。
- ・大学入学時に持っていた目標ややる気を思い出した。これから学生生活を続けていくにあたって大切なことを確認できた。

講師からのメッセージ

ピア・サポートの皆さん、キャンパスライフに迷ったり、悩んだりしている仲間の学生の支援のために取り組まれていることにまずもって敬意を表したいと思います。

相談など人と関わるときにはその相手の状況、相手を取り巻いている環境を理解することが大変重要です。この講座では、キャンパスライフの意義や学生気質、大学を取り巻く環境の変化などを他者尊重の姿勢、ホスピタリティ・マインドを持つべきピア・サポートへの期待を含めてお話しさせていただきました。

⑥「傾聴トレーニング」概要

はじめに、「聞く・訊く・聴く」の意味の違いや、コミュニケーションの仕組みについての説明があり、このプロセスの中でどういったエラーが生じるのかを学んだ。

次に、傾聴の基本を確認したり、ペアになり話し手／聞き手に分かれて、聞き手は相手が話すことを手元で計算しながら聞くというロールプレイや、石のお地蔵さん（あいづち・うなづきなどをしないで話を聞く）ロールプレイを行うことで、「聞き方」によって生じる影響等について、実践を交えつつ学んだ。

その後、「私の大切な思いシート」を使い、まずは個人でシートにある言葉のうち大切だと思うものに○をつけ、その中で特に大切だと思う5つを選び、その5つを繋げて文章を作った。個人ワークの後、ペアになりお互いに作った文章を披露し合い、ワーク終了後には、聞き手は「相手の話を十分に聴けたかどうか、聴いているときどんな感じだったか」、話し手は「話したいことを自由に話せたか、聴いてもらうことでどんな変化があったか」等について受講者全員で振り返った。

受講者の声

- ・実際のワークを通じて傾聴を体験でき、今後の活動に活かそうと思った。
- ・日常の生活や友達関係でも使えそうなもので、今後の人生に役立つものだった。
- ・具体例を交えての説明だったので、とても分かりやすかった。

講師からのメッセージ

自分とは違う価値観を持つ相手の世界を理解することは容易なことではありませんが、理解するための努力はできます。傾聴はテクニックではなく他者尊重の姿勢だとお伝えしたいと思っています。ピア・サポート活動のみならず、まさに今後の人生における他者との関係づくりに活かしていただけすると嬉しく思います。

⑦「ボディワーク『身体を通して“思いやり”について考えよう！』」概要

はじめに、コンパッション（慈悲）について共感との比較を通した説明があった。コンパッション・トレーニングを行い、コンパッションのきもちを高めることで、辛い想いをしている人を見たときにとる行動、また相手の辛い想いを和らげることができたときに自分自身が受け取る感情等に違いが生じることであった。

また、コンパッションは頭で考えるだけではなく、身体で感じることが大切であり、そうすることで他者に対する態度が変わるとの説明があり、その後、ボディワークに取り組んだ。

ボディワークでは、ペアになり3つのワーク「タッチできもちが伝わる!?」「トリガー・ワーク」「ハートを重ねる」を行い、相手の身体に触れることで、相手に意識を向け続けることの難しさや相手に合わせることの大切さ、お互いのリズム・波長等があったときの心地よさ等を体感した。

受講者の声

- ・このワークでは時間がゆっくり流れ、人の温かさや自分の気持ちに気付けた気がする。
- ・普段の生活の中では感じられない気持ちであったり感覚を得られ、思いやることを考えられた。
- ・いつもは頭で考えているけど、体で考えたり感じることができて、とても良いリフレッシュになった。

講師からのメッセージ

ピア・サポートの根幹にある「相手を思いやる」きもち。私たちは、自分の身体＜からだ＞を通して、相手の辛さを理解しようとし、その思いを行動に移すことができます。皆さんも、サポートする主体としての身体＜からだ＞に意識を向け、相手も自分も幸せになるピア活動のあり方を考える、そのような機会になればと思います。

⑧「ストレスマネジメント」概要

はじめに、メンタルヘルスやストレスについて説明があった。ピア・サポート活動におけるストレスについてもふれ、日頃の活動を振り返り、気づきを得る機会とした。

次に、ストレスマネジメントについて説明があり、自分の思い込みを知るワークを行った後、リラクゼーションのためのボディワークを行った。自分の思い込みを知るワークでは、個人で「信念のチェックリスト」に記入し、集計を行うことで自らの傾向を確認した。ボディワークでは、ストレスがたまると凝りやすい肩や首回り、背中をほぐす動きを中心に行った。

受講者の声

- ・無意識の内に多くのストレスがたまっていることに気づけた。ストレスを無くするではなく、うまく付き合うことが大切だという言葉にすごく共感した。
- ・日頃様々な所でストレスを感じているが、どういったことでストレスを抱えているか自分自身で把握していなかったので、今回の講座はとても参考になった。
- ・ストレスへの考え方方が変わった。自分が思っているよりも自己非難的であるとわかったので、少しは自分に対して肯定的になりたいと思う。

講師からのメッセージ

ピア・サポート活動におけるストレスは、サポート活動にはじまり、コミュニティ運営、学業との兼ね合い、日頃の対人関係など、幅広い要因と関わっている。ストレスとのつきあい方は、ピア・サポート活動に限られたものではないため、キャンパスライフや今後の人生においても活用してもらいたい。

⑨「『怒り』の感情と上手につきあうために～アンガーマネジメントのすすめ」概要

4~5名のグループに分かれて着席し、お互いを褒め合うアイスブレイクを行った後、アンガーマネジメントとはどういうことかについて大枠の説明があった。続いて、怒りの感情について詳しい説明があった後、ここ1週間の「すごく頭にきたこと」「まあまあ腹が立ったこと」「軽くイラッとしたこと」を振り返るワークを行った。

その後、【アンガーマネジメントの3つの暗号】と題して、怒りをコントロールするための3つのヒントを学んだ。具体的には、【衝動のコントロール】では怒りの感情のピークは長くて6秒ということ、またその6秒を待つための方法などを学んだ。【思考のコントロール】では私たちを怒らせるものの正体である「べき」について学ぶとともに、グループワークを通して自分の「べき」と他人の「べき」の違いを知った。【行動のコントロール】では身近な人ほど強く怒るなど怒りの性質や自分は変わることができるが他人は変えられないこと、また自分が変わることで他人も変わることを学んだ。

受講者の声

- ・怒りの感情について詳しく知ることができてよかったです。
- ・自分で中でうまくコントロールすることができれば“怒り”というものはそんなに悪いものじゃないのかなと感じた。
- ・自身のコントロール（マネジメント）だけでなく、他者に対しての対応といった部分でも役立つと思った。

講師からのメッセージ

この度、ピア・サポートの皆さんとワークする機会をいただき、感謝しております。

“怒り”の正体は？自分の“怒り”の感情表現（どう伝えたいのか？今怒るのか？怒らないのか？）を後悔しないことがアンガーマネジメントだと理解していただけでしょうか？

先ず、イラッをイライラに変えない6秒ルール。キレイなための自分だけの魔法の言葉は決まりましたか？ご自身のアンガーマネジメントから始め、“怒りの連鎖”を断ち切りましょう。

5 スキルアップ講座全体として

正課教育科目担当者を始め、これまで本学のピア・サポート活動支援に携わり、かつ専門的知識を有する方々の協力を得て、コア講座3つ、選択講座6つ、合計9つの多彩な講座を実施した。

「4 概要・受講者の声・講師からのメッセージ」にあるように、いずれの講座も非常に充実した内容であり、多くの学びや気づきを得たり、これまで振り返るよいきっかけになったと思料する。

ほぼ全ての講座でワークが取り入れられており、ワークを通して他者との共同作業に取り組み、協力して何かを成し遂げたり、自分とは異なる考え方や視点に触れる機会となつたが、参加者数が多ければより学びが深まり、さらに充実した時間になつたのではないかと残念に思うことがあつた。

スキルアップ講座の受講を通して、ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキルや知識を身につけられることはもちろん、普段とは違う角度から物事を捉えたり、これまでの経験を振り返り整理することで、日常の活動の意義がより大きく感じられるようになつたり、より能動的に活動できるようになつたりと、ピア・サポート活動を通じた学びを一層深いものにすることができると考えられる。

こうしたスキルアップ講座を受講することの意義を伝えることにも力を入れ、ひとりでも多くの受講に繋げていきたい。

3.5 効果測定

- 1 実施目的 ピア・コミュニティに所属する学生を対象に、①自らについて振り返る機会を提供し気付きを促すこと、②その気付きを集約しピア・サポート活動を行うことの効果としてまとめることを目的として、「ピア・サポート活動に係るアンケート」を実施した。
- 2 対象 シニア・サポート、ピア・サポート、研修生
- 3 実施方法 平成28年1月～3月の間、ボランティア活動支援グループ職員が、各コミュニティのミーティングに出向き、20分程度で実施。なお、アンケート未回答者に対しては、各コミュニティ代表者を通じてメールを送信し、メールでの回答も受け付けた。
- 4 回答数 36件（メールでの回答1件を含む）
- 5 概要
- ・「社会人基礎力尺度」（関西大学版）【山田・押江・田中、2009】を「ものさし」として自己評価し、気付きを得る。
 - ・ピア・サポート活動を始める前、もしくは1年前と変化したと思う項目について、自由に記述することで振り返る。
 - ・なぜそのような変化が生じたか（生じなかつたか）を自由に記述することで振り返る。
- 6 整理方法 「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」は、ピア・サポート活動での様々な体験を通して、社会人基礎力※や他者を思いやる豊かな人間性の涵養を図る取組である。よって、学生から得られた主な回答を、社会人基礎力で挙げられている「12の能力要素」および「他者を思いやる豊かな人間性」で分類した。
なお、個人の特定につながる表記については、一部変更・削除を行った。
※「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え方」、「チームで働く力」の3つの能力（「主体性」「課題発見力」「発信力」等の12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している。
- 7 回答
- 問I. ピア・サポート活動を通して生じた変化はありますか？過去（活動期間が1年未満の方はピア・サポート活動を始める前、活動期間が1年以上の方は1年前）のあなた

たと比較して、自由に書いてください。

問Ⅱ. なぜそのような変化が生じたのか（生じなかったのか）、気付いたことを自由に書いてください。

問Ⅰ	問Ⅱ
【主体性】物事に進んで取り組む力	
・自分が中心となってピア・サポート活動を周りのサポートと共に行えるようになった。	・色々な企画を行ったりすることで自分に自信を少し持てるようになったことと、団体を管理する側になり、自分で動かなければならなくなつたことから、ピア・サポート活動に対してより積極的になれた。
・活動に積極的になった。	・代表を務めたことで、ミーティングの進行、企画、活動を仕切る機会に恵まれたから。
・ピア・サポート活動を始めることも私にとって少し勇気がいることであったが、新しい環境に進んで入っていくことのおもしろさ、大きさが分かった。人の役に立ちたい、とより思うようになり、仲間とのコミュニケーションも積極的にとるようになつた。	・自分から勇気を出して動けば良い意味でも悪い意味でも環境は変化するし、おもしろいと感じたためだと思う。
・責任感は増した。1年前はメンバーの1人としてただ参加していた部分も多かったが、自分がやりとげなくてはいけないと思うことは増えた。	・代表を任せられたため。また、他のメンバーが今年入ってきた方々ばかりで、これまでの1年の経験を共有する人がいなかつたため。
・自分から手伝いなどの“動き”をすることを学んで行っていると思う。	・先輩方に見本を見せていただいているから。

【働きかけ力】他人に働きかけ巻き込む力	
・他人に何か依頼する上でのコツをつかんだ気がする。	・代表を務めたことで、ミーティングの進行、企画、活動を仕切る機会に恵まれたから。
・自分自身の仕事が増えたので、1つ1つを把握しているつもりでも抜けている所があつたりしたが、お互い分担し助け合いながらできたと思う。	・最初はしなければならないという強制的な義務感だったが、積極的に楽しい感じになってきたのでよかったです。人のつながりとして、縦のつながりも横のつながりもできてよかったです。
・様々な企画や会議に参加して多少はうまくアドバイスができるようになったかなと思う。後輩達へのアドバイスを通して、自分の今までのピア・サポート活動を振り返るいい機会にもなつた。	・上位年次になってアドバイスをする機会が自然と増えていったから。
・1人ではなく、仲間と協力・分担して企画を進めていくようになった。	・ピア・サポート研修などで学んだから。
・スケジュール管理についての重要性や、他者との連携の必要性。	・企画を通して色々なことを経験し、人に頼るより自分でする方が楽と思っていたが、自分1人ではできないことが多かつたから。

【実行力】目的を設定し確実に行動する力	
・わからぬことをそのままにせず、確認するようにした。復唱することを心がけた。	・お互いの考えを理解しつつ、すばやく出来るように心がけてきたから。

【課題発見力】現状を分析し目的や課題を明らかにする力	
・企画を行うとき“何を目標にするのか”ということを考えるようになった。	・二、三年次生の方と一緒に企画を行っていく中で学び、変化が生じたと思う。

【計画力】課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	
・計画はやっぱり大事だと感じた。	・ある企画の実行の結果、計画がおろそかになってしまったので、企画的に中途半端なものになってしまったから。
・企画の活動を通して計画の見直しをするようになった。	・人と一緒に何かをしたり、コミュニケーションを積極的にとるようになったからだと思う。
・最低限やらなければいけないことに対して、優先度を付けるようになった。	・授業、課題、ピア活動といったやらなければならないことが増え、優先度を付けないと終わらなくなつたから。

【創造力】新しい価値を生み出す力	
・企画への取り組み方に新しい方法を知ることができた。いろいろな考え方や努力をしている人がいることを知ることができた。また、企画の手法などを知ることができた。	・ピア・コミュニティには志の高い人が集まっている傾向があるように感じる。自分が思いもつかない考えをその人は持っているので、大変刺激的である。そういった周囲の人々からの影響を受けてこの変化が生じたと考える。

【発信力】自分の意見をわかりやすく伝える力	
・相手への気持ちや情報の伝わりやすさを意識するようになった。	・ピア・サポート研修などで学んだから。
・自分の意見をより考え、述べるようになった。	・意見を発表する機会が与えられたから。
・メールで様々な人と連絡をとる機会ができ、伝わるように、失礼のないように文章を考えることになった。	・個人でなく全体に関わることなので、誤解があっては大変だと考えるようになったから。

【傾聴力】相手の意見を丁寧に聴く力	
・人についてより興味を持つようになり、人との関わりが増えたと思う。また、人の話を聞くスキルも身につき、人間関係が良好に築けるようになった。	・ピア・サポータとして多くの立場の人と関わることになり、研修や活動、講座に積極的に参加したことでスキルを身につけることができたと思う。また、そのスキルを身につけたことにより自信がつき、より人との関わりを持つようになったを感じた。
・人の目を見て話を聞くことが多くなったと思う。	・「聴く」ということについて学んだから。

【柔軟性】意見の違いや立場の違いを理解する力	
・他人の意見を受け入れる姿勢が成長した。	・代表を務めたことで、ミーティングの進行、企画、活動を仕切る機会に恵まれたから。
・人の意見に耳を傾けたり、もっと他人を理解しようと思うようになった。	・人と一緒に何かをしたり、コミュニケーションを積極的にとるようになったからだと思う。
・色んな人がいるということをより認識できるようになった。	・色々な企画をする際に、こんなことに興味がある人もいるんだなとか、思うことが多かったから。

【情況把握力】自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	
・進める立場になってから全ての状況を把握しながら進めるようになった。	・最初はしなければならないという強制的な義務感だったが、積極的に楽しい感じになってきたので、よかったと思う。人のつながりとして、縦のつながりも横のつながりもできてよかったです。
・役職に就いたことで、今まで自分のコミュニティしか考えていなかったが、全体を見なければならなくなってしまった。大変であったが、全体を見ることで、改めてピアの良さ、問題点を感じられるようになった。また、視野が広がったことで、考え方も1年前とは違った視点を持てるようになった。	・役職につき、今まで頼っていた上回生の方々が活動に参加する機会が減り、自分がまとめていかなければという責任感が生まれたからだと感じている。また、後輩ができたことで、今まで学んできたノウハウであったり、役割を伝えることで、自分自身の気づきにもなったと思う。
・相手の事情もくんだ上で、物事を見られるようになった。いつもできるだけ win win の関係を築けるようにしている。	・相手が相手自身の利益ばかり考えて行動していたら嫌な気持ちを自分はする。自分が何かする時は、その相手にこの気持ちを味わわせたくないと思ったから。

【規律性】社会のルールや人との約束を守る力	
・社会生活をする上での基本的なこと（時間厳守や話し方、聞き方など）を学び、自信がついた。また、責任感が強くなった。	・今までの高校までの生活よりもはるかに多くの人と接することで、実体験として学べることが増えたから。
・责任感は増した。1年前はメンバーの1人としてただ参加していた部分も多かったが、自分がやりとげなくてはいけないと思うことは増えた。	・代表を任せられたため。また、他のメンバーが今年入ってきた方々ばかりで、これまでの1年の経験を共有する人がいなかつたため。
・今まであまり計画性がなくだらだらと行動しがちだったが、それは自分の企画であってもそうすることで他の人に迷惑をかけてしまうと分かった。	・自分の企画であってもそれを紹介する文章を書いてくれる人がいて、自分の行動の遅さでその人に迷惑がかかってしまったから。
・依頼メールでの言葉遣いなどを少しづつではあるが吸収できている。	・先輩方に見本を見せていただいているから。

【ストレスコントロール力】ストレスの発生源に対応する力	
・昔よりは細かいことを気にしなくなったところ。	・色々な企画をする際に、こんなことに興味がある人もいるんだなとか、思うことが多かったから。

・自分があまり悩まなくなった、というのか、悩んでも仕方ないことは引きずらないようにするようになった。	・これはピア・サポート活動だけではないのだが、色々な人と触れ、色々なことを経験し、色々なことを学んだことで、成長したからだと感じる。
・イライラはするけど、溜め込むことはなくなった。	・ストレスを適度に発散した方がプライベートも楽しめて、それによりこの活動も楽しめるから。

【他者を思いやる豊かな人間性】	
・後輩が困っていることがないか考えるようになった。ただ企画を行うだけではいけないと感じた。	・世代交代して時間に余裕が持てるようになり、コミュニティ全体のことを考えることができるようになったと思う。自分が思っていた以上に、組織でやっていくことの難しさを感じたため。後輩が困っていることがあれば対応しようと行動するようになった。
・主観的に動くのではなく、参加者側のことを考えて動くようになった。	・企画ごとのニーズ調査やアンケートにより参加者の意見に触れる機会が多かったから。
・比較的他者について考えられるようになったと思う。	・ピアを通じて周りの人について考えさせられる機会が多くなったからだと思う。
・始める前よりは困っている人に声をかける回数が増えたと思う。	・ピアでの活動で、いろんな活動があることを知り、人に対して積極的な気持ちになれるようになってきたからだと思う。
・副代表になったことで、メンバーへの気配り、責任感など意識するようになり、それに見合ったような行動をしていくよう心掛けるようになってきた。	・前代表・副代表と代替わりの話をしたのがきっかけで、それぞれのコミュニティへの想い、僕達に期待してくれていることを知って、変わらなければならないと感じたからだと思う。

【その他】	
・人の話を聞くのが好きになった。人見知りをあまりしなくなった。	・人と話す（情報共有）機会が増えたため。
・会議等の場が苦手であったが、会議の大切さなどが分かってきた。	・ピアに入ったことで、会議が必須になったから。
・自分の持つ能力をどのように使えば良いのか、また欠点をどのように補えばいいのかを理解した。	・コミュニティで企画を担う内にそのような変化が生じた。
・ドライブの使い方、企画書の書き方など物事を進めるための基本的な部分を身につけることができたと思う。	・二、三年次生の方と一緒に企画を行っていく中で学び、変化が生じたと思う。
・他学部や留学生といった普段学部の講義を受けているだけでは得ることができない友人がとても増えた。	・コミュニティに入ることで交流イベントに参加したり、宣伝する機会が増えたので、留学生や他学部の日本人学生と接触することが多くなったからだと思う。
・1年前は自分が主体的に企画の進捗をみていたし、進めてもいた部分はあるけど、今は完全に後輩に任せられているのでとても気楽になった。	・後輩への引き継ぎはかなり上手くいったと思う。早めに代表、副代表を決めることで「次は自分が上に立つんだ」ということをいち早く意識してもらえたと思うし、私のそのつもりで、リスクの排除、後輩への引き継ぎができた。

<p>・ピア・サポートで培った能力を他の場面でも活かしつつ、適材適所で後輩のサポートができればいいと思う。</p>	<p>・私の代表として一番大きな使命は、コミュニティを存続させることにあったので、新入生が入ってこない等の懸念はあつたものの、活気を失わずにコミュニティが続いてくれて、後輩に感謝している。</p>
---	--

8 昨年度との比較

本アンケートは昨年度から実施しているものであり、36件の回答中、10件が昨年度に引き続いての回答であった。

全体としては、昨年度と同様、ピア・サポート活動を行う中で生じた様々な変化やその理由等について記載されており、ピア・サポート活動を行うことの意義が読み取れるとともに、アンケートに回答することが、それぞれの学生にとって自らの活動に意味づけを行ったり、自らの現状・変化・成長、そして今後の課題を認識する良い機会になっていると考えられる。

なお、これまでに2度回答した10名の問Iに着目し、個々の学生ごとに平成27年度の回答と平成26年度の回答を比較したものは下表のとおりである。平成26年度の回答ではいちサポートとしての成長・変化に関する記載が中心となっているが、平成27年度は組織における自らの成長・変化に言及する記載が多く見られ、ピア・コミュニティでの活動期間や役割の変化等が、学生の社会化を促し、さらなる成長をもたらしていることが伺える。

	平成26年度の回答	平成27年度の回答
①	<ul style="list-style-type: none"> ・ピア・サポート活動を始める前は、あまり会議などで発言したり、進行をしたりということは、人に言われるまで消極的であったが、現在は、積極的とまではいかないが、様々な意見があり、どんなに些細なことでも、発言することで、行き詰まっていたことや、新たな方向性が見つかることを活動を通して知り、思いついたことがあれば言うように意識が変わった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度からの大きな違いは、役職に就いたことで、今まで自分のコミュニティしか考えていなかったが、全体を見なければならなくなった。大変であったが、全体を見ることで、改めてピアの良さ、問題点を感じられるようになった。 ・視野が広がったことで、考え方も1年前とは違った視点を持てるようになった。今年度は、自分自身で成長を実感できた年になった。
②	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のことを意識できるようになった。 ・様々な考え方等があるというおもしろさに気づいた。 ・自分から何かしようと思うようにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進める立場になってから全ての状況を把握しながら進めるようになった。一方で、自分自身の仕事が増えたので、1つ1つを把握しているつもりでも抜けている所があったりしたが、お互い分担し助け合いながらできたと思う。
③	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴とかを学び、話の聞き方を学べた。 ・代表者会議などを通して、組織間の連絡や情報伝達の方法を学んだ。 ・役割や仕事量の偏りについて考えたり、みんながピア・サポートについてやりがいを感じられるようにといった、他者への配慮の気持ちが生まれたと思う。組織や協同で作業することについて考えさせられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年前は自分が主体的に企画の進捗を見ていたし、進めてもいた部分はあるけど、今は完全に後輩に任せられているのでとても気楽になった。 ・ピア・サポート活動で培った能力を他の場面でも活かしつつ、適材適所で後輩のサポートができればいいと思う。

④	<ul style="list-style-type: none"> 1年以上前の自分は、人前でしゃべったり、先輩や同期の人たちともうまくコミュニケーションをとって協力するということができていなかった。1年間ピア・コミュニティで活動していく中で、少しづつではあるが改善され、うまく協力することができるようになった。 指示されたこと、頼まれたことしかできない、しない状態だったが、今では、今何が必要か自分で考え、こなすができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な企画や会議に参加して多少はうまくアドバイスができるようになったかなと思う。後輩たちへのアドバイスを通して、自分の今までのピア・サポート活動を振り返るいい機会にもなった。
⑤	<ul style="list-style-type: none"> 1年前はどんな活動をしているのかわからっていない部分も多かったが、最近はある程度わかるようになった。また、自分のコミュニティの状況もわかるようになり、今後のことも少しづつ考えるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年前は中心の時期で活動していたので、企画を進めることに意識が向かっていた。しかし次の世代になってからは、後輩が困っていることがないか考えるようになった。ただ企画を行うだけではいけないと感じた。
⑥	<ul style="list-style-type: none"> 意見が言えるようになった。約1年前は本当に無口だったが、会議や企画を通して、自分の考えをまとめ、口に出すということができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 主観的に動くのではなく、参加者側のことを考えて動くようになった。 1人ではなく、仲間と協力・分担して企画を進めていくようになった。 相手への気持ちや情報の伝わりやすさを意識するようになった。
⑦	<ul style="list-style-type: none"> 他人と意見が合わないとき、それにイライラするよりも前に相手のなぜこういう意見になるのかといったことを理解しようとし、また自分の意見がなぜそうなのかという理由を論理的に説明し、その上で中間の意見を見つけられるよう前向きに考えられるようになった。 精神がタフになった。 自分と異なる意見を理解できるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の事情も汲んだ上で、物事を見られるようになった。いつもできるだけwin winの関係を築けるようにしている。 イライラはするけど、ためこむことはなくなった。
⑧	<ul style="list-style-type: none"> 以前より、物事について深く考えるようになった。自分の意見に根拠を持たせられるよう意識できるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 責任感は増した。1年前はメンバーの1人としてただ参加していた部分も多かったが、自分がやり遂げなくてはいけないと思うことは増えた。
⑨	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を述べる、他者の意見を聞く等の際の姿勢が変わった。特に他者からの意見を受け、取り入れようとする態度を築くことができたように思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動に積極的になった。 他人の意見を受け入れる姿勢が成長した。 他人に何か依頼する上でのコツをつかんだ気がする。
⑩	<ul style="list-style-type: none"> 活動歴が短いため、ピア・サポート活動自体はあまり行えていないが、そのための企画や準備には携わるようになった。その結果、大学内で動こうとすることの難しさを知った。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年前は、何か企画を行うにしても常に先輩の指示に従うだけで、あまり主体的に動くことはなかった。しかし今では、自分が中心となってピア・サポート活動を周りのサポートと共に見えるようになった。

9 所 感

本アンケートは2年目の実施であり、単年度では見出せなかつた何かを見出せるので

はないかと期待していたが、個々の学生の経年比較において如実に確認することができた。アンケートを継続して実施することの意義をあらためて認識するとともに、アンケートの回答を個別に学生にフィードバックすること等を通して、さらなる成長に繋げていきたいと考える。

一方で、昨年度から回答数が 19 件減少した。この 1 年を振り返ってほしいとの想いからこれまで年度末に実施してきたが、休業期間に入ると帰省や留学等のため大学に来ない学生が多数いるため、実施時期の変更等、回答数を増やすための方策について検討していきたい。

4 学生支援室の活動報告

4.1 学生支援室の役割と主な活動

学生センター内に設置されている「学生支援室」では、正課教育科目の支援をはじめ、正課外教育プログラムの実施（ピア・サポータへの研修を含む。）やピア・コミュニティの支援等を行っている。

ここでは、TA（ティーチング・アシスタント）が中心となり活動を行っており、上述の全般的な補助業務とともに、ピア・サポータに対する助言を、教職員とともに協働して行っている。また、学生と大学がうまく連携できるように橋渡し的な役割も果たしている。

平成27年度に力を入れた活動としては、研修生がピア・サポータとして活動するために必要となる知識・スキル等を身につけてもらうことを目的とする「関西大学ピア・サポート研修」をブラッシュアップさせ実施したこと、全コミュニティのメンバーが対象となる「サマーワーク」「ピア・コミュニティ春合宿」においてTAとしてワークを担当し実施したことが挙げられる。また、今年度のTAのうち半数が新規もしくは経験の浅いTAであったことから、継続的・安定的に学生支援室の機能が果たせるようにするため、新規TA研修の実施に加え、日常においても引き継ぎと連携の強化に力を注いだ。

これらを通して、今後も継続的そして発展的にピア・サポート活動を行っていくために必要となる知識・スキル等の共有や伝承を行い、さらにはピア・サポート活動支援に携わる人同士の繋がりを強めることができた。

TAは、正課教育科目と正課外教育プログラムのどちらにも関わる存在であり、その果たす役割は大きい。また、ピア・コミュニティ支援を行うには、ピア・サポートに関する専門的知識やピア・コミュニティに対する理解等が必要となるが、教職員については、役職者の変更や人事異動による交代が避けられないことから、質的・量的に十分なピア・コミュニティの支援を継続的に行うためには、TAの存在が重要となる。

TAと教職員の連携をさらに強化しつつ、ピア・サポート活動を学生たちと共に育む機関として、今後も学生支援室を継続して運営していく所存である。

4.2 新規TA研修

「新規TA研修」報告書

1 実施の経緯

学生支援室TAは、本学のピア・サポート活動において、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」の支援はもちろん、ピア・コミュニティの活動支援やピア・サポートからの相談対応、ピア・サポート研修の実施等、非常に重要な役割を担っているが、それらの対応は、TA各自の研究活動や支援活動で得られた経験則に依拠して行われてきた。

しかし、TAにも世代交代があることから、今後も継続的に安定したピア・サポート活動支援を行っていくためには、TAとしてピア・サポート活動支援を行う際に必要となる基礎的な知識や技能、姿勢についての研修プログラムを策定し、習得できるようにする必要があった。これに対応するため、多くのTAの協力を得て平成25年度から準備を行い、平成26年度から「新規TA研修」として実施している。

2 目的

学生支援室TAとして、ピア・サポート活動支援を行う際に必要となる基礎的な知識や技能、姿勢を身につけることを目的とする。

3 参加者

学生支援室TA（継続TAについても、受講者または講師として参加）

ボランティア活動支援グループ職員

※一部プログラムについては、ピア・コミュニティ支援部署職員も参加

4 概要

研修項目・方法について、平成26年度に実施した「新規TA研修」をベースとしながら、TAとして活動するにあたって身につけておくべきこと、また新規TAが不安に感じていることなどを話し合い、優先順位が高いと思われるものから講義・ワークを実施した。

表 平成27年度 新規TA研修

研修項目	方法	実施日
ピア・サポートの理念	講義・書面	5月13日
ピア・コミュニティと支える人々	書面	—
TAとしての心構え	講義	5月13日
正課授業（授業目的と今までの流れ、TAの役割）	書面・日常	—
コミュニティ支援（担当コミュニティについて知る）	書面・日常	—
コミュニティ支援（サポートとコミュニケーションをとる際の大事なところ）	日常	—

研修項目	方法	実施日
コミュニティ支援（コミュニティ活動の流れ）	講義・日常	6月17日
コミュニティ支援（会議）	日常	—
コミュニティ支援（企画）	ワーク	6月11日
コミュニティ支援（書類作成）	書面・日常	—
担当部署職員との連携	日常	—
TA同士の連携	日常	—
自己理解・他者理解	ワーク	6月10日

5 所 感

今年度、TA6名のうち3名が新規もしくは経験が浅いという状況であり、学生支援室を運営するにあたって、厳しい状況になるであろうと予想していた。

しかし、個々のTAの資質や学生支援室全体としての連携・協力もあるのだろうが、過年度のTAが遺してくれた「新規TA研修」を始めとする資料・プログラム等のおかげで、学生支援室としての役割を十分に果たすことができた。

そういう意味で、本研修はその意義・効果とも十分に認められるものであると考えるが、支援活動を行いながら研修を行うのは時間的にもキャパシティ的にも難しいところがあり、研修（講義・ワーク）として想定していた内容すべてを実施することはできなかった。また、TAミーティングの時間の一部を割いて行ったことで、研修として中途半端になってしまったものもあった。

本学においてピア・サポート活動に継続的・発展的に取り組んでいくためには、シニア・サポート制度を導入したとはいえ、TAからの支援が重要であることに変わりはない。TAにとって過度の負担とならないよう配慮する必要があるが、TAによる様々な支援の質を維持・向上させていくために、引き続き、TAと意見交換を重ねつつ、新規TA研修の充実に向けて取り組んでいきたい。

4.3 学生支援室 TAからのメッセージ

TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 氏原令賀

2015年5月、同じ研究科の先輩のご紹介で、ピア・サポートに関わる機会を頂きました。私は、外部からの大学院進学であったこともあります、ピア・コミュニティがどのようなものなのか、具体的にどのような活動を行っているのかについてはほとんど知らなかったため、手探りながらのスタートとなりました。短い期間ながら、関わらせて頂いた上で感じたこと、学んだことを書いていこうと思います。

【関西大学ピア・コミュニティ入門、関西大学ピア・サポート研修】

春学期では、主に正課授業である「関西大学ピア・コミュニティ入門」に関わらせて頂き、授業中のグループワークで必要に応じてファシリテーションなどを行いました。最初は自分が人見知りだったこともあります、どういう風に学生たちと接すれば良いのかわかりませんでした。しかし、ワークのやり取りの中で、最初から意見を出すがはりきり過ぎて途中から疲れてしまう人、意見を出すことが苦手だがまとめることが上手い人、ディスカッションを円滑に進めようと話題を振る人など、個人によってそれぞれの気質や得意、不得意な分野があることに気づきました。そのため、ファシリテーションの際には、個人の気質に合わせ、得意な分野が發揮できるような雰囲気を作るように心がけました。

また、関西大学ピア・サポート研修では、コミュニケーションを担当させて頂きました。コミュニケーションとは、ピア活動だけでなく、どこにいっても必要とされる、とても大切な社会スキルです。このワークでは、他のワークと比べて「人と話すときは相槌を打つ」など、“当たり前”なことを伝える場面が非常に多いです。それは、“当たり前”であるからこそ重要である反面、見落としがちな部分も多いため、改めてコミュニケーションというものを考える必要性があるからだと感じました。これらのことと含んで、今後の課題としてこの“当たり前”的重要さをもっと伝えることができるようなワークの取組みや、資料の作成が必要だと思います。

【コミュニティとの関わり】

私は「KUコアラ」と「KUサポートーズ」を担当させて頂きました。各コミュニティに参加している学生たちや活動内容をほとんど知らなかつた当初と比べると、慣れはしたものの、未だに悩むことがあります。それは、同じサポート同士や職員という立場ではなく、TAとして、各コミュニティに対して「どこまで介入するべきなのか」、「何をいつどんな伝え方をすれば良いのだろうか」ということです。各コミュニティのカラーがあるように、TAにもカラーがあり、サポートの仕方は個人の気質に応じて多様であり、バラエティを富ませることで対応の幅が広がる良さもあります。状況とケースに応じて、個々がその特徴を生かしながら支援にあたる際に、自分なりのサポートをしながら、サポートたちと共に成長していきたいと思います。

TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 木岡歩奈美

関西大学ピア・コミュニティ入門について

関西大学ピア・コミュニティ入門では、普段考えないようなことを題材にピア・サポートについて学ぶ場でした。さまざまな価値観を共有する場として機能していました。TAとしては、グループに分かれてのディスカッションの際にファシリテーターとなって学生たちの意見を聞いたり、積極的な発言を促すようにしていました。取り上げる題材は学生に身近な話題である「レンタルフレンド」、自分の今までの人生を振り返り、さらに将来を考える「自分史」など、わたしも勉強になることが多く学生と共に考えることを通し、さまざまな価値観が存在し、多様な人がいることを実感しました。また、ひとりで考えてもわからないことを仲間と共有することの大切さや、協力することの大切さも受講生と共に得ることができました。

コミュニティ支援について

わたしは2年間KUサポートプランナーのTAとして活動をしました。わたよりも長く活動しているサポートにはこちらが学ぶことの方が多いかったです。TAとしては一歩引いた立場であることからピア・サポート活動を見守りつつ、困ったことがあれば相談を受けることを心がけていました。解決策を提示するというよりは、共に考えることを大事にしました。年齢が近く、親近感を持って接してくれるサポートが多くいました。ピア・サポートの学生たちは自分たちでよく考え、行動することができます。しかし、その真面目さゆえに意見が衝突したり、思い悩んでしまうサポートもいます。衝突や思い悩むことも時には大事です。それをきっかけに成長できるようサポートしていきたいと思います。

関西大学ピア・サポート研修について

関西大学ピア・サポート研修ではコミュニケーションを担当させていただきました。ピア・サポートの活動に欠かすことのできないもののひとつとして、コミュニケーションの研修を行っています。研修ではコミュニケーションの基本となる傾聴の大切さや、それを実感できるようなワークを行っています。これからピア・サポートの一員として活動を行う研修生のみなさんのお役に少しでも立てるよう、これからも試行錯誤しながら研修を行っていこうと思っています。

TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 佐藤栄晃

今年度ピア・サポート活動に TA として主に関わった正課授業とコミュニティ支援について、報告する。

正課授業について

春学期の主な TA の活動として、正課授業「関西大学ピア・コミュニティ入門」へ携わった。基本的にはグループワークを行う際に、ファシリテーターとして参加した。最初は、学生たちとの距離感がうまくつかめず、また、学生たちも TA とはなにをする人なのかわからないのか、辺々しいやり取りが数回続くことになった。しかし、回を重ねることで学生たちとの接し方や、グループワークの中で学生が伝えたいことを引き出すにはどうすればいいのかといった自分がファシリテーターとはどういった存在なのかを、実践することで手がかりをつかむことができたように思う。TA として学ぶことが多い機会になった。

コミュニティ支援について

今年度は主に運営本部の支援を行った。運営本部では春学期は世代交代への移行期間であり、2年次生を中心に企画運営を行うことが多くなっていた。初めて任される運営について戸惑っていることもあるようであったが、各担当者が丁寧に引き継ぎを行っており、思いのほかスムーズにバトンタッチができているようであった。まずは、先輩たちから受け継いだ道筋に沿いながら活動を行っていたが、次第にその学年がもつ特色が現れ始め、新しい世代の基礎が出来上がってきたように思える。また、今年度はコミュニティ間の関係を強化するためにワーク企画を増やすなど、積極的に活動を行っていた。企画の準備段階では、その企画でなにが求められているかを調査することの大切さや、運営側の人数が少ないなかで参加してくれるサポートに満足してもらえるにはどうすればいいかといった面にも気を配ることができており、また、企画後の振り返りでは、反省点だけでなく今後に生かせる改善点など企画から得られた良い経験についても議論していた。秋学期からは待望の1年次生が加わった。今までとは違った見方や意見を出してくれる仲間が増えることで今後コミュニティとして活動の幅が広がるのではないかと思われる。

今年度は春学期から支援を行っているため、サポートとの関わりは深いものになってきた。深く関わり過ぎることは、客観性の欠落につながることになるかもしれないが、そういったやり取りを通して、サポートが求めていることがわかり始めたことも事実であり、今活動しているサポートたちが TA に求める役割がはっきりしていくことに繋がることになった。今後もサポートのニーズに合わせ柔軟な支援を行っていきたいと考える。

TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 西森臨

私は今年度の4月よりTAとしてピア・サポート活動に携わらせていただきました。ピア・コミュニティに主に関わった場面は、各コミュニティのミーティングやピアエリア待機でした。最初は、学部生ではなく、職員でもない立場で関わるということに難しさを覚えていました。しかし先輩TAの関わり方を見ていくうちに、関わり方は千差万別であって良く、正解はないとわかりました。そのように気づいてから、自分なりにTAとしてどのように関わることができるかを探りながらサポートと関わってきました。その中で、私がサポートとの関わり方について考えてきたことを以下に報告いたします。

私が特に重要視していたのは、サポートの自発的な活動と人間的成長でした。支援する側が、こうすればうまくいくのではないかと思うことがあっても、サポートにそうするように指示するのではなく、サポートが失敗しながらも自分で学び取っていくことができるよう、あえて多くは語らずに関わっていました。サポートには失敗させないようにと、助言したくなる気持ちが生まれますが、あまりにも多い助言はサポートが自分で考え、問題を解決する力の育みを阻害する可能性があるため、関わり方に工夫を凝らしていました。基本的に待ちの姿勢で、TAの助けを必要とするサポートには個別に対応していました。私が関わった中では、ミーティングをどうしたらよいか、今後どのようにメンバーと関わっていけばよいか、という話が多かつたように思います。サポートの話を聞くことで、サポートの思いを整理するための一助にはなったと思います。

以上のように考えながら関わってきましたが、課題は非常に多いと感じます。ピア・サポート活動は大学機関の事業であり、コミュニティの企画によっては大学の名前を背負いながら外部機関と関わることができます。そのため、サポートの失敗が許されない場面もあります。その中でTAとして待ちの姿勢で関わるのは、非常に難しいことだと感じてきました。この課題の対処について良いと思ったのは、関わる側の役割分担です。例えば、コミュニティの支援部署の担当職員からはサポートに適切な企画・報告書の作成を要求し、TAはサポートの整理がつかない思いを整理するなどのように、サポートに質の高いパフォーマンスを求める職員と、サポートの心の健康を支えるTAというように役割を分けて関わります。このように関わることで、サポートは大きく成長していくのではないかと思います。

最後に、ピア・サポート活動で関わらせていただいた方々に深く感謝申し上げるとともに、今後もピア・コミュニティの活動がより一層豊かになることを願っております。

関西大学ピア・コミュニティ 平成 27 年度報告書

発 行 : 平成 28 年 10 月

発行者 : 関西大学

編集者 : 中塚 義史

住 所 : 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

電 話 : 06-6368-1229

U R L : <http://www.kansai-u.ac.jp/gakusei/gp>

印 刷 : 大都印刷株式会社

